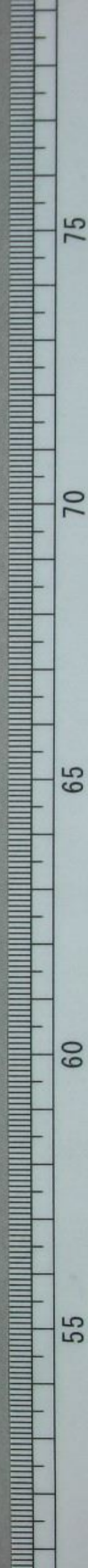


碁立絹篩前編

三

ヲ多
641
3



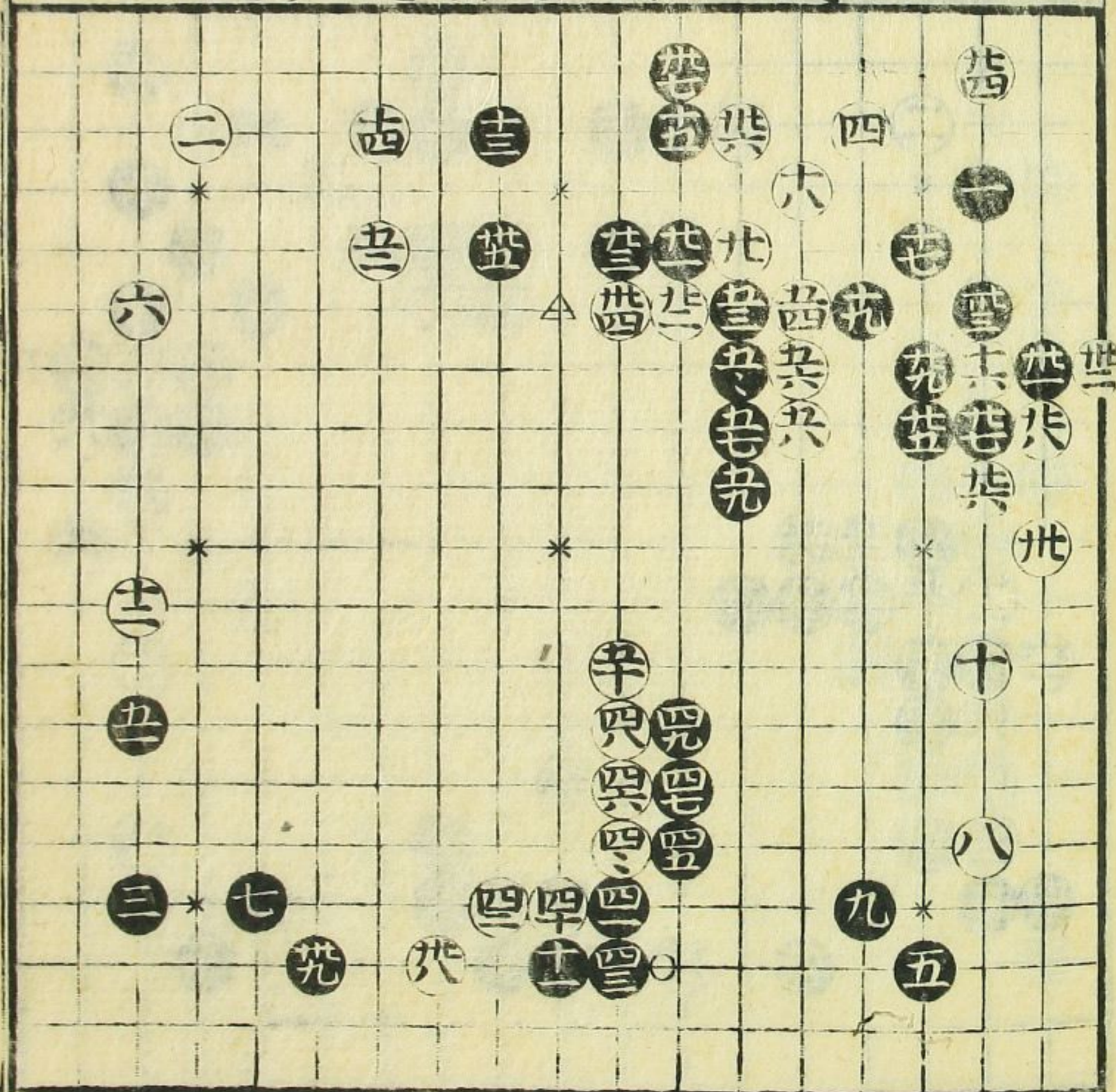


甚立絹師前巻三

才九く一

五十九と

白四十四平場坐ま
 少斯のこく白を
 移て出るこむ仲の
 後よりぬのまをく
 四十四とをひきまを
 一と黒の八四
 一のふ城の下のぬ
 る一斯のやくさる
 は白と重くして
 白の二の及有させ
 一ささるなり
 白五十二の母世四乃
 △下石を出て押せ
 斯のやく死んでも
 黒まればなり

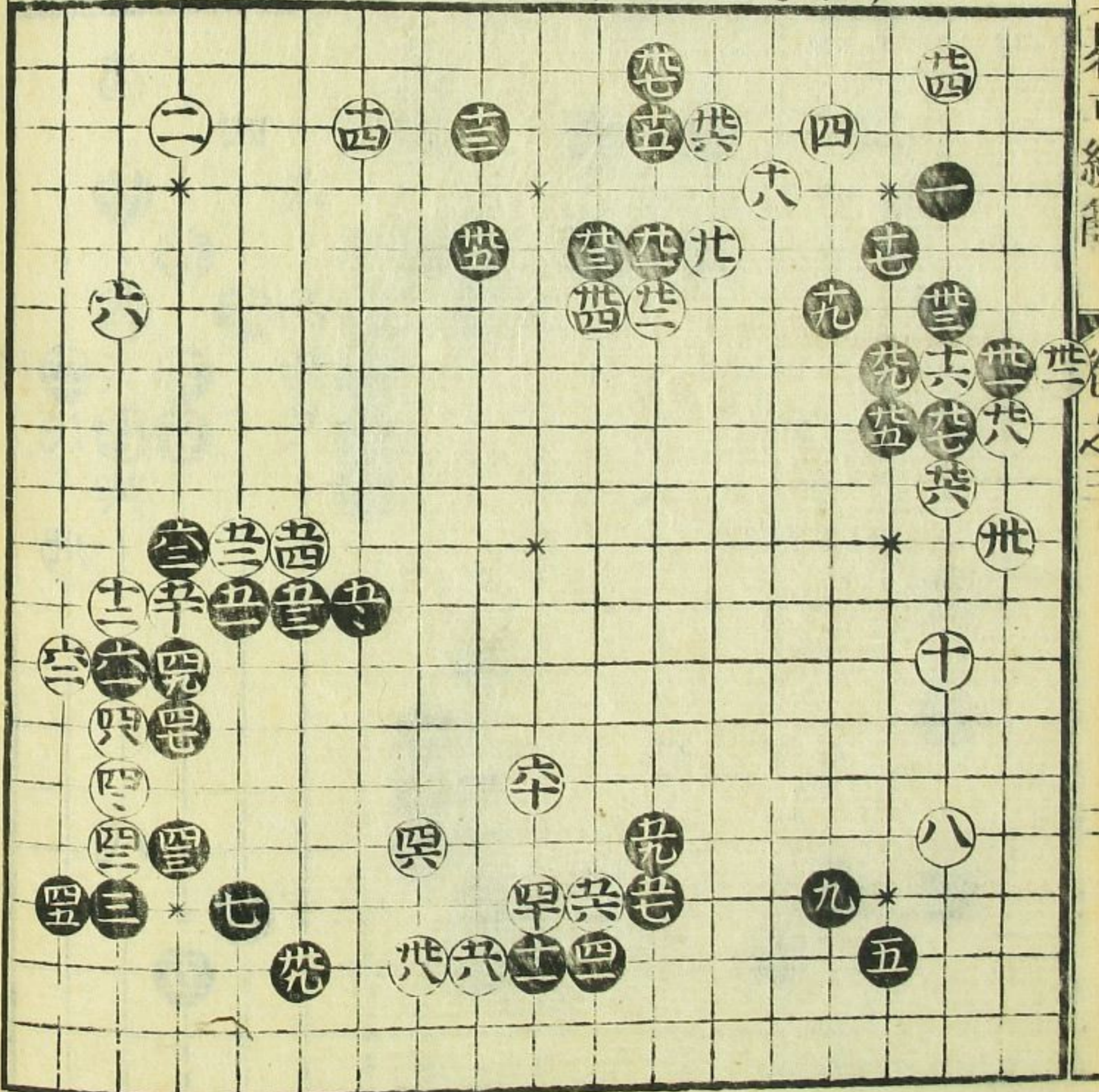


甚立絹師前巻三

才五く二

六十二まで

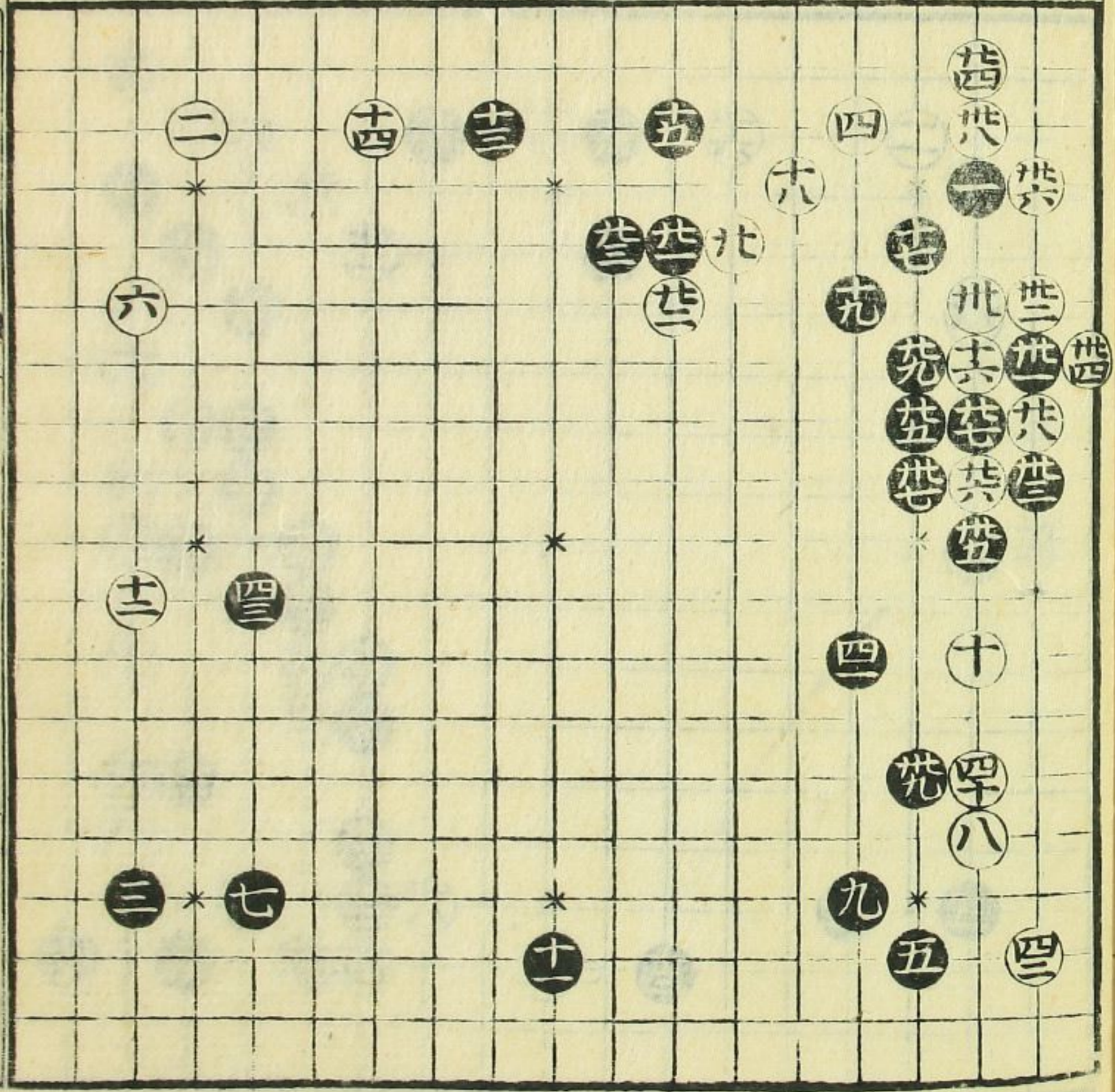
先執カひたしおろし
四十一をそと給はる
打を別のおろし
黒より黒六十一と出
て六十三にて角は
白地へおろし
つれくゆるはる
のありくは 口傳



才五く三

四十二まで

先執カひきりか
別のおろし
黒より黒お

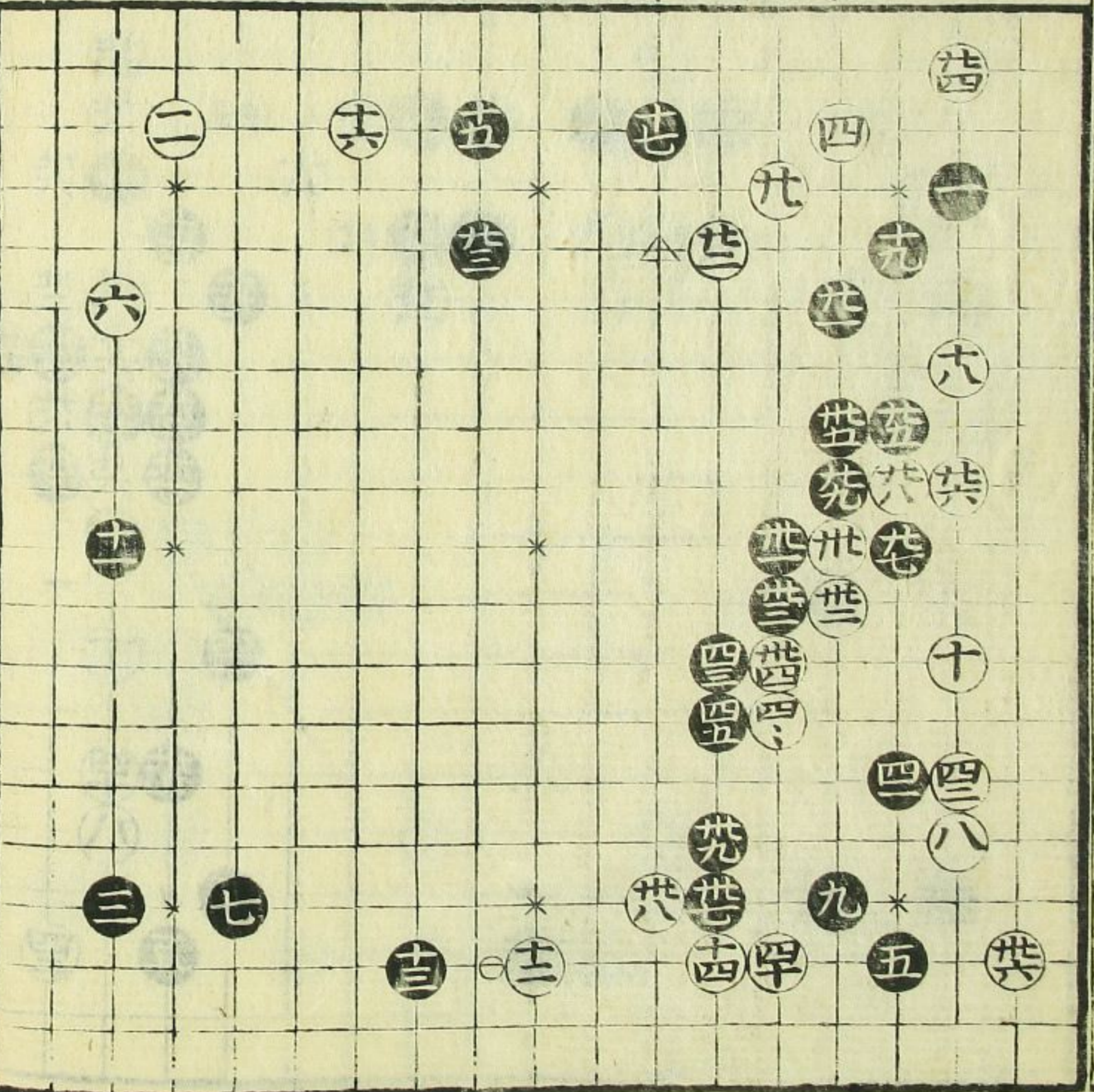


書立眉端

才五し四

四十八まで

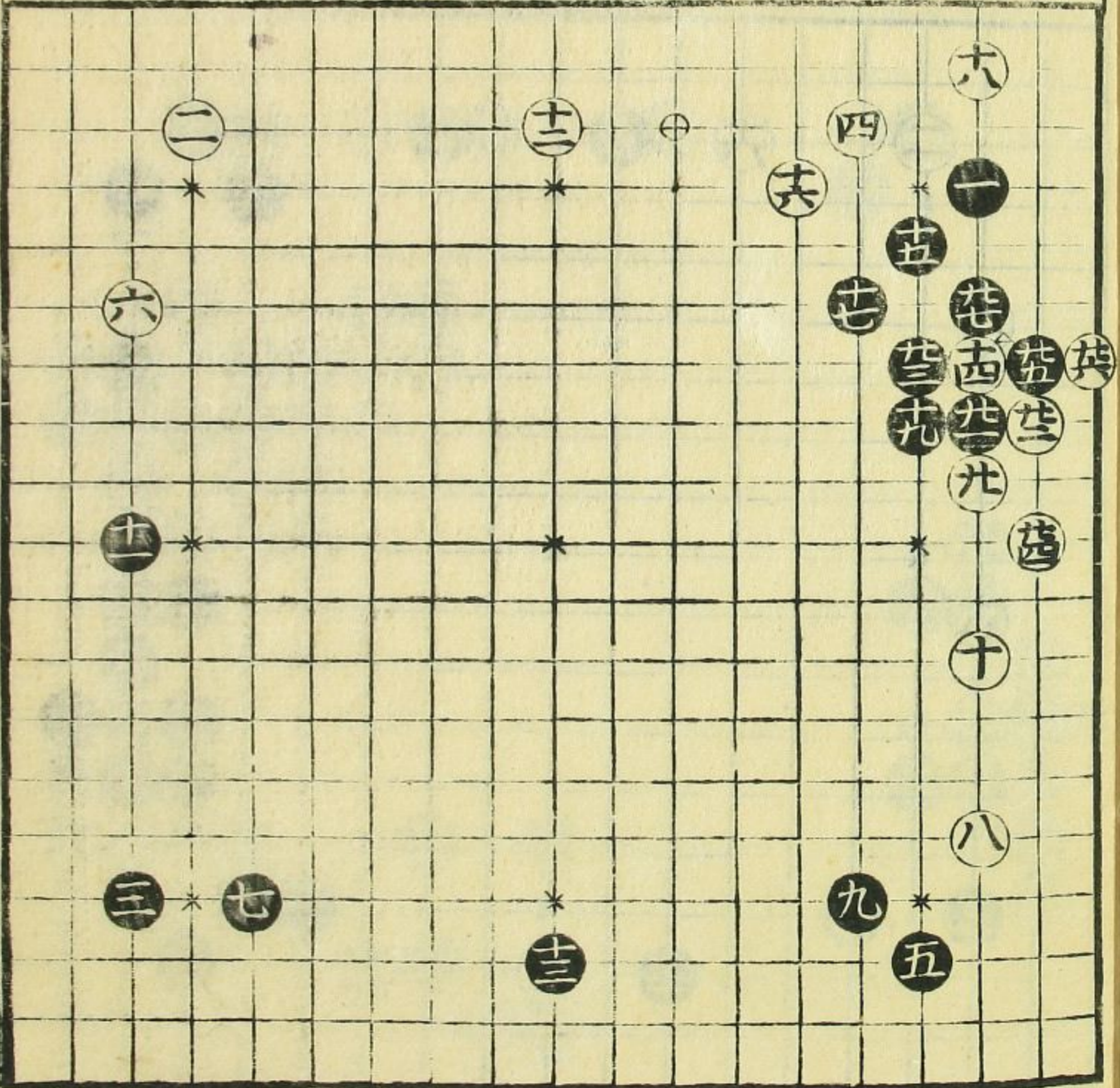
先勢ひ怪し黒十二
の白十二〇下の赤
一打にして駒のゆく
平場へ入ると黒は
能なり 口傳
二十の石まのこ
白の碁にからざる
黒より白二十二の
△印におぼして新
のふとく二十を
ぬかり 口傳



才五し五

二十七まで

先勢ひ怪し黒十二
の白十四の所
△印二回飛は二
のふとくをぬかり
てゆききりり
のことくへの揚を
しきほひてあへき
たり 口傳
駒のまゝ白平場
の度内白十四の
ふとく二石おぼして白
十二の印を
事ゆききりり

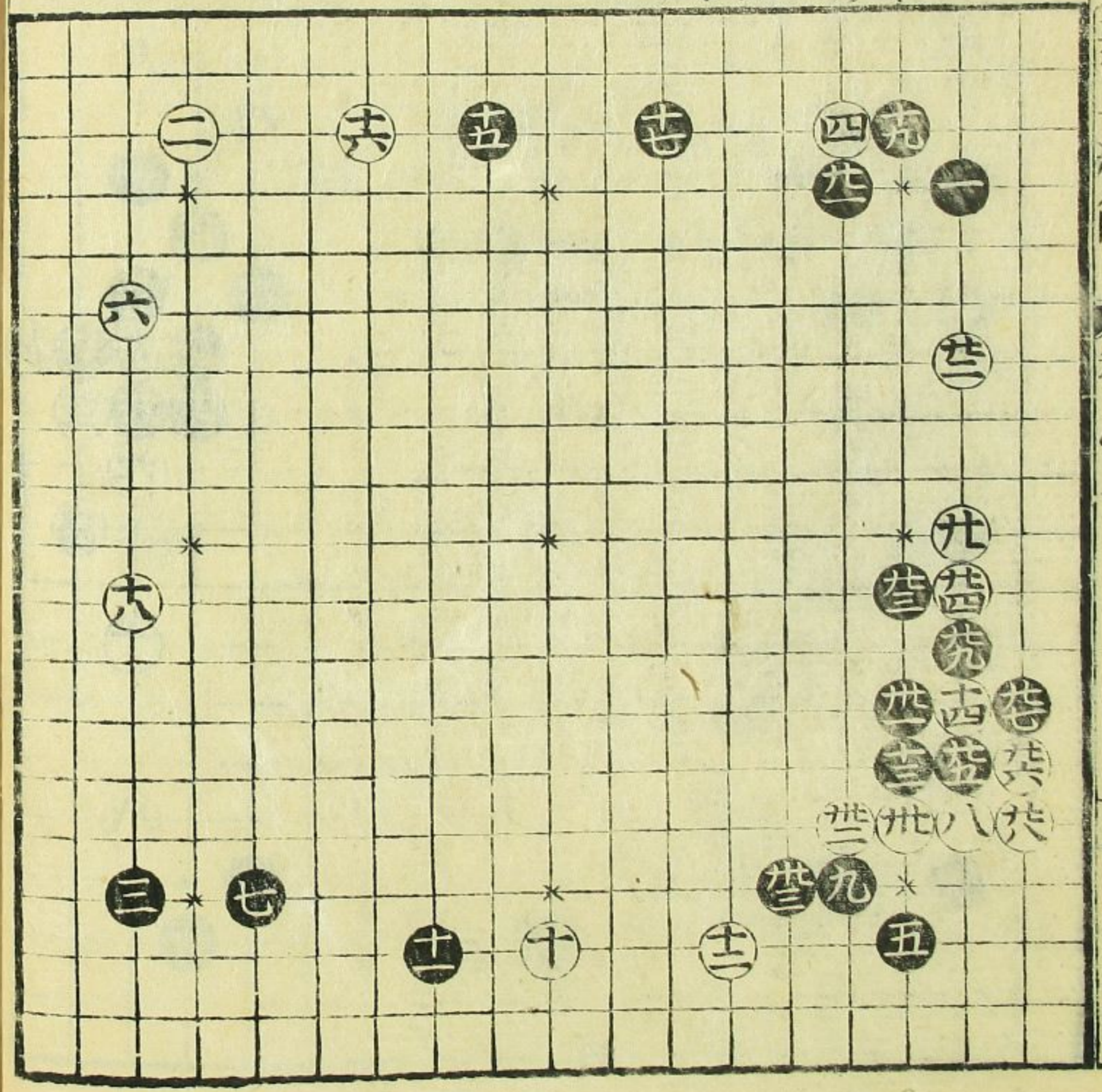


Vertical text on the left margin of the left page, likely a page number or chapter reference.

才五く六

三十三手

黒廿七の時方のやく
白より在八二角と拾
さ居るや 押はり
黒入場白落さぬ
南と居る事連ま
て能く居るなり

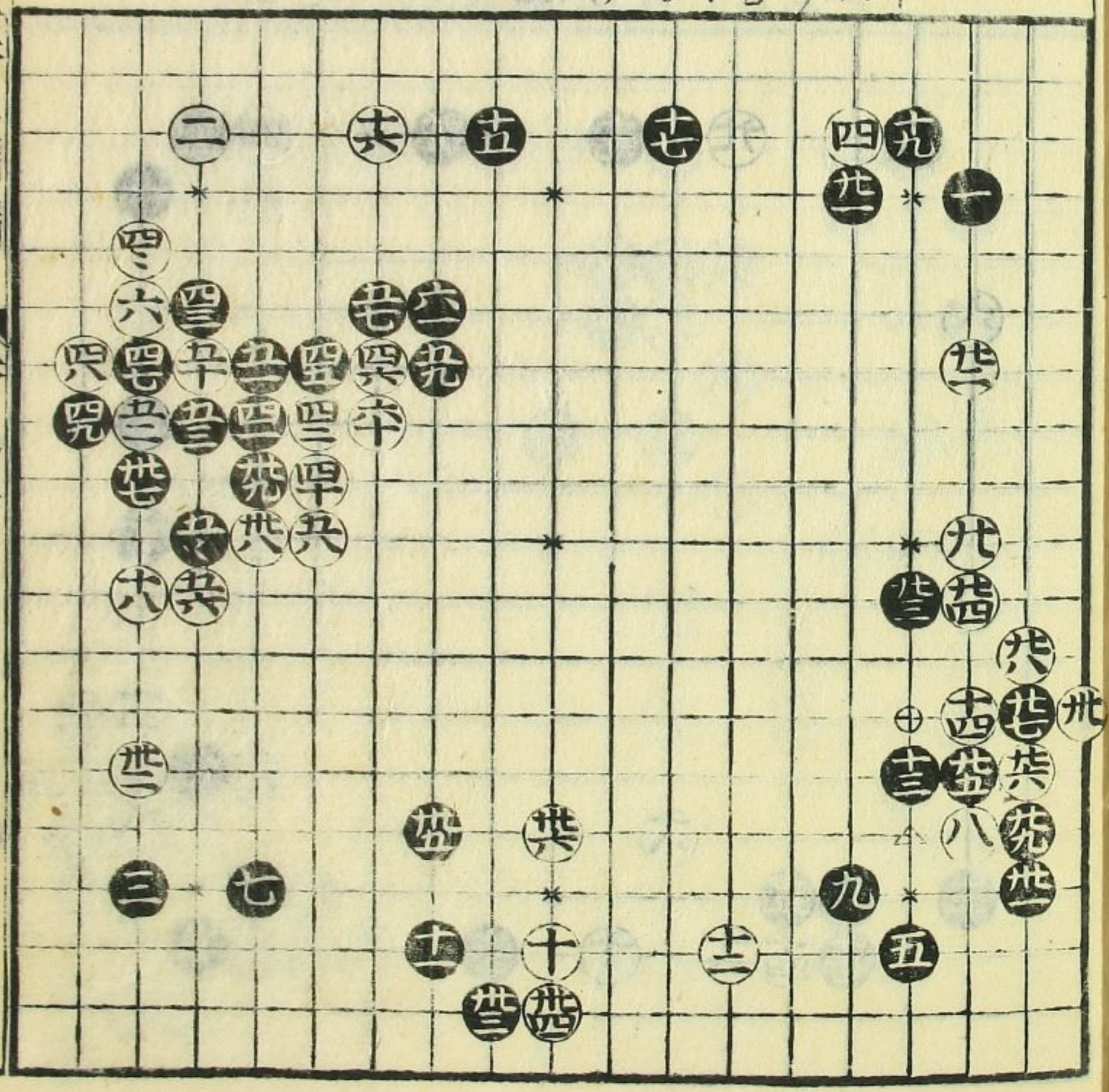


才五く七

六十一手

先勢ひ佳し黒三十
七の多白八二下成
押はりや 空を居り
去りあり入の白分
りあり黒廿七の中
の位○下入さば
時の駒のまゝお
かり

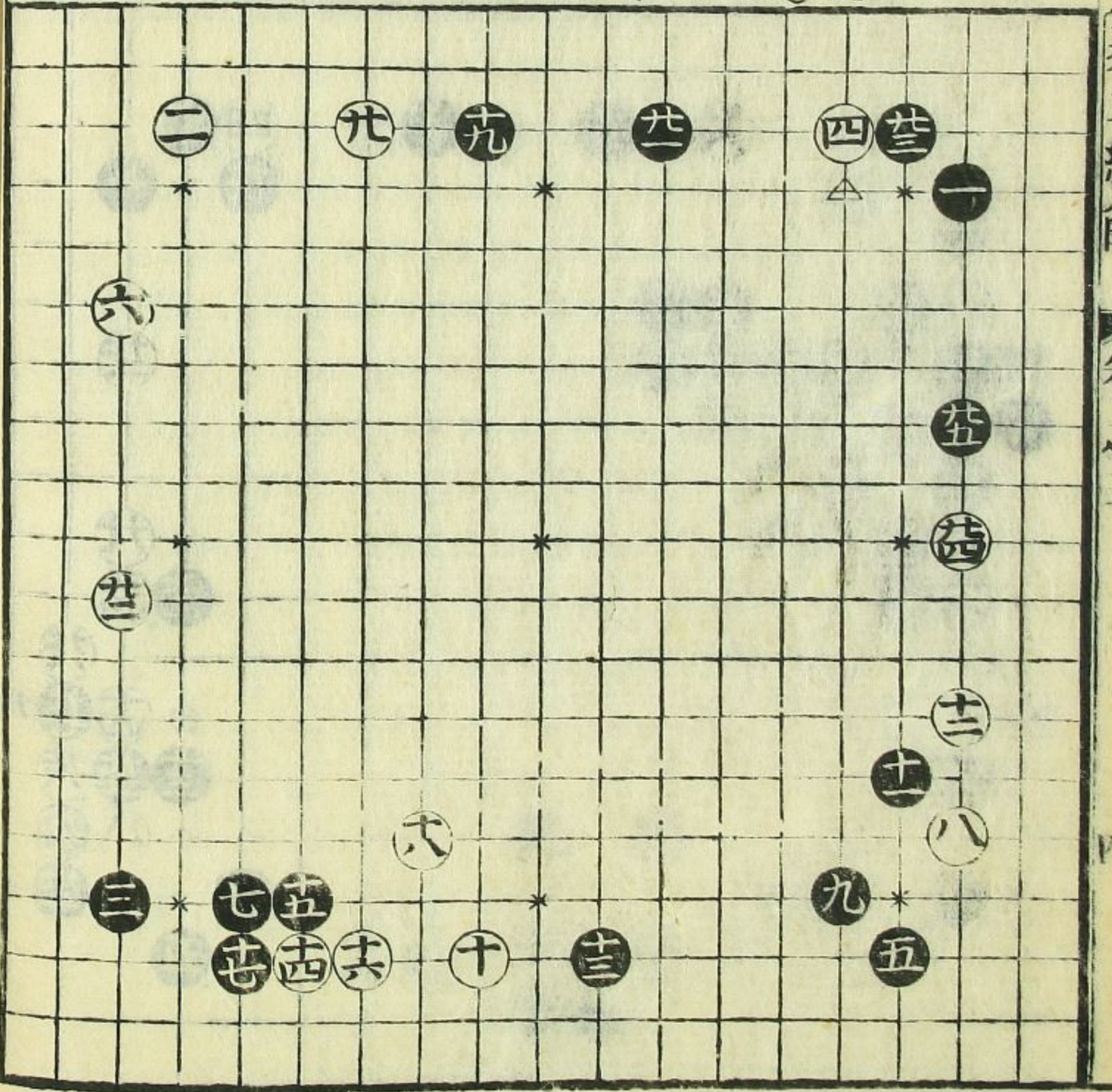
白五回黒四七の
可入粘



才五之八

二十五まで

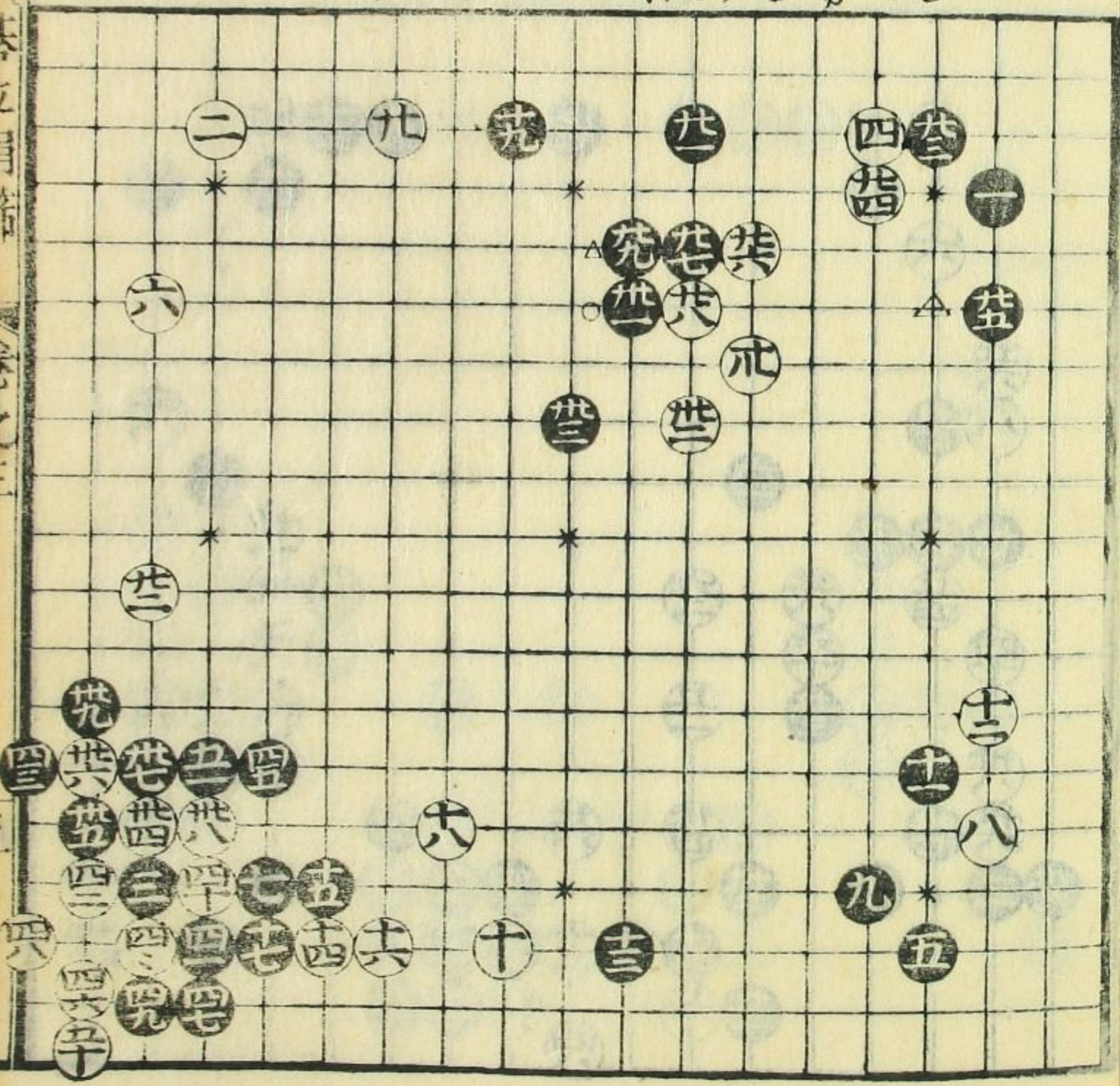
先勢ハ怪也白十
の子二向よりたる
茶の基も海一さ
黒二十の子△印
おて廿の事ゆ
けつ一さなり
ハの場白と成ふ
らむたわかく
あーたけり



才五之九

五十一まで

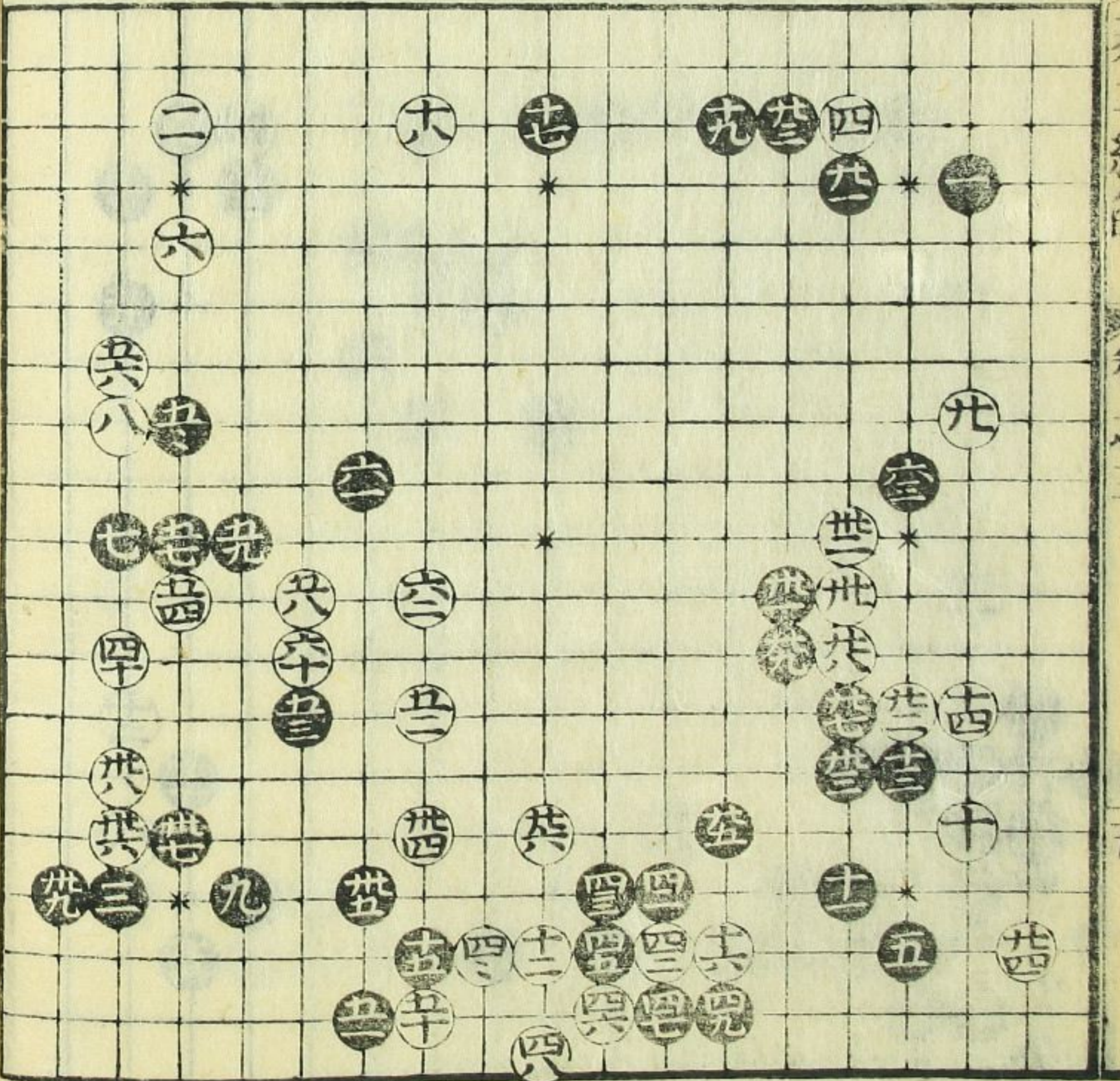
先ハ怪也ハ怪也
黒七五の子△印
桂ハ打は上の場
の黒ハ尚リ強
アてゆ一さり
白廿四の角
りる事城
里廿二の子△印
内ハ△印黒切
よ一廿の子黒
てもかくのこ
一と打入一桂



才五く拾一

六十二と

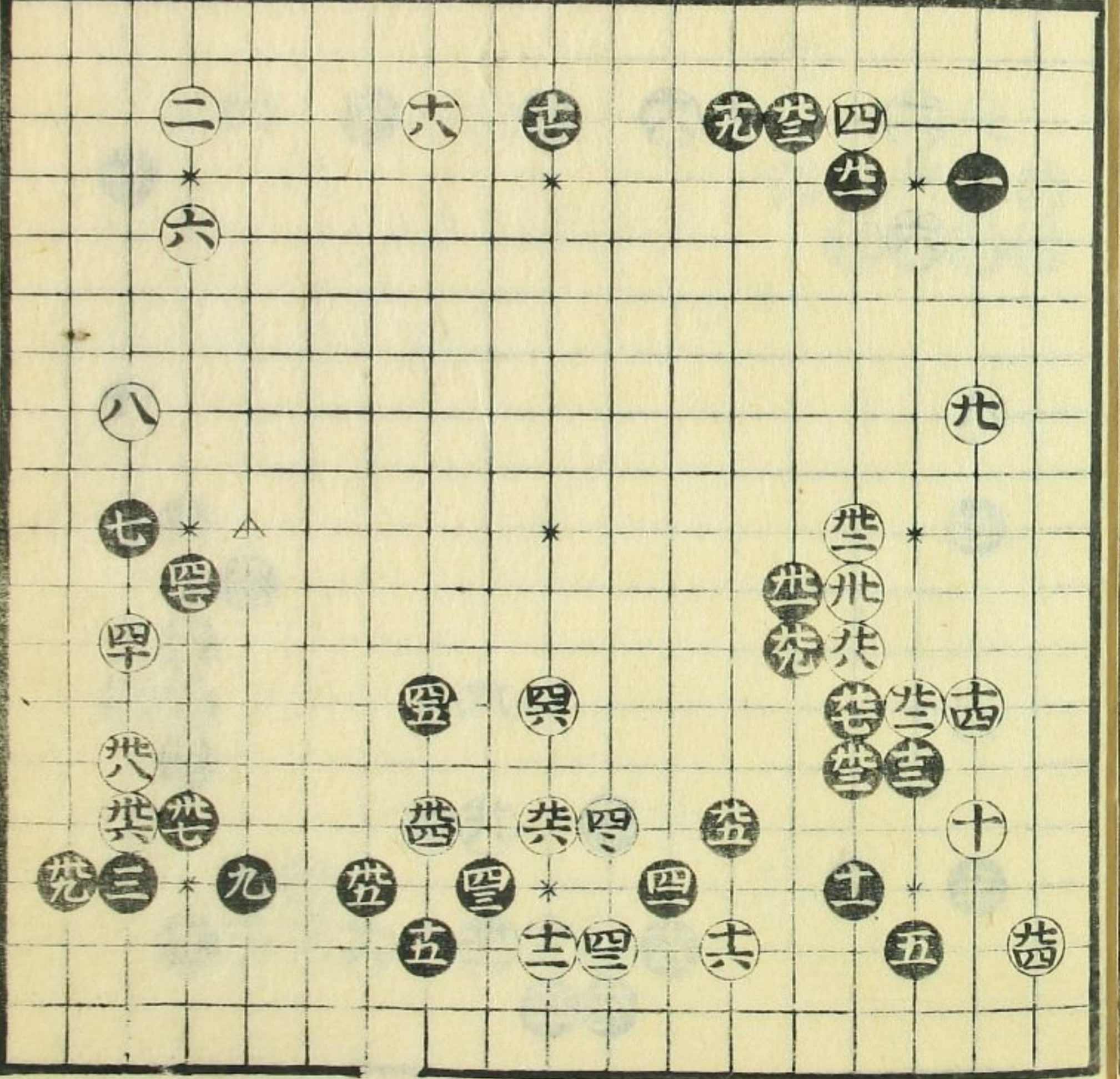
黒四十一のせりか
又八十二のせりか
るれいし七の石は
通ソらく有て除
かたり
斯のこく石せり
て我石をばよく
黒出り事は一か
此を秘かかへ
い石五にて八六の
高目七の黒後
才四へ白ゆき
たり



才五く拾一

四十七まで

白四十の射あけ
あくへ揚させて
白の黒の壁を
付くを二回も
基けを二能く
一黒四十七の
△下二回も
あけられたか
らぬを三回も
かたり
たり



才五く拾一

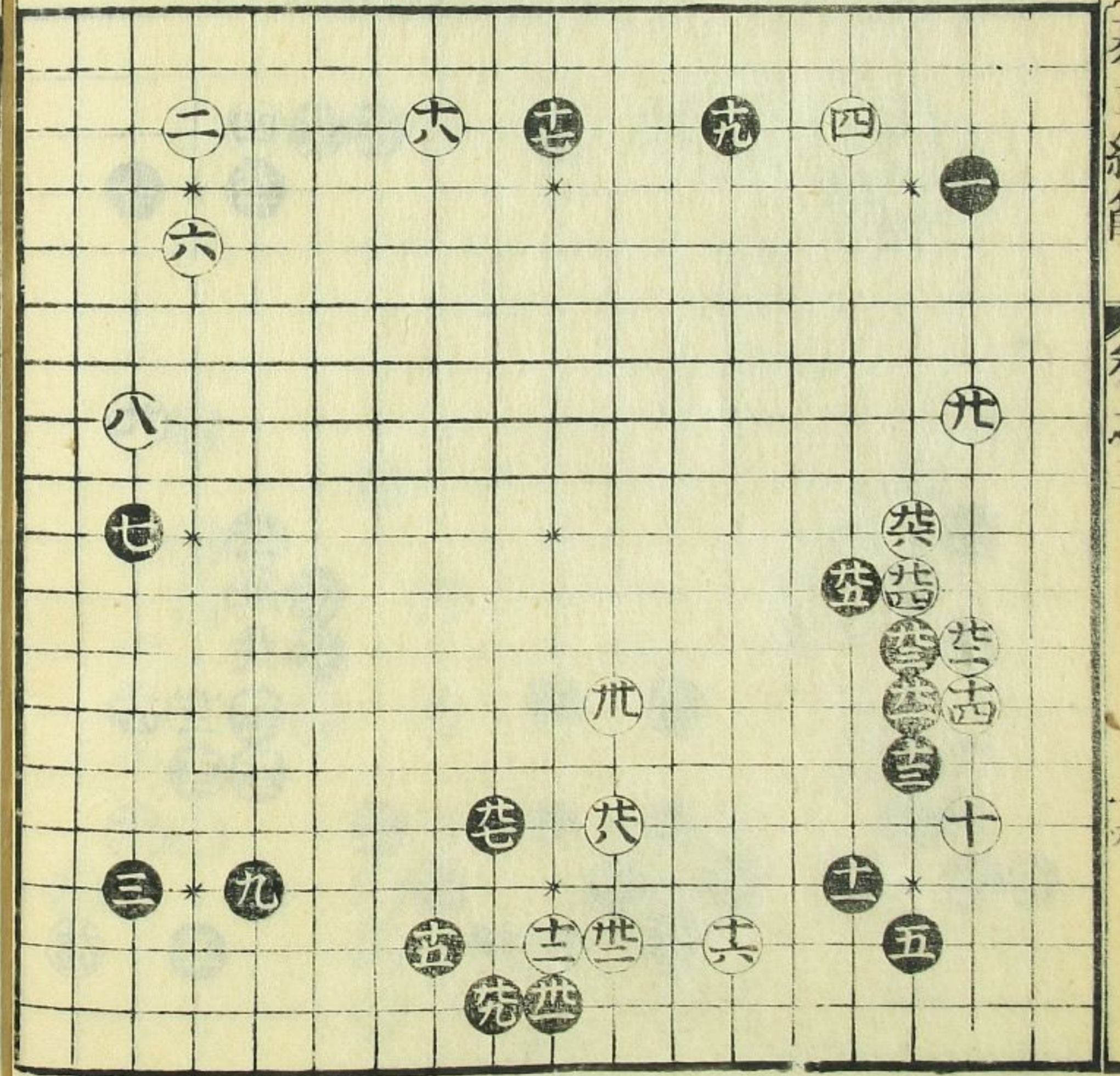
才五く拾一

才五く拾一

才五く拾二

二十二まで

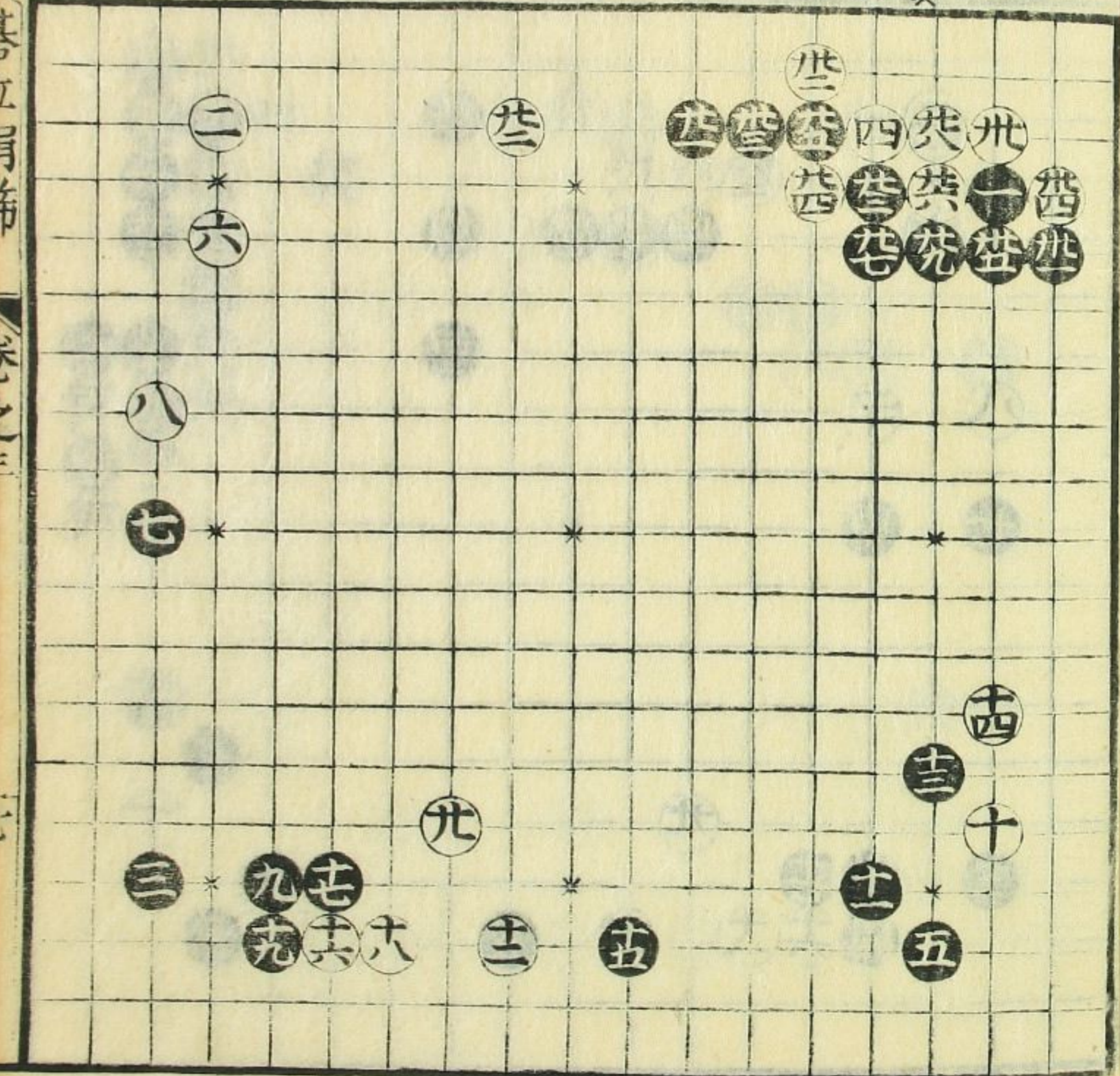
先勢ひ怪なり白
二十の内黒二十一の
一打ても能く黒
二十又のふ成す
折ても換なり



才五く拾三

二十五まで

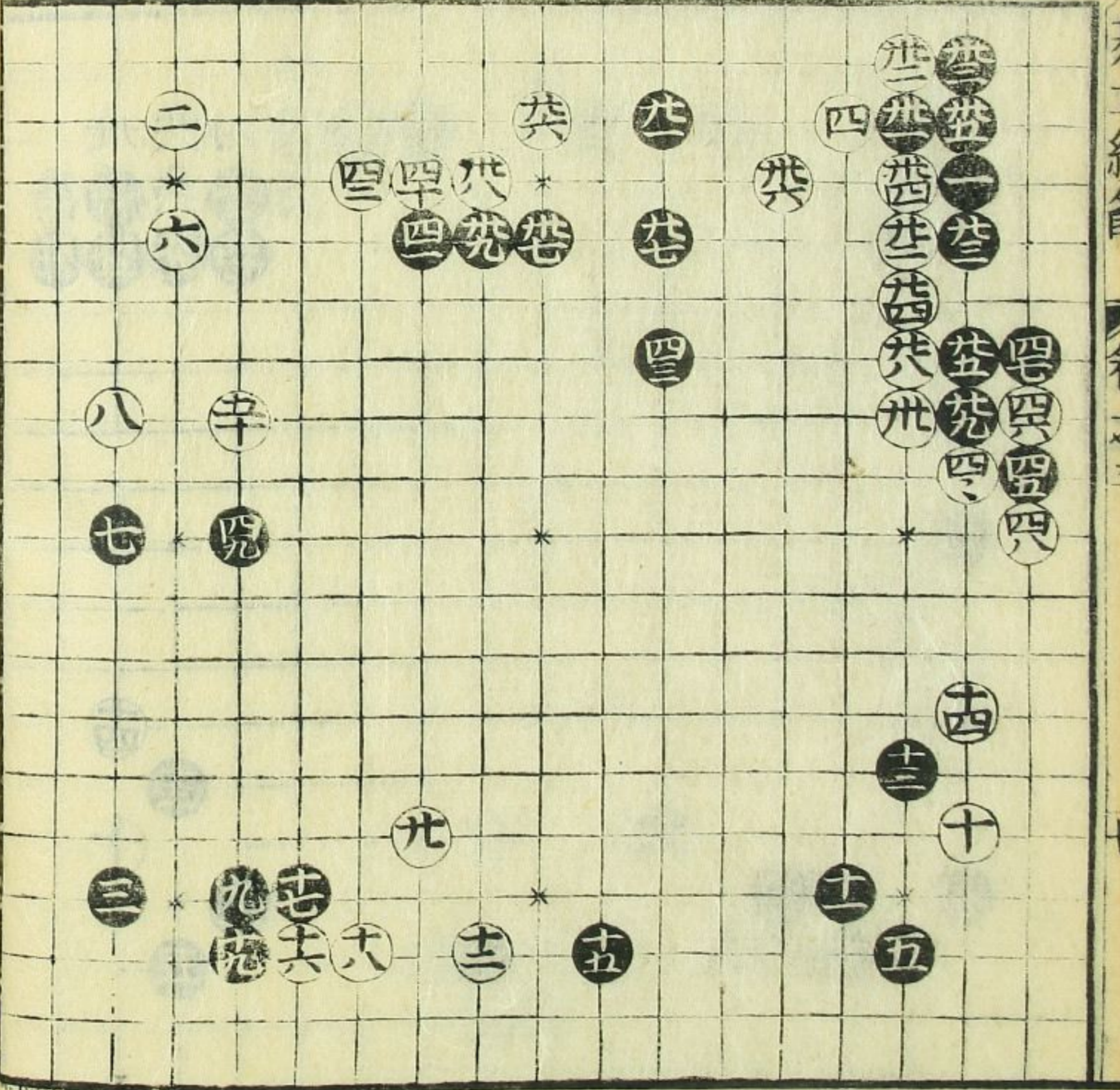
先勢ひ怪に傍負
直く見ゆる黒
望みして打つ



才五く拾四

五十まで

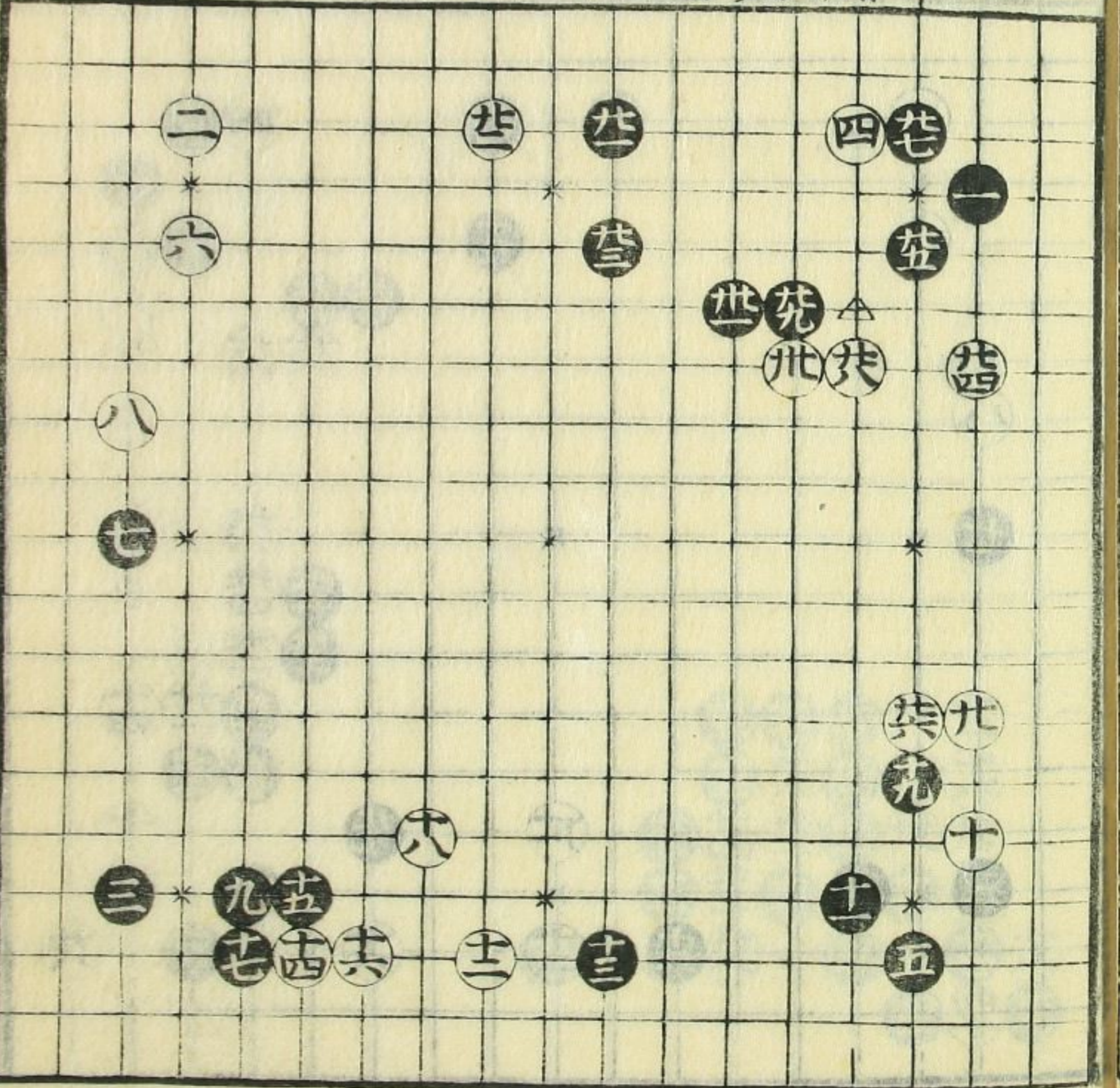
先の手は白に怪なる
此石を黒に地勢して
終るなり其甚く白
平場新のあとく志
ありありくしては
此石を扶けるを



才五く拾五

三十一まで

先勢は怪しく白二十
八の取打も節有
てもありて何
れなり白二十八の
は黒切らん大4
は切らん大4
は切らん大4

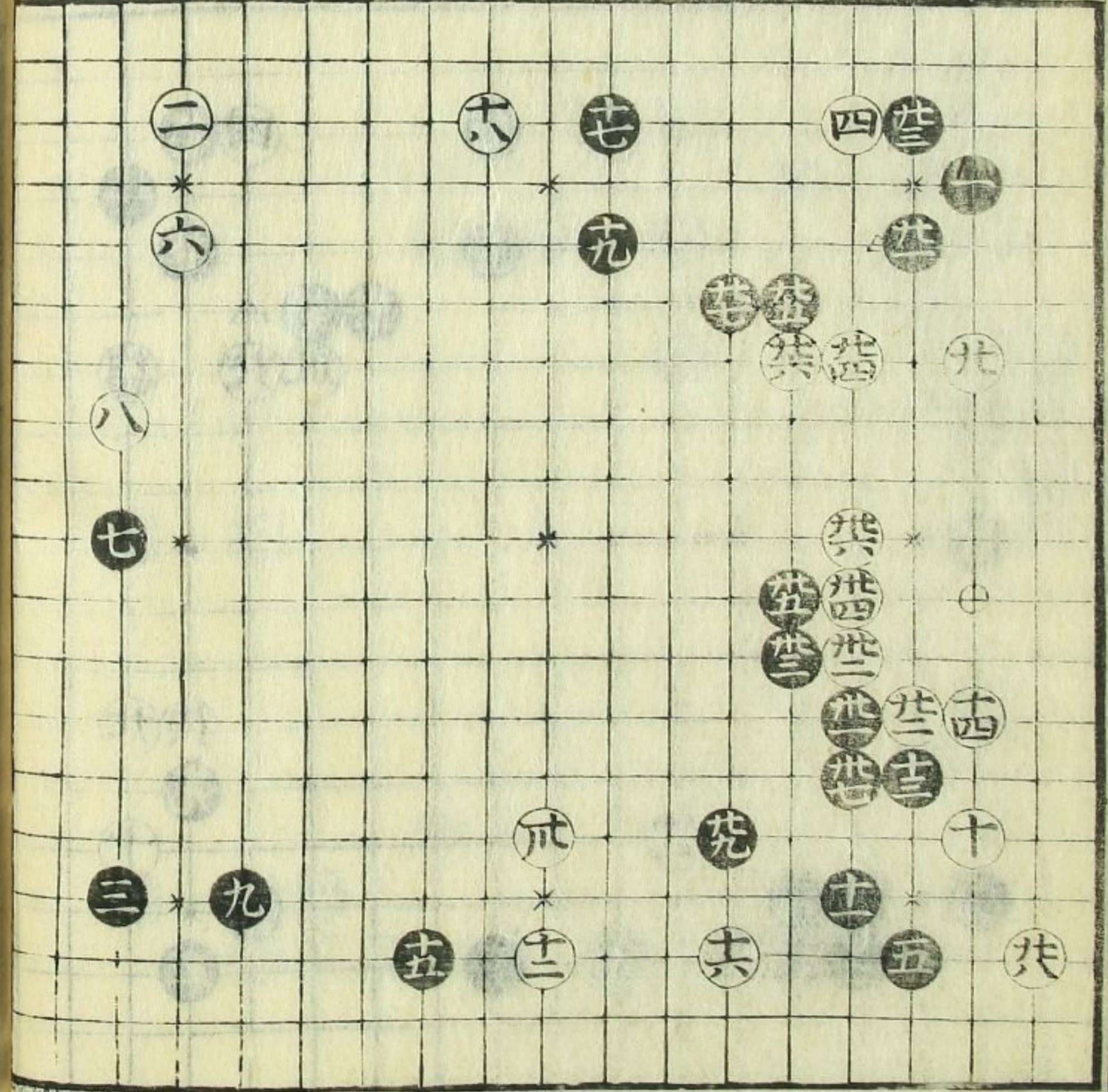


精進編
卷之三
七

才九く拾六

二十七す

白二十六と花たる
石少く黒角はけ
さとも新のふゆ
なれ八里打り
前基に二十六の
二回飛公らひ也
此石立にて二層換
十九のふとを△
下にはすこ白あり
こすむ内良よすて
○下には公入角
黒のゆるる石ゆ
れなり

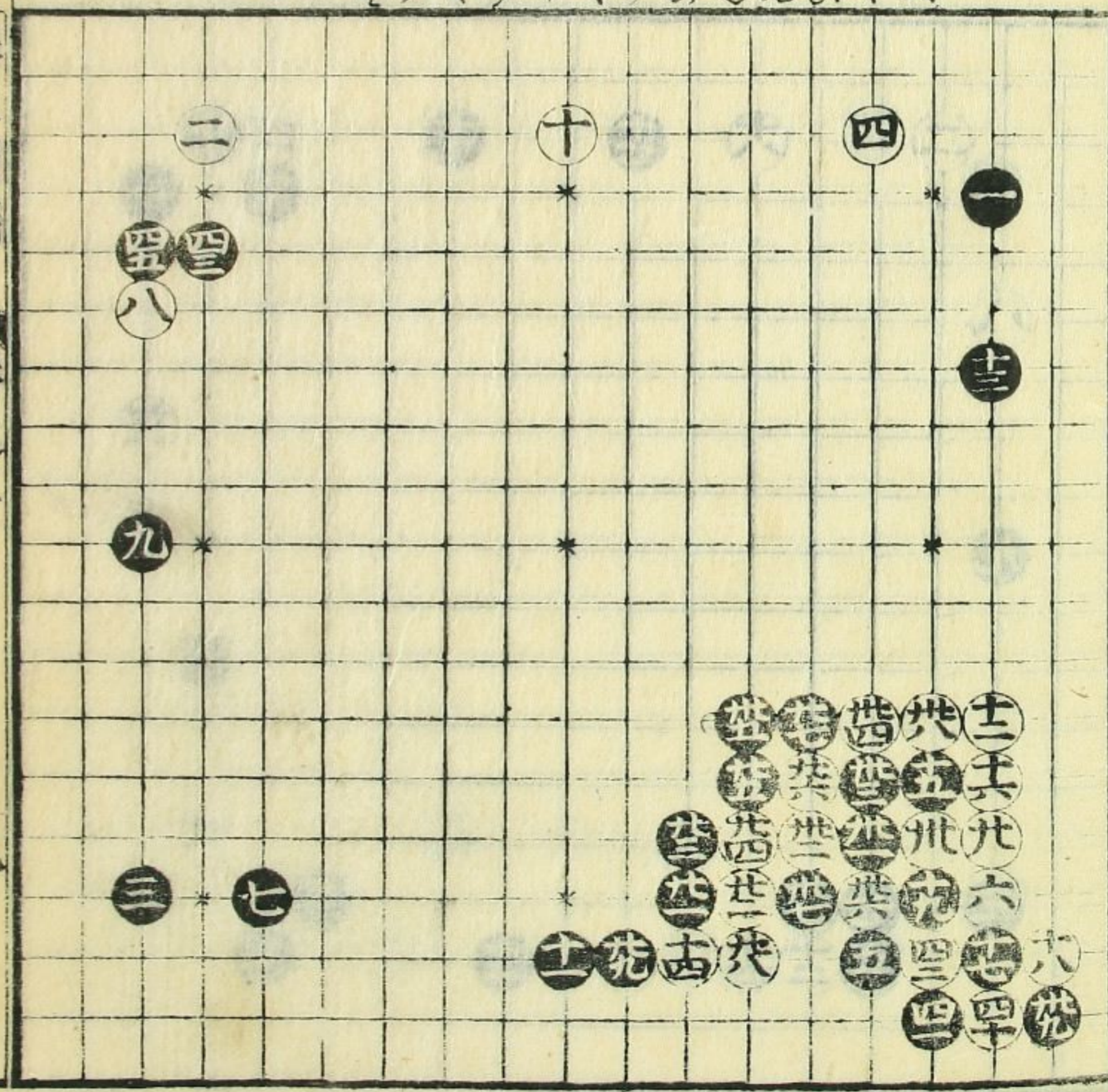


才六く一

四十五と

此石立先勢ひ大
かり新のふゆ
去の入場黒の勢ひ
大かり附八十二と花
白打公の河さこ
可のこくく黒の
ふ十二の約合能お
は白石組めく
白○字を切れ中
位黒打れ能かり
黒五のふ新のや
こすも同よ打る
けるまよて定る
す人

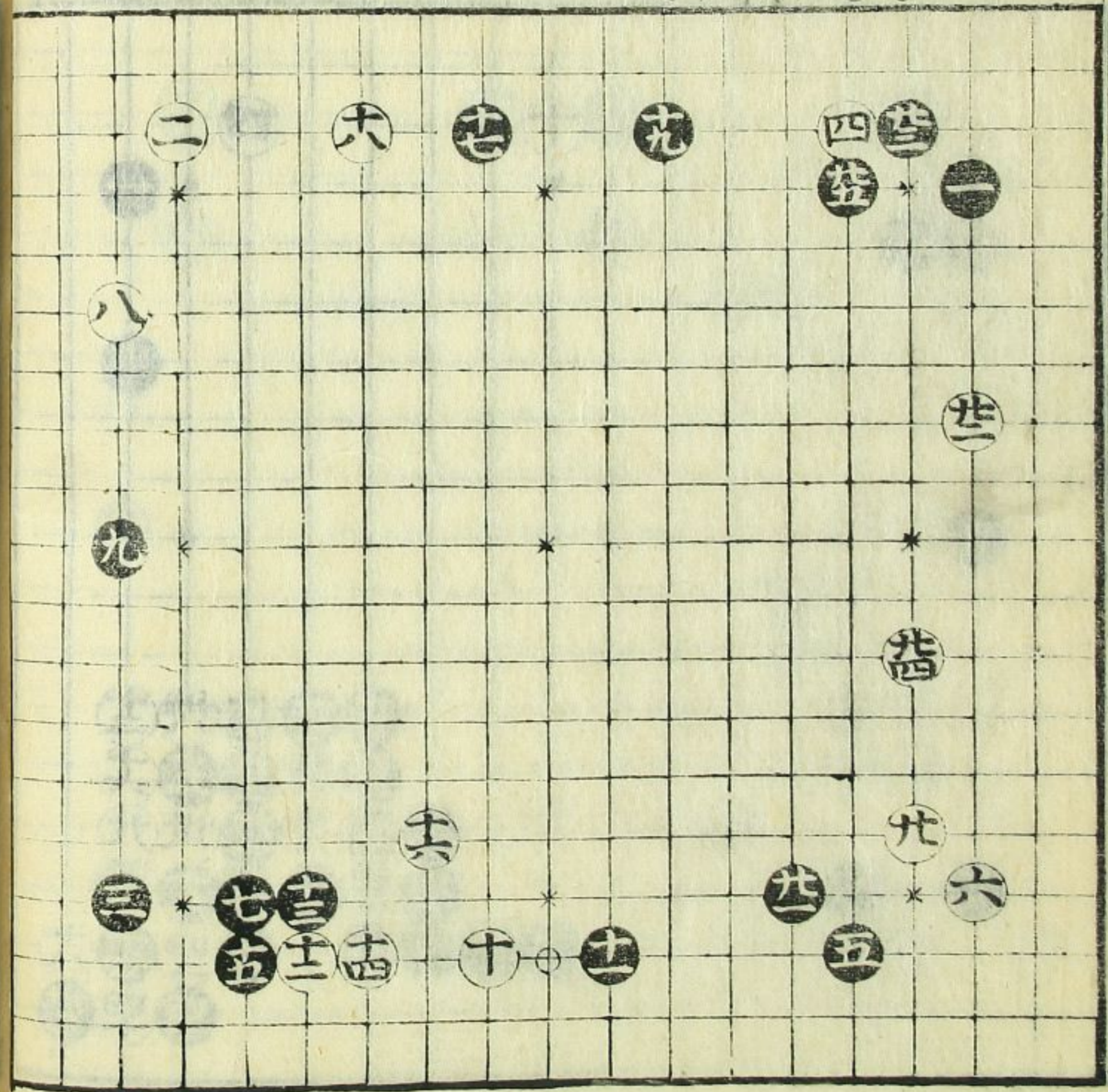
四回劫上ル



才六く二

二十五と

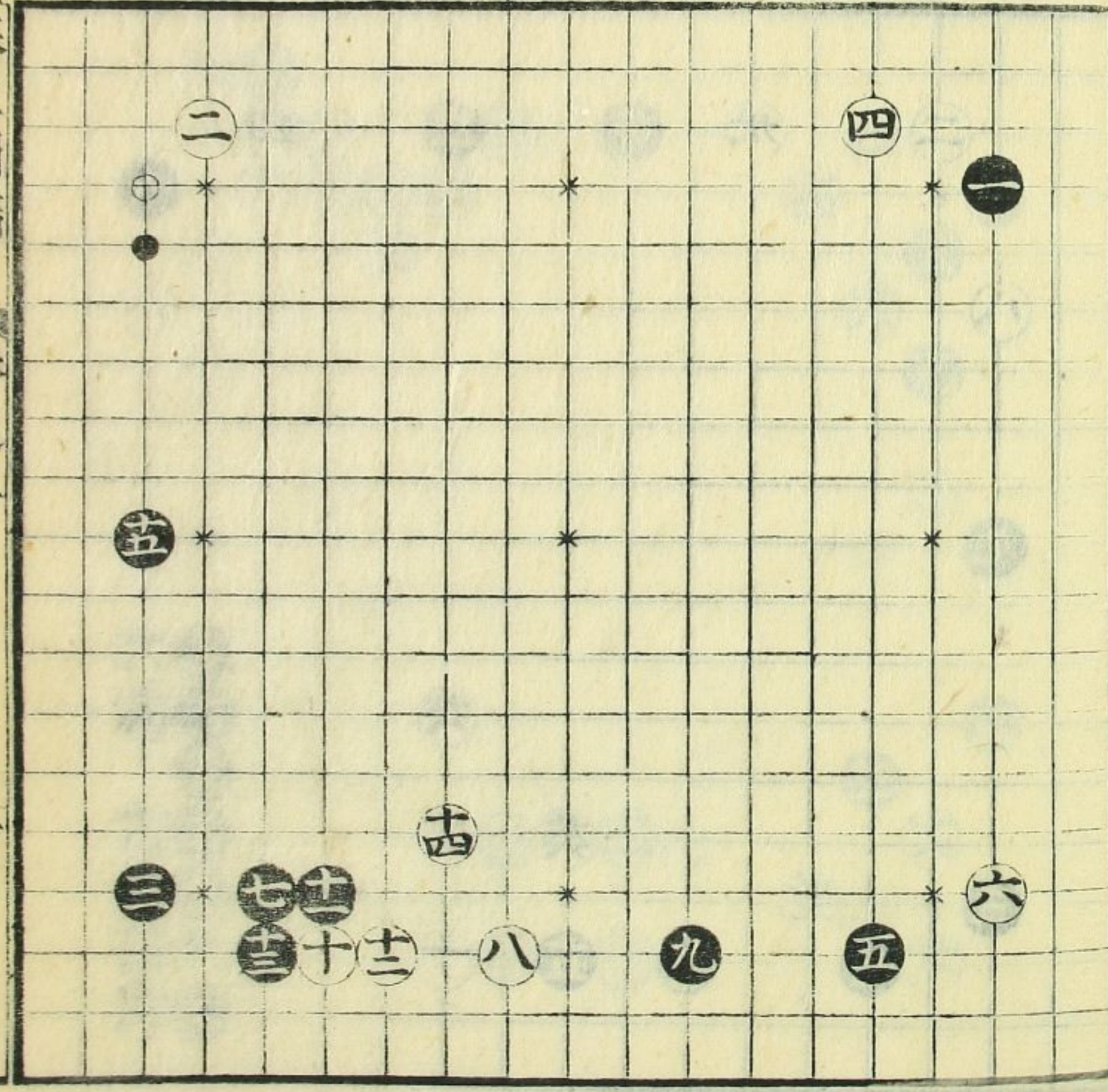
此石支先勢以怪
を珍まけく打能
白八の次九と打
白十の目ノ下ノ
打よりハ二ノ人
能死なり定流
すハ一ハ二ハ傳



才六く二

十五まで

斬めくは湯とを
やく清て白の二ハ
桂に●下折ル金の
黒十五と打事
常の基の石組
席をとかりたり
ハ傳
十五の内白又○ハ
打て其基のこ
にせぬ一とハ
る白又ハ揚
子く清を同
たりハ傳



其立終節

卷之三

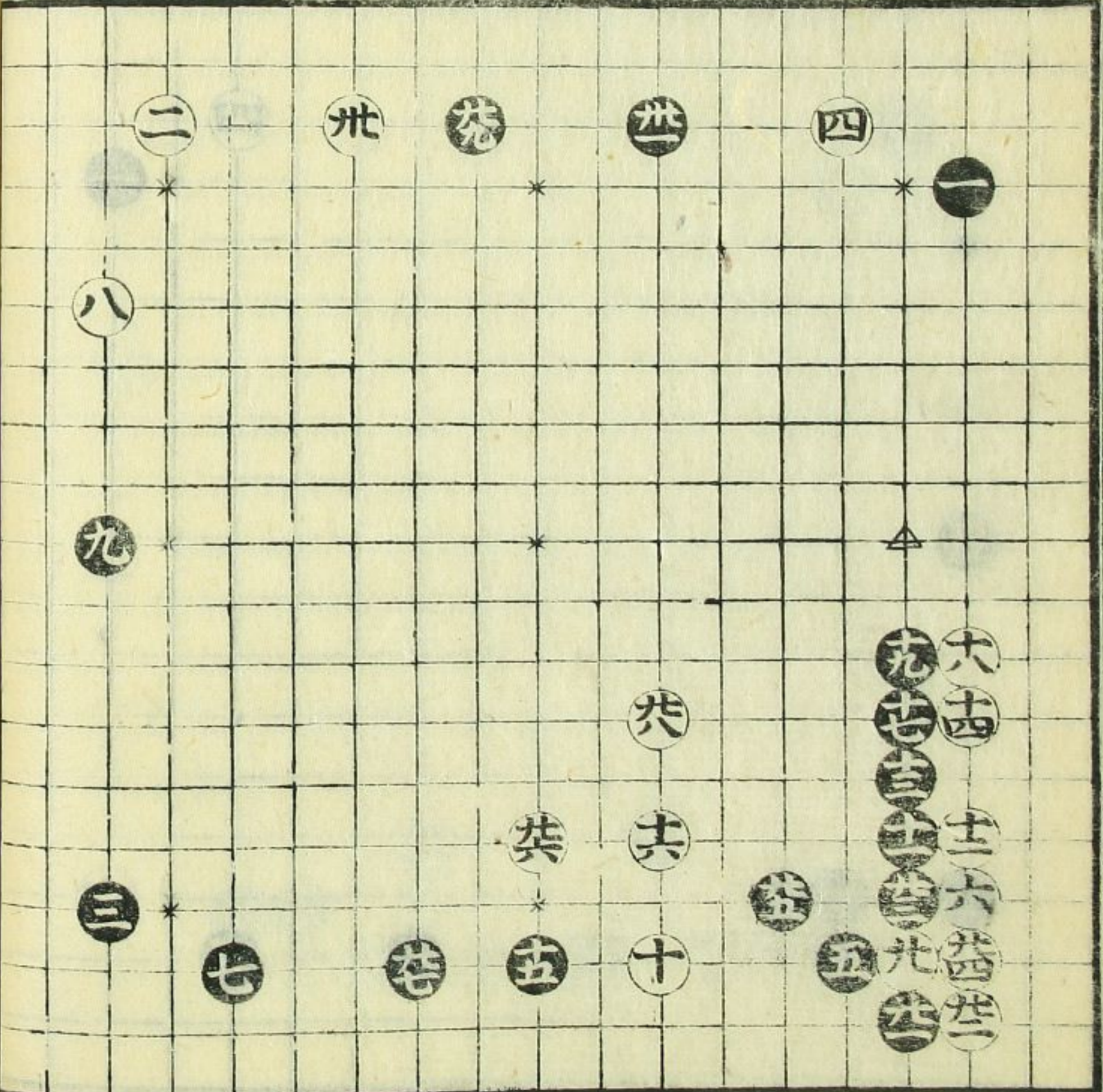
其立終節

卷之三

才六之四

二十一

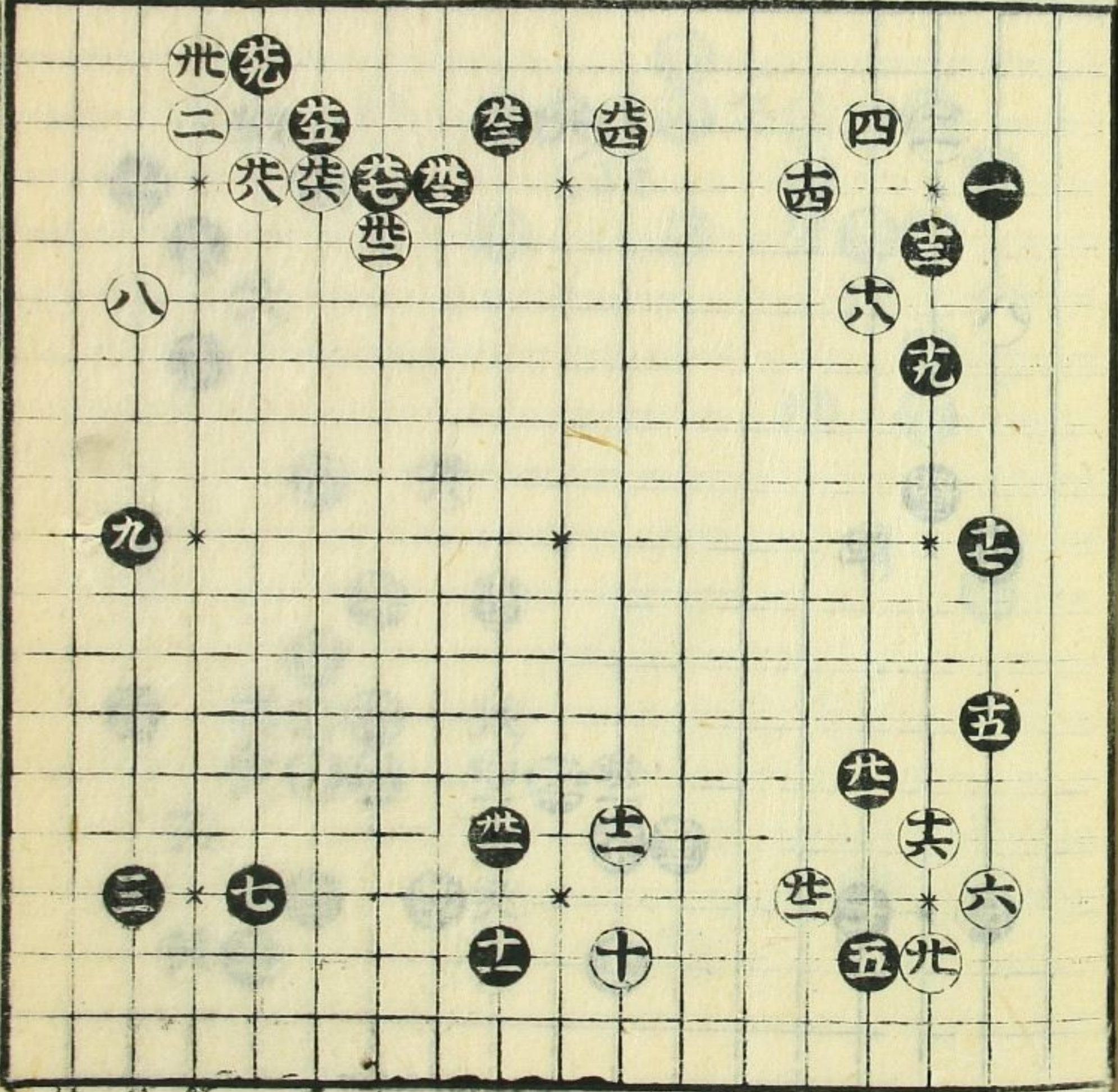
上のふかしのぬい
けり合ゆく控て
守りてぬくのこく
黒十五と接し入
黒八守入す才九
とぬのこくくちる
白ふかしのぬい
たふともぬいも
黒ふゆすすは信
す黒八守入す
押入ても白ぬい
けりくす



才六之五

二十三

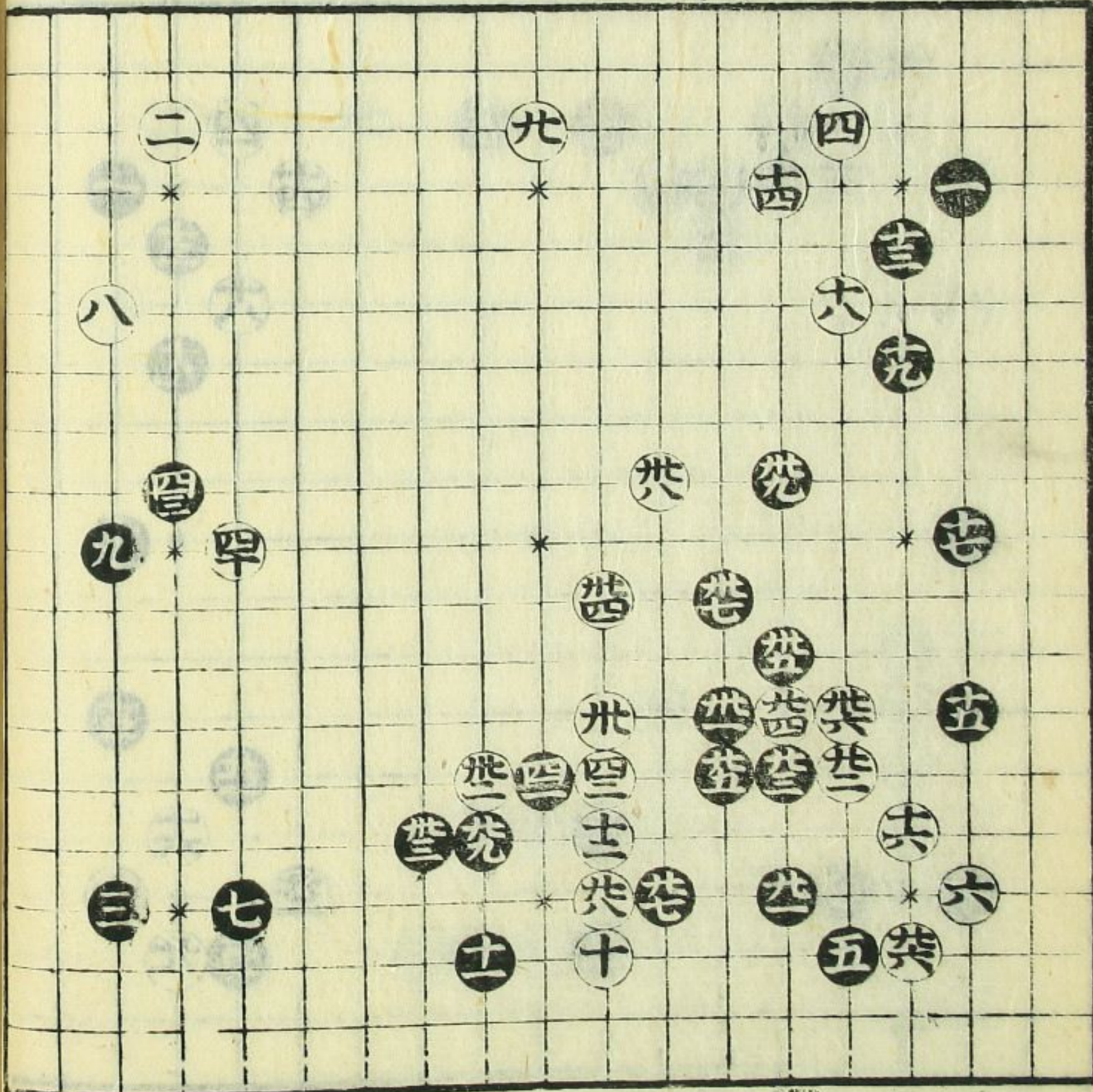
先勢ひ怪し白十二
のふと黒四十五守
むて出る時ぬいふ
打ても白ぬいふ
す二九と守入て
三十一と守入す
口信
黒十二のふとす
ぬいぬいぬいす
打すぬいぬいぬい
かり



才六し六

四十三まで

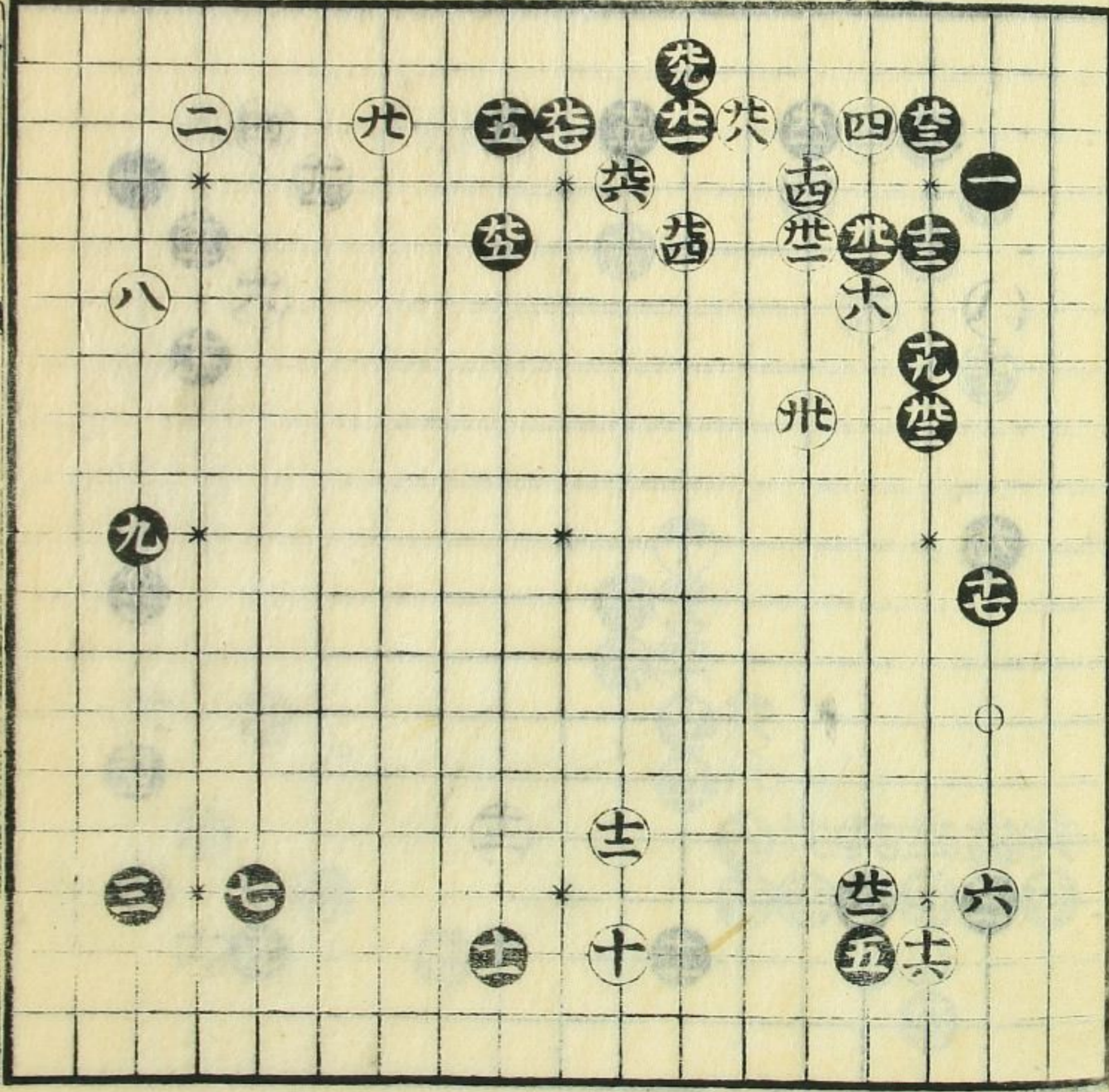
先の形をいねばり
我れは終るまで
有て大の中は揚又
何中すくも何うか
のこころは甚だ
能く入すべし
口傳



才六し七

二十三まで

先勢の怪しきの
甚だしくあれは
くのこころは打た
里十一の泊合せ
4打り附二間度
1去りくろ里十
九くろく打と
又黒十七を○中
打附の石指し候
かこのこころも
打へし



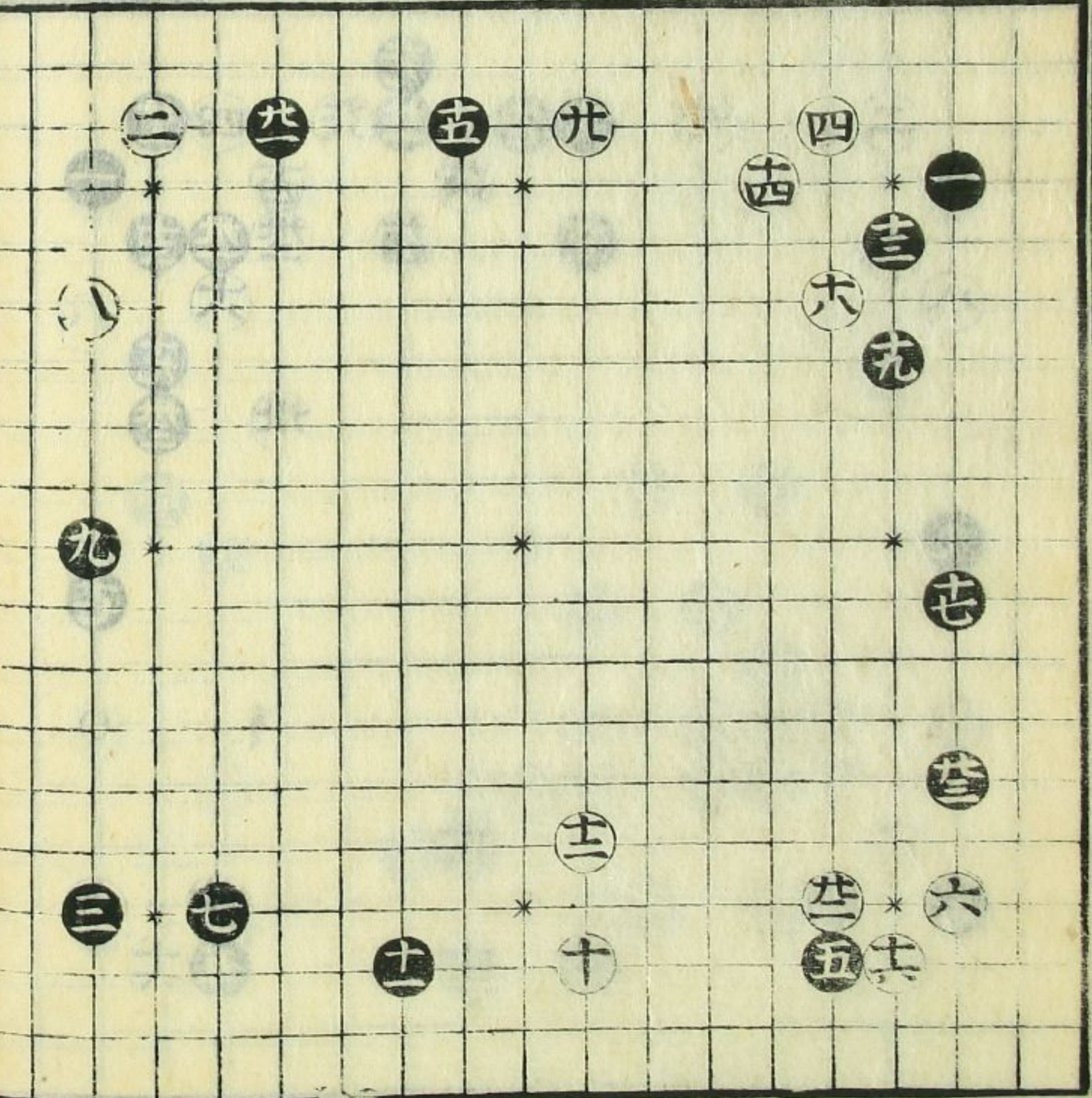
碁の終局
才六し六
才六し七

碁の終局
才六し六
才六し七

才六く八

二十三と

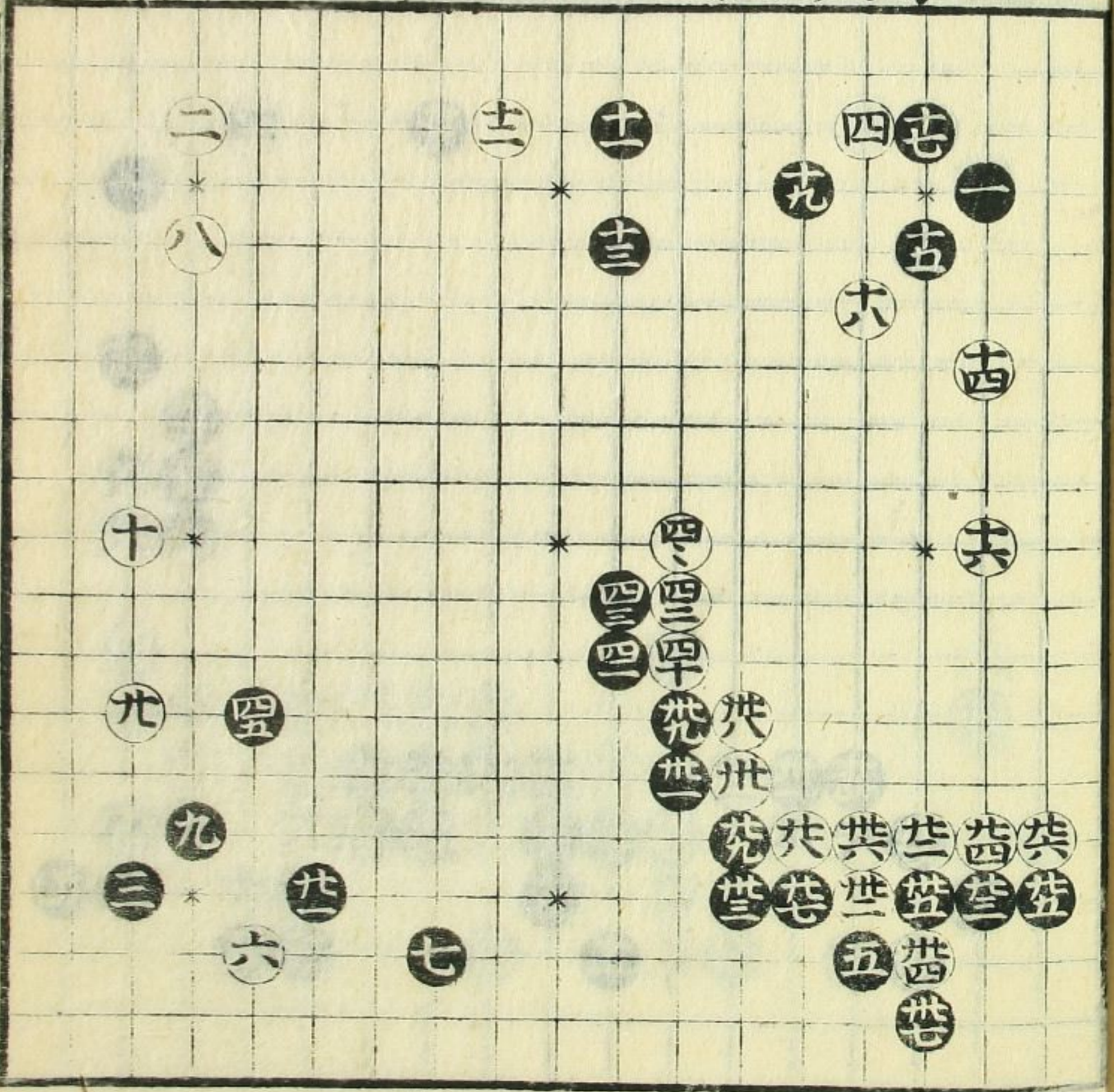
先勢ひはなり白
の入場がくのこく
三間抜すを時は
黒十二の能ひ前に
あるはとく強を
身も高々たれども
白十二の能ひ
斯のこく定は
二間かえて能
は傳



才六く九

四十五と

斯のこく黒七
換り上左の白乃
いはひひ強考す
白より大位の人
指子ねらるなり



碁立明篇
卷之三

才六く拾

三十九まで

此石左白より六は
預めよて寺はなり
黒も白の匂よほせ
て打つ本方の位指
にて掃なり、白十
八の附黒の十九は
十のへ下の取へは
白より止二の取押
り黒砂りゆりて
りなり白十八の時
黒十九白止二の取
出し白々同下の
下越有白十八の時
下へ下の取へは黒
り新のこく止の
取押入黒二十三
出て是より此後
取なり

才六く拾

才六く十一

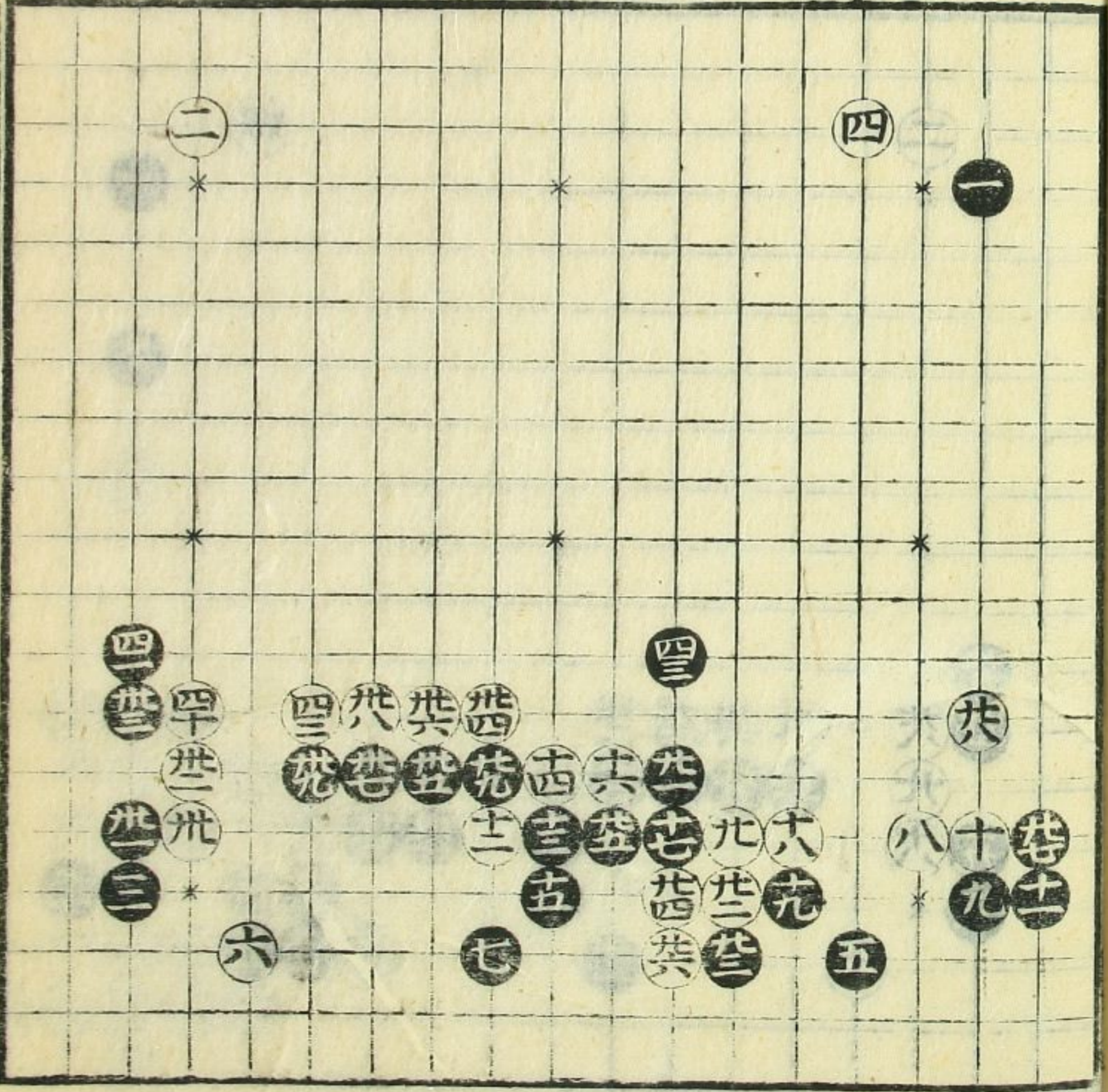
四十二まで

新のよくにてち
白の匂向お遠な
りよ黒大よ

碁五局節

才六く十一

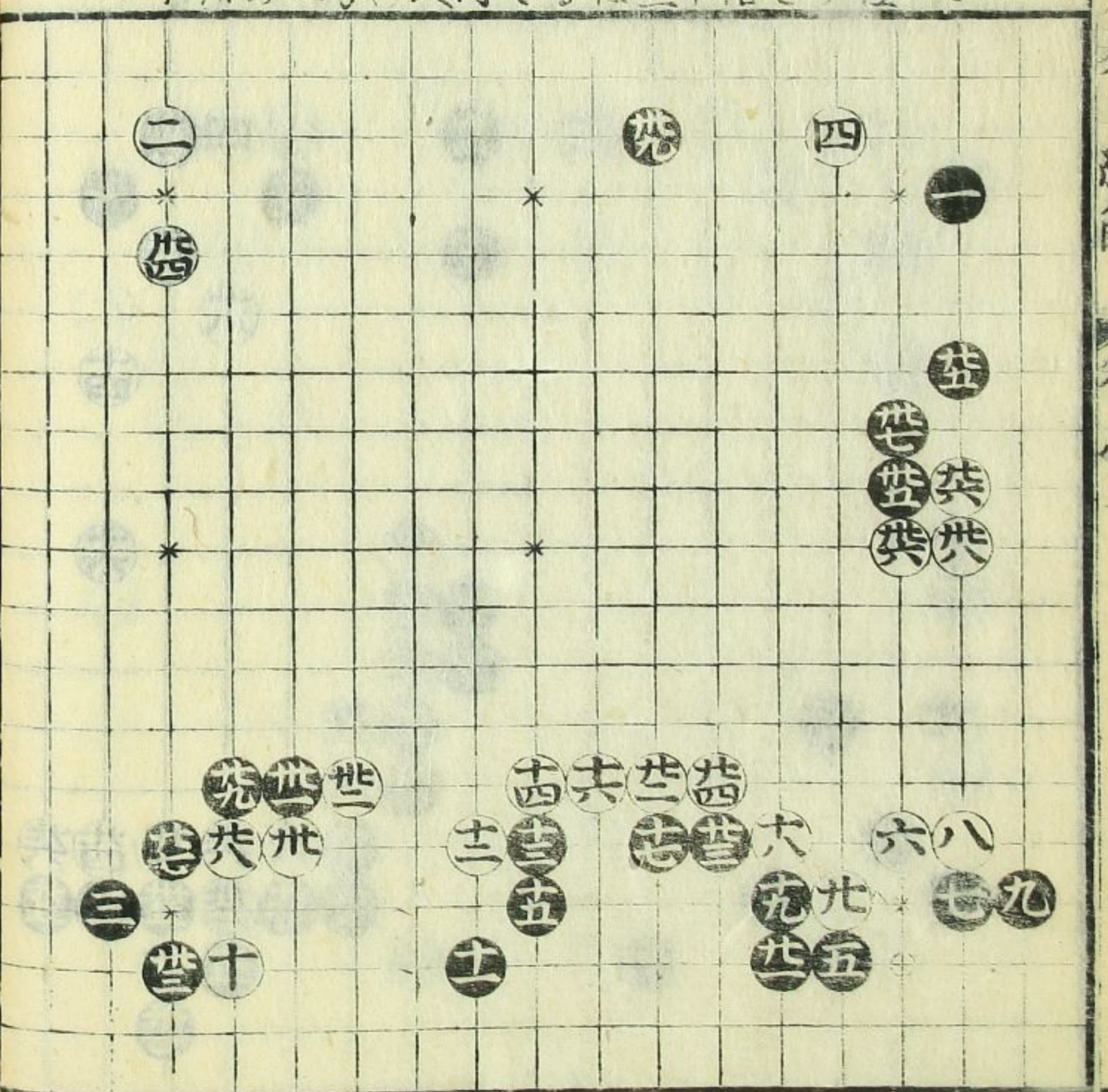
四



碁五局節

才六く拾

四



才六く拾二

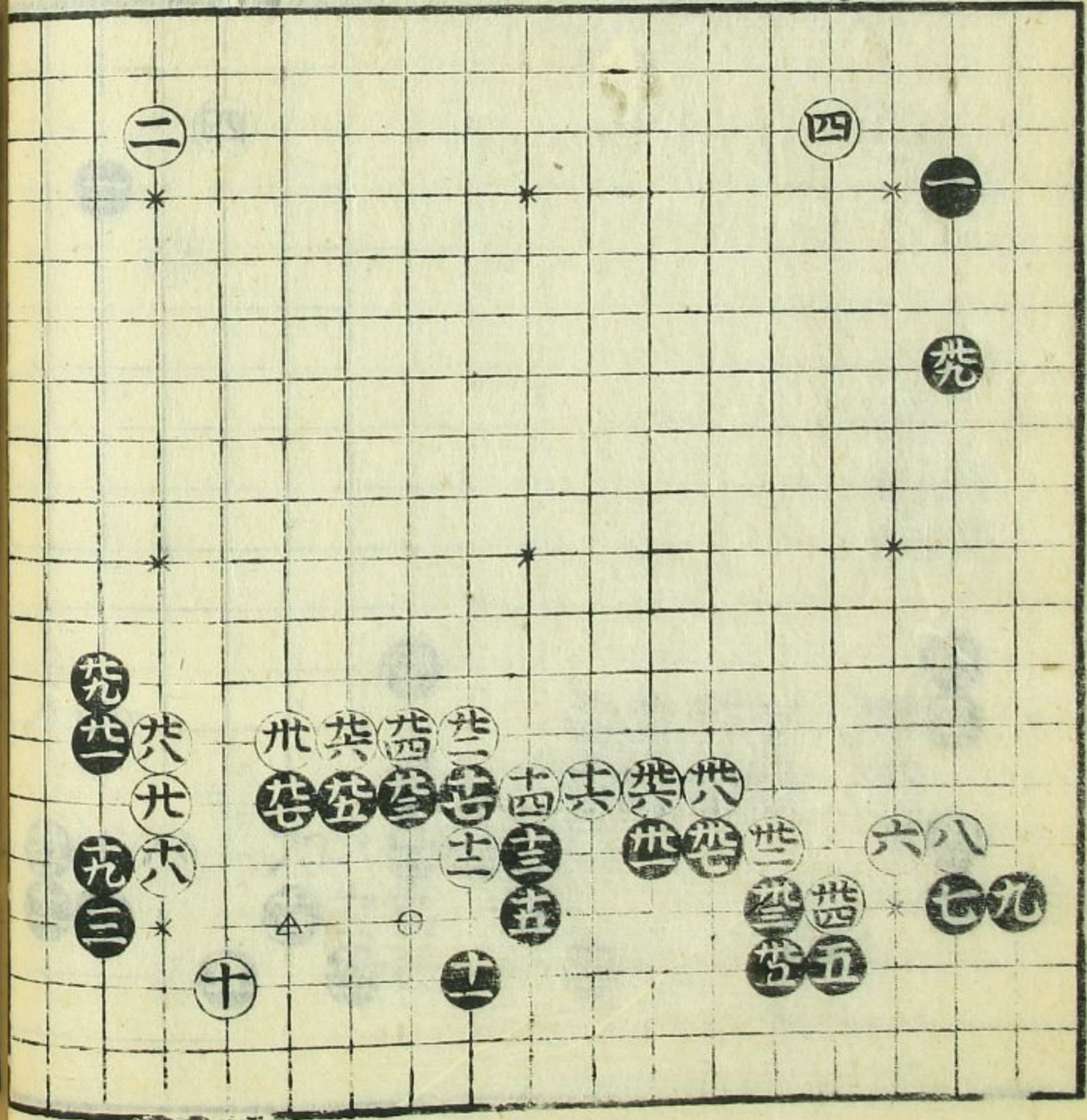
三十九まで

初めは黒十七早
く切らぬゆきこ
りゆきしむけ教り
かろぬ又合せ中
の位に降るなりぬ
時切らぬ口傳
○下は白をこす
ゆきて黒ゆてあひ
悪あがりり△下
打て角さめをの
内十七を切らぬ
口傳

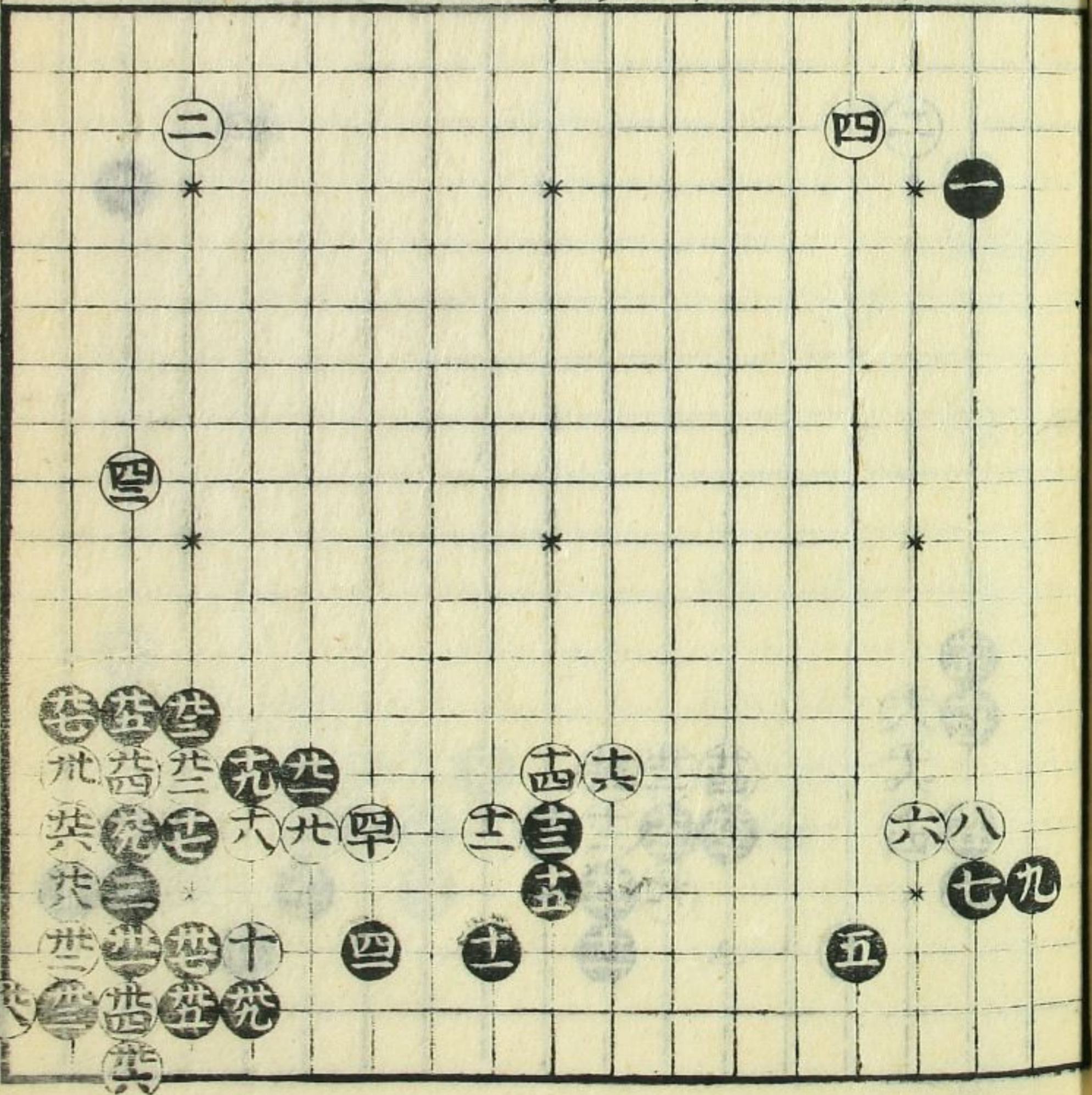
才六く十三

四十二まで

黒十七のあはみ
ゆきたくて初め
こらく白十八と付
て出れ六黒二十一の
押はらうけ押ゆ
き六割のこらく
てゆきりり此
あはは黒十七の
よすみりれとあ
る



碁正綱目
卷之三



碁正綱目
卷之三

才六十四

二十七まで

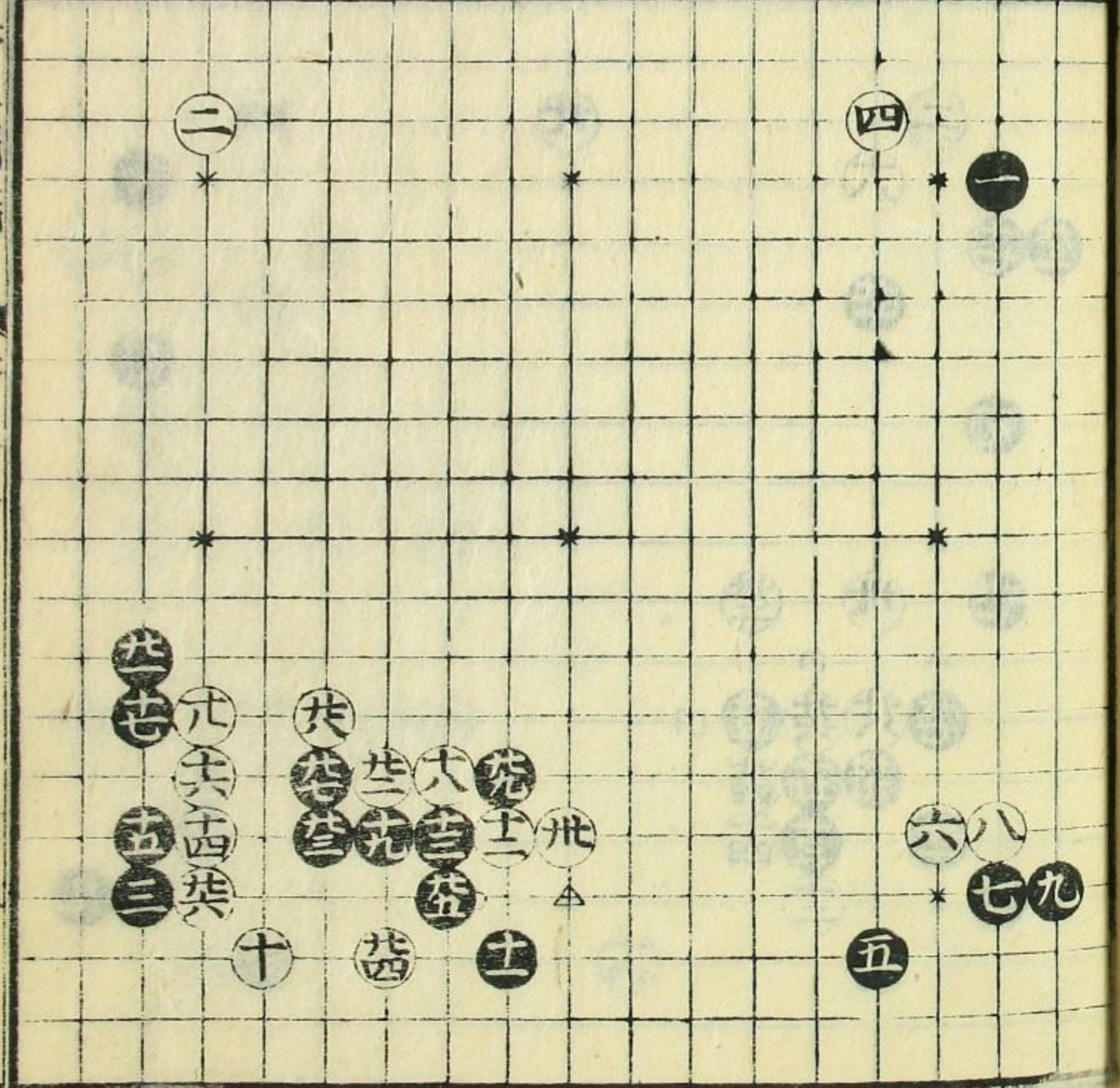
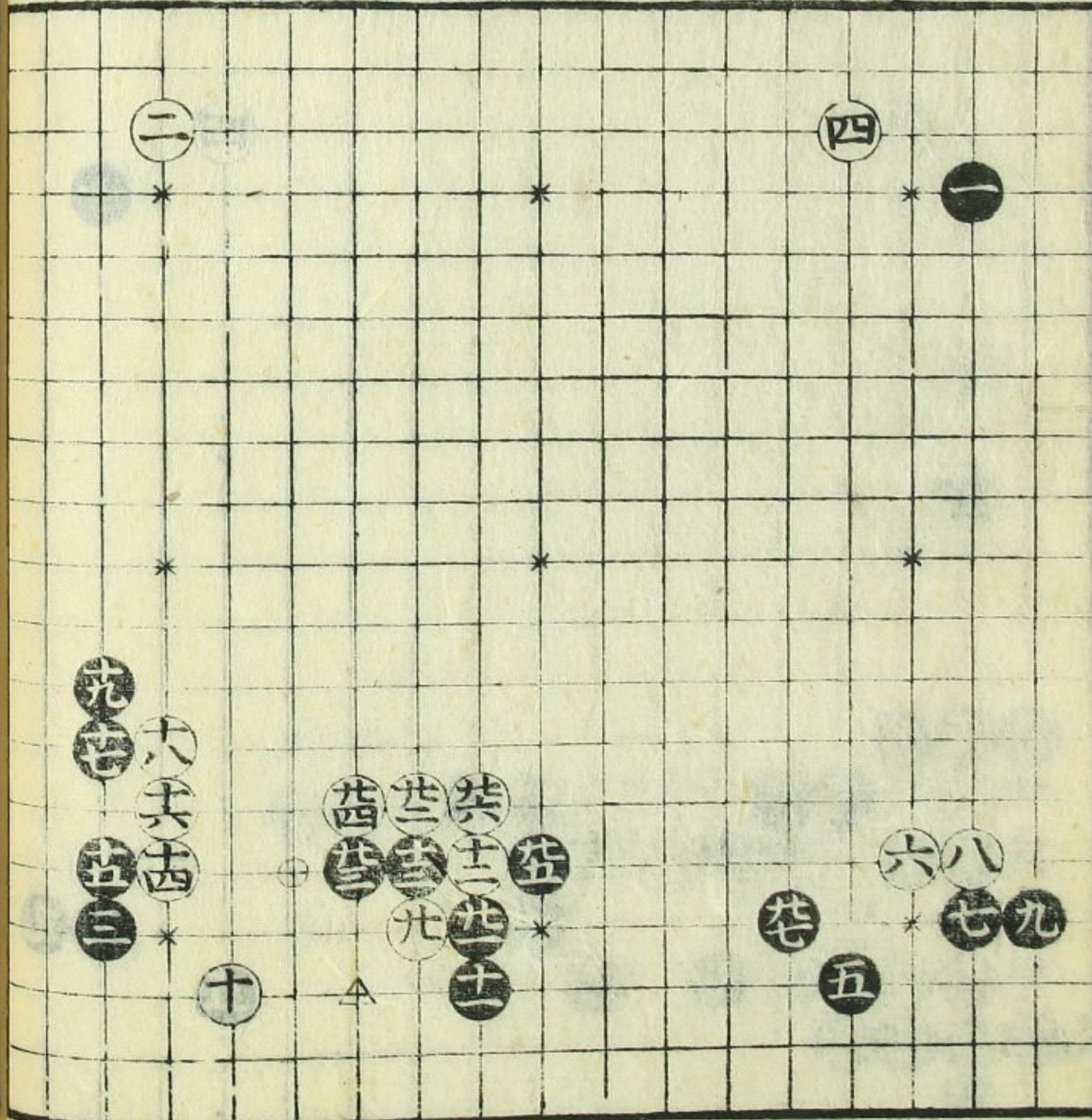
駒のゆくはくろてら
黒大子より黒○
白大子より白△を
折し黒ぬけんは
生とも大にゆ
ねり

才六十五

三十まで

白十八のゆト○下
えを採あぬは七
よを採あぬは七
石と黒二十九のゆ
上を同メ△を採
すみても白三十の
所くぬるなり

精進
糸節
巻



書立
崩
糸
節

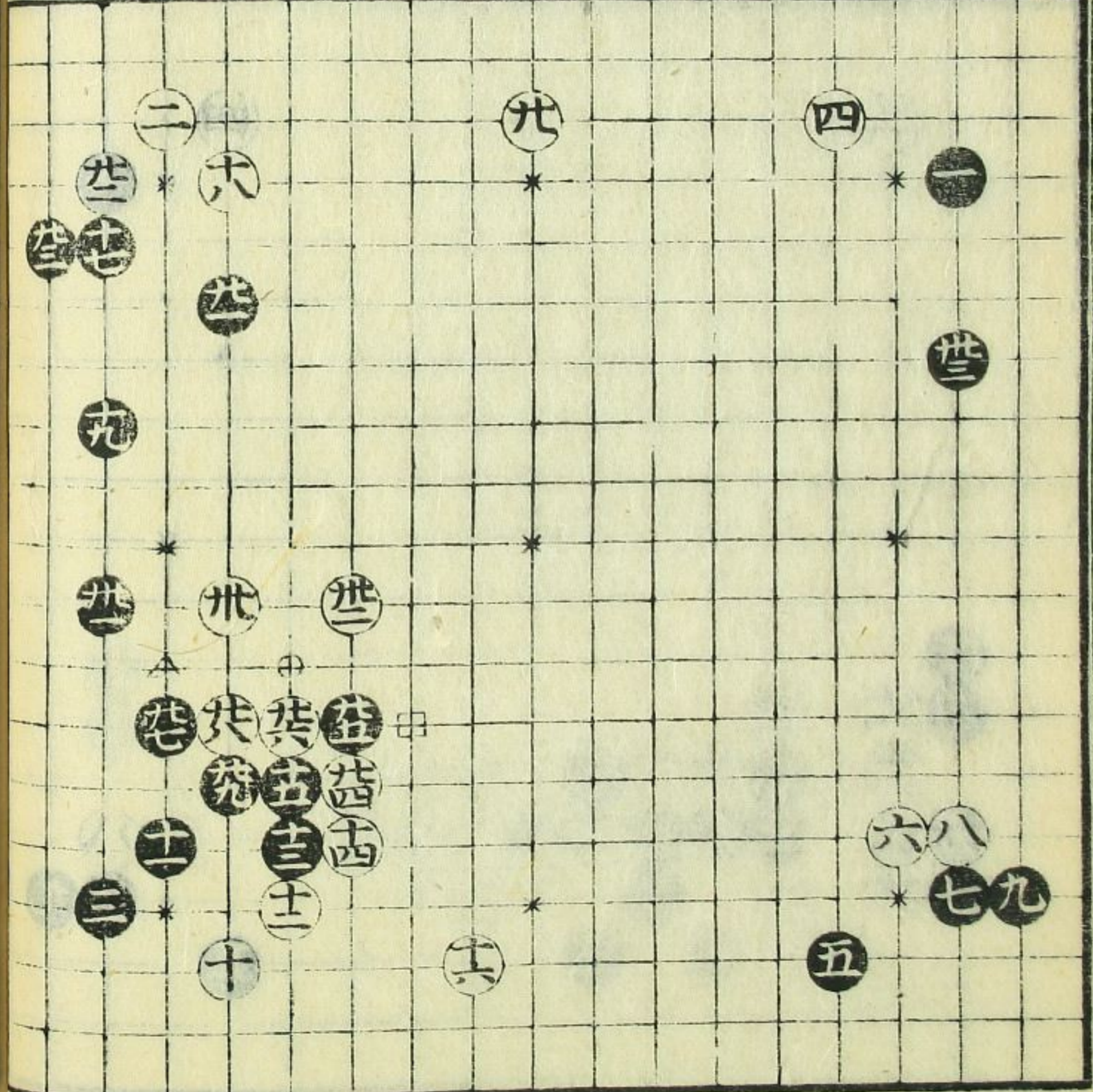
巻

六

才六し十六

二十二と

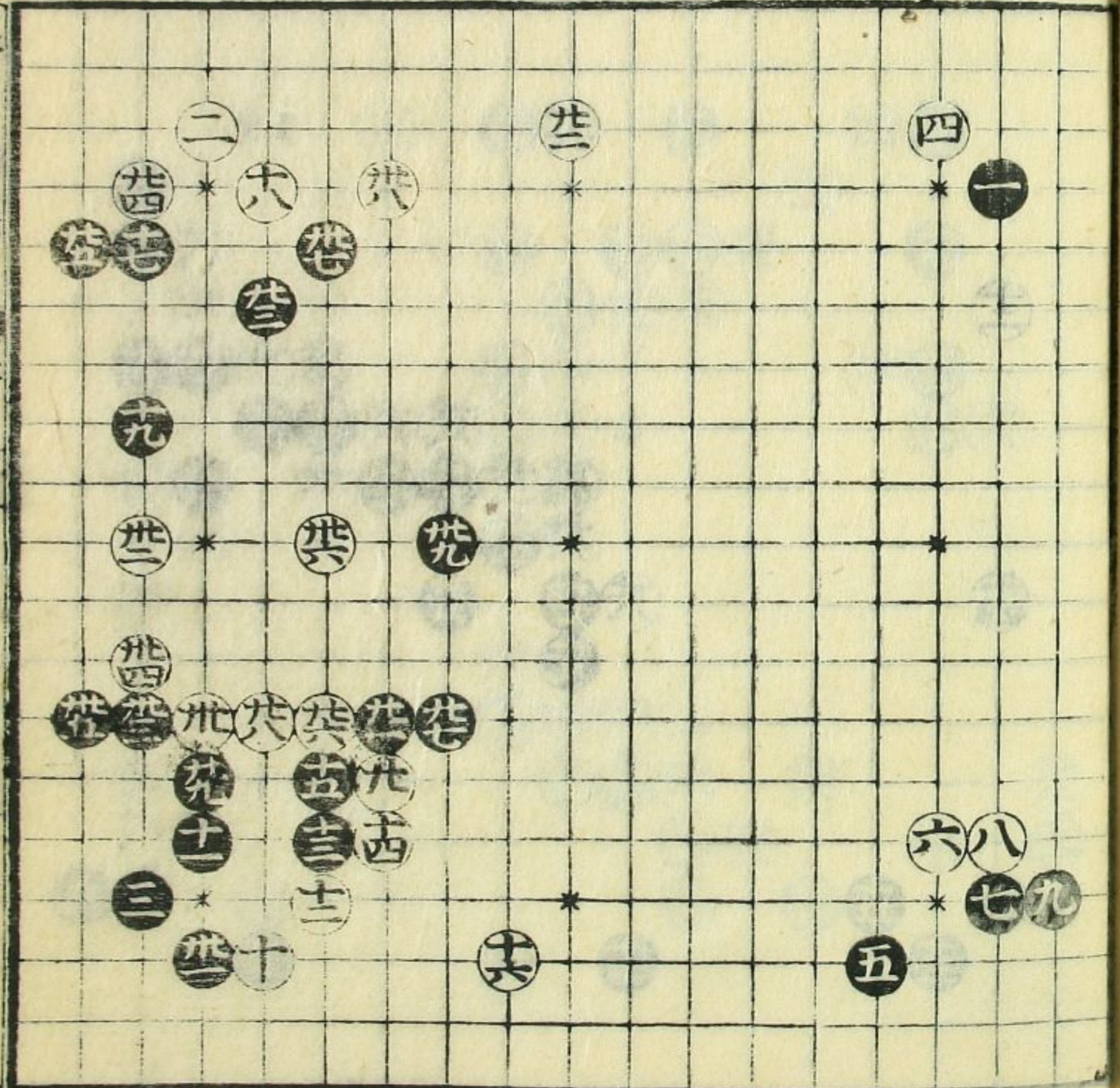
先勢ハ怪シ黒ニ
十三枚ハ消シ去
ナク申ノ位大
有ル所ハ大方ハ
有ル所ハ黒正二
白正八正五打
去場ノコトヲ
キナク
□正五と極ム
三十三と打テ
面ハ黒正七の
白〇正五正八
去場ノコトヲ
日ハキナク



才六し十七

二十九と

新のまゝは
赤て傍あり有
る一黒二十七
一白をくく
〇〇〇〇〇〇〇
〇一〇〇〇〇〇
て黒

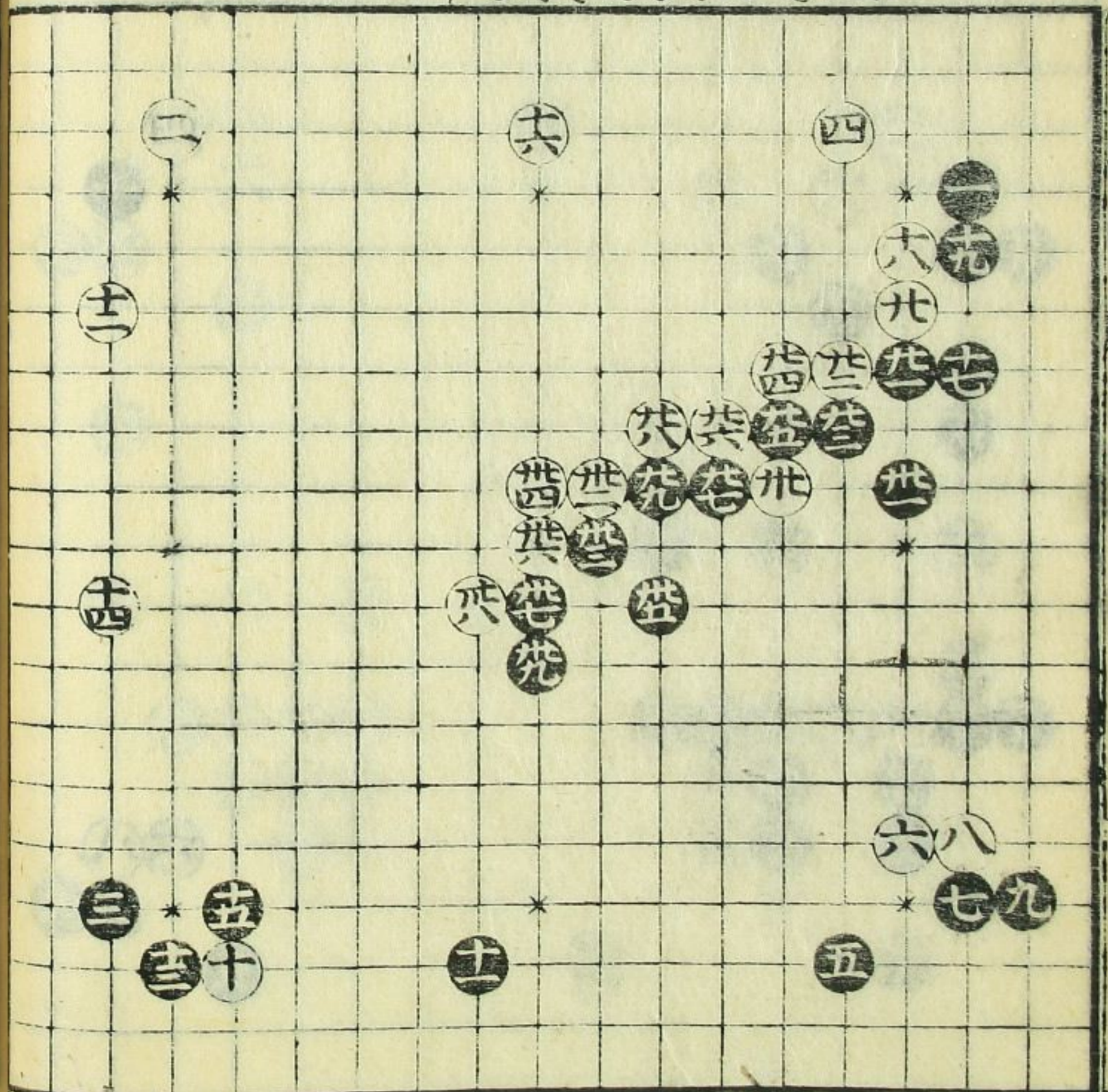


其立崩論
卷之三
七

才六十八

二十九まで

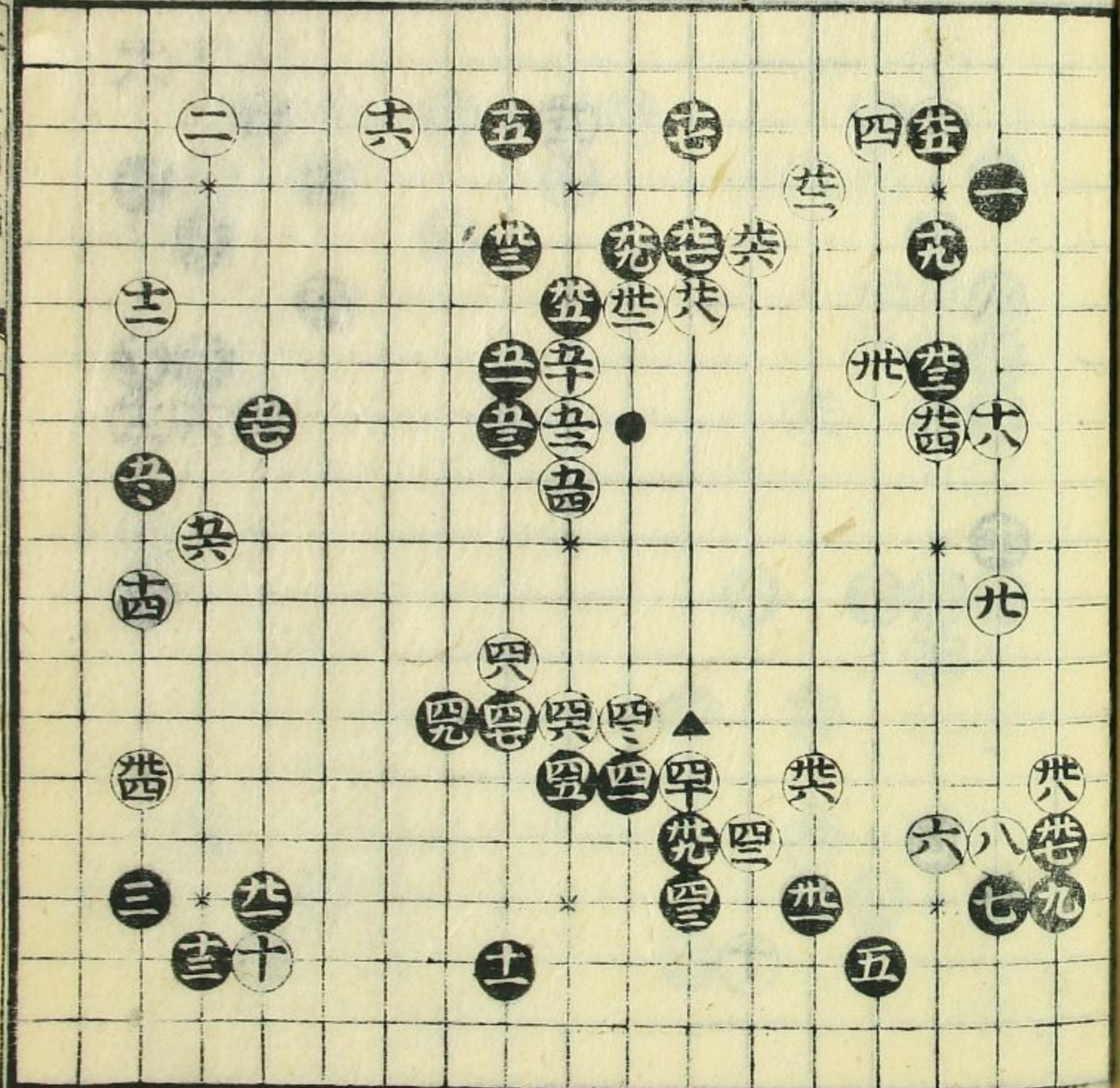
此石を傍受するに
妻にて黒の方地
形ゆめりてソヤ
白の八と六の石を
後とりてあし
毛多有り思ふに
かりりあつた新の
こころあつた
白の勢ひは扱ひ
はりりあつた
先置せては扱ひ



才六十九

五十七まで

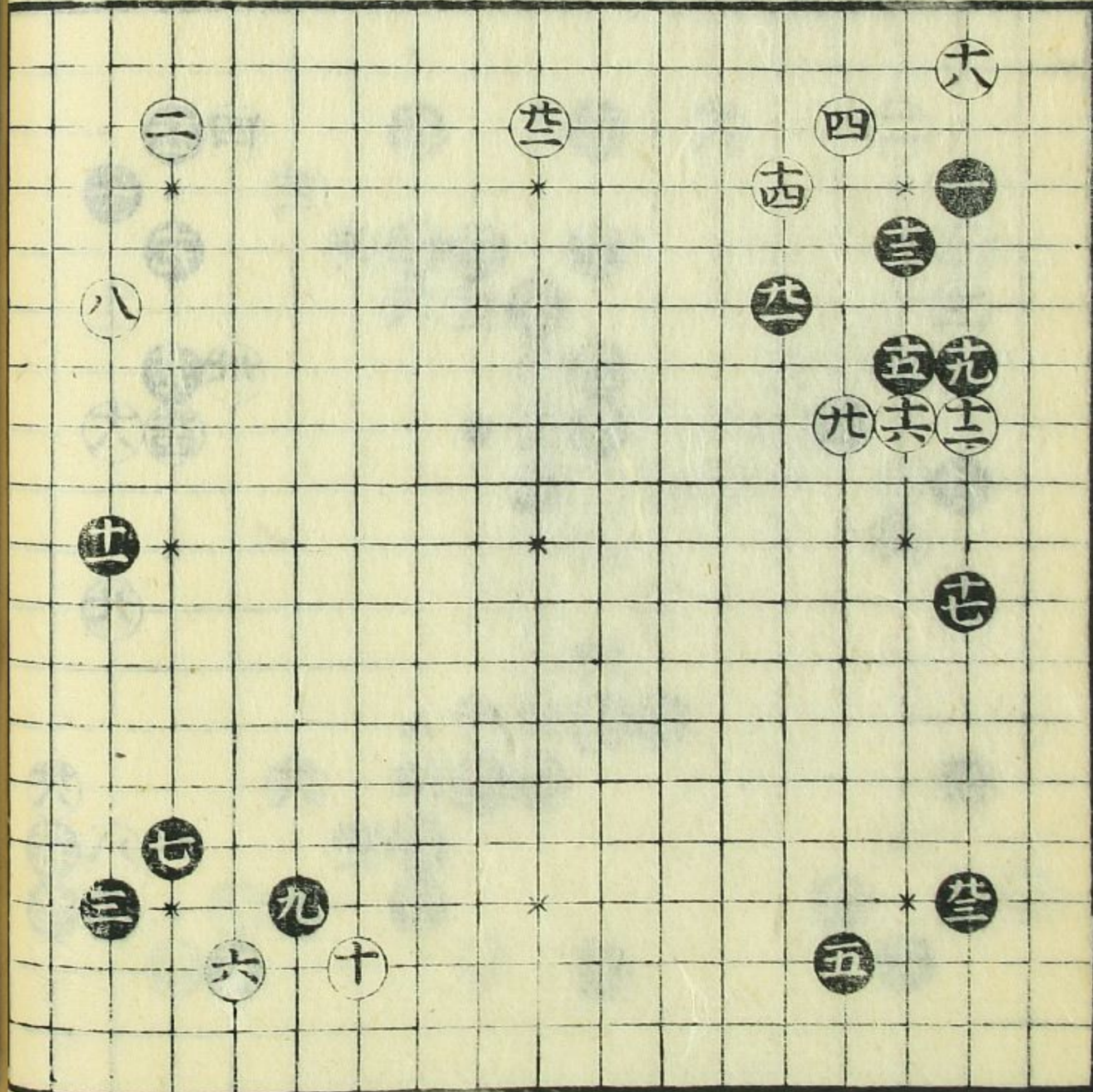
黒廿九の内白の四十
桂上扱ハ運り又
廿九の石は二回
少一石の位能く
茶のふとく少く
ゆり有りハ黒十九
と新のこころあつ
白廿六の石は
して新のこころあ
事 口傳



才六く二拾

二十三まで

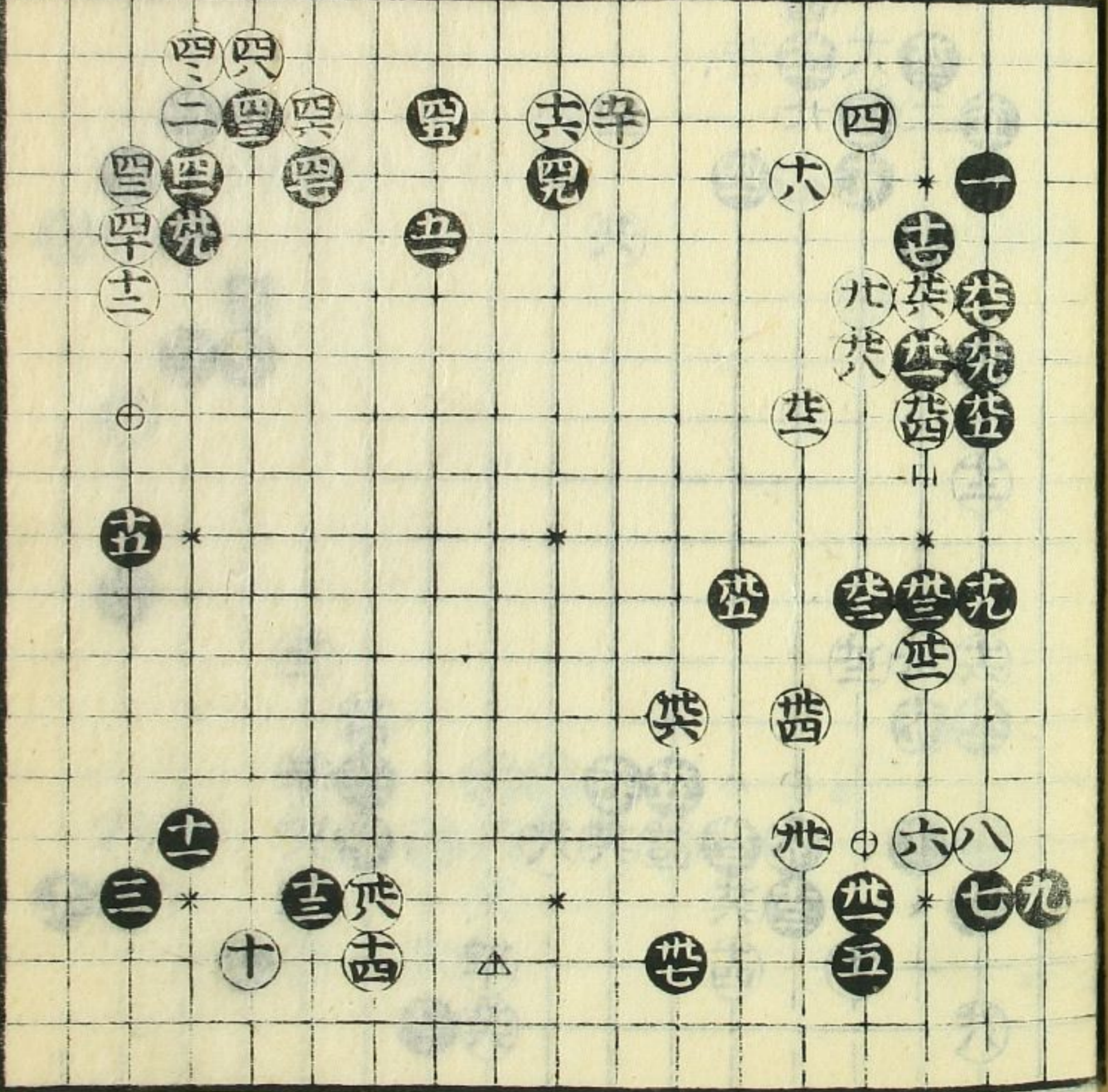
前のめく白より大
位よけて来るのは
白十八の取掛りを
含括を打たれたの
ころ黒七のひま
すむしに 口傳
白八はどのむ黒
このまですて取の
めく十とこすむら
をひかり白先並せ
て打たれ此後白面
ふし



才六く廿一

五十一まで

前のめく黒七と打
たまは決りあるとれ
ひいて白六のひま
に打て掛りなり
九五の対白ソウの
ひまはひまき
黒二十七のひま十
四のひま二回掛り
△平打○平に打
ひまゆめれ白七
すうてめきりり
斯のころく煙く打
事 口傳
白八はどのむ黒
白九はどのむ黒
ひま黒四五のひま
○平白ひまきり
白打ひま黒ひま
大場ひま十とこ
あふし



才六く廿二

五十九すく

先勢ひ怪りうる
二十五の時白く正三
△正と切○官城押
つても黒く能なり

口傳

五二の地黒五三の目

口傳

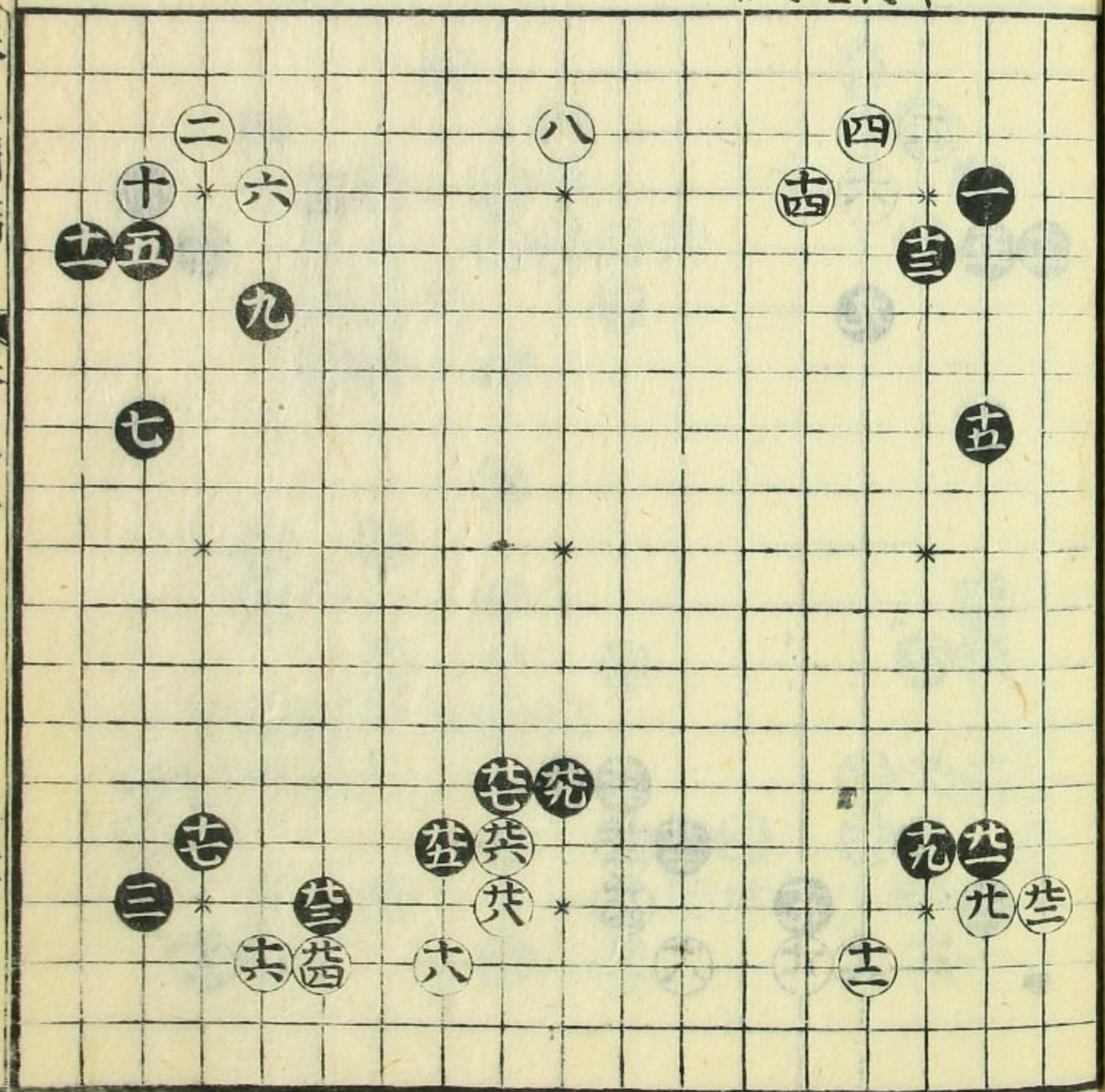
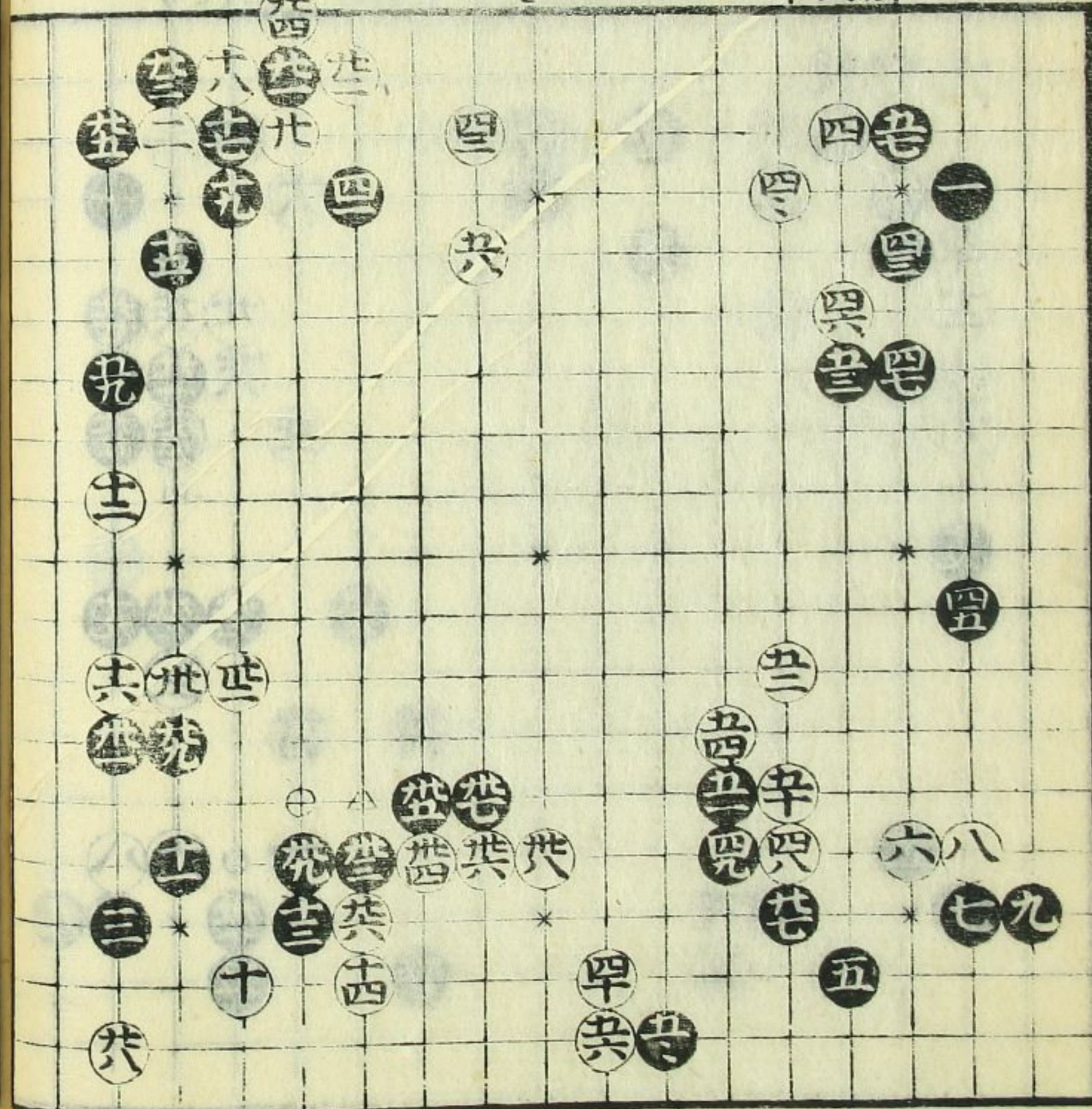
敵にうけて先をせ
てはけ強向やと白
ありし強

才六く廿三

二十九すく

此を五黒好むむや
なりつても白なきに
はくもろく黒十九
と二十一の目にて
黒程ひてはう合
能なり

才六く廿二
才六く廿三



才六く廿二

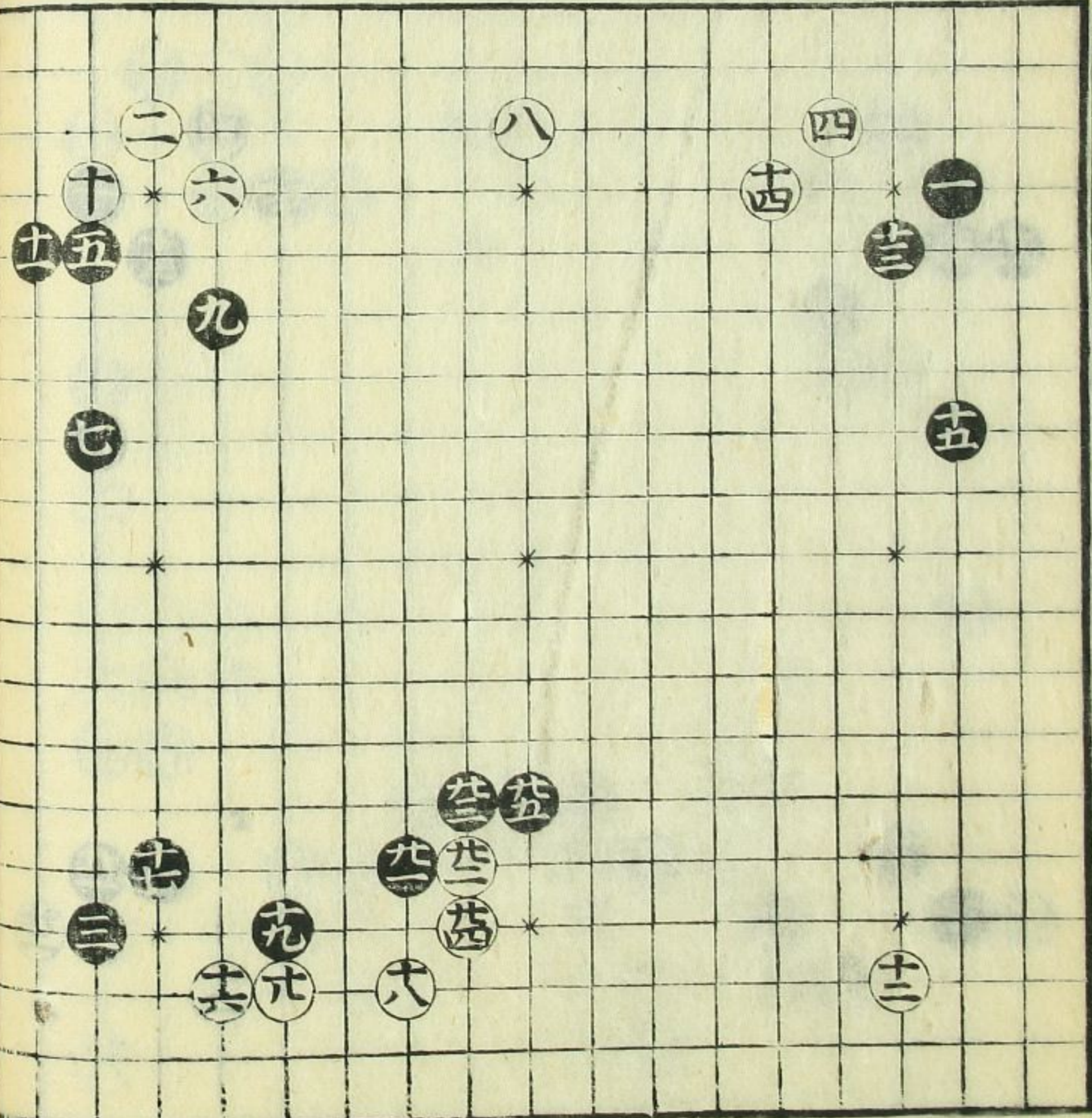
才六く廿三

才六く廿二

亦六之九四

二十五と

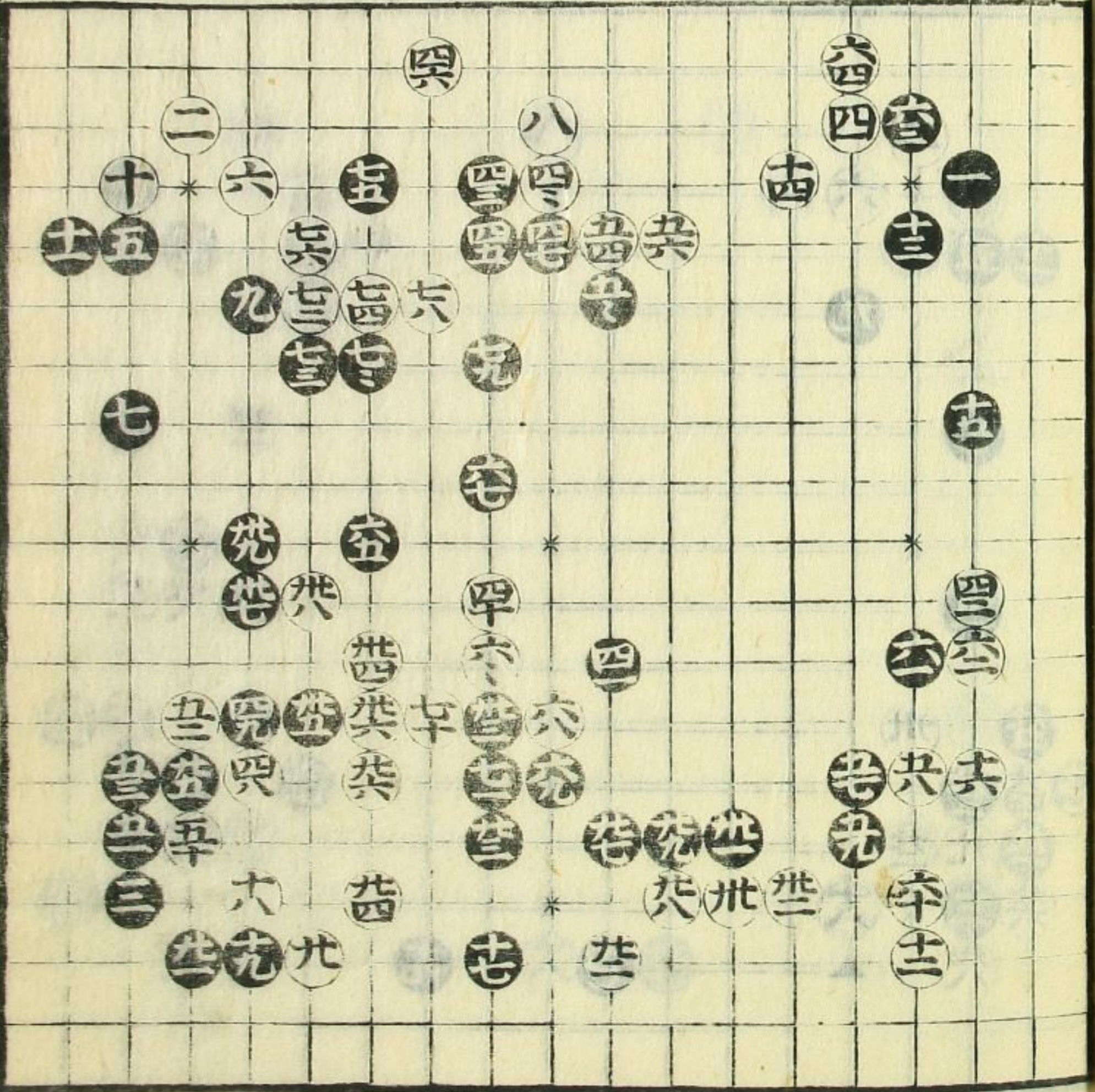
白十六の掛りかくては黒のあふはかりは二回まける



亦六之亦五

七十九と

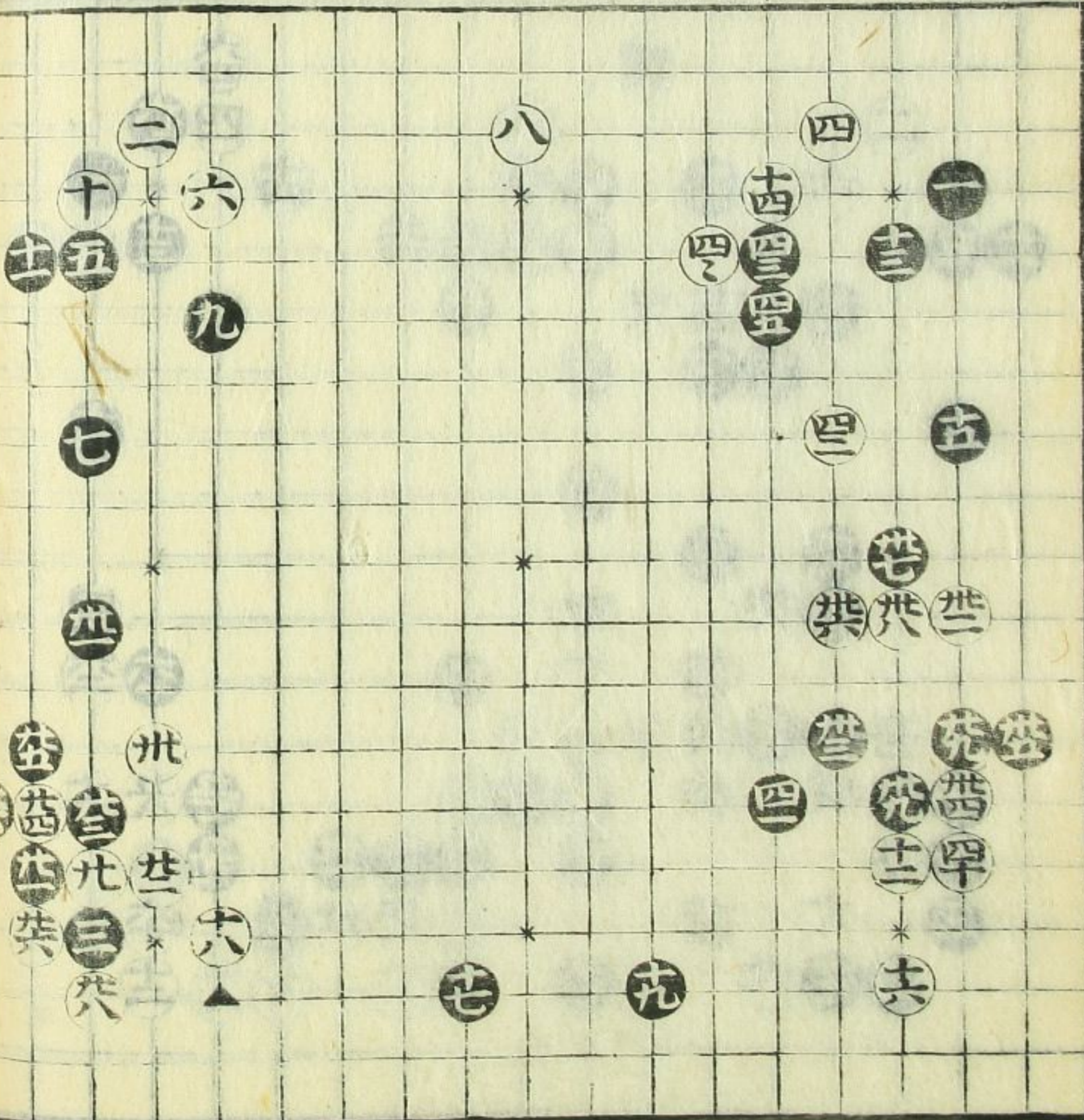
此石を先勢ひ
怪し四十の附黒四
一と上場入打事
黒四十三卒陽を
あめりおめて一
はる合とひて附
常より打り
申の大自まぐり
先又とあませ
を真るはめて
扱の大事なり



才六くす六

四十五と

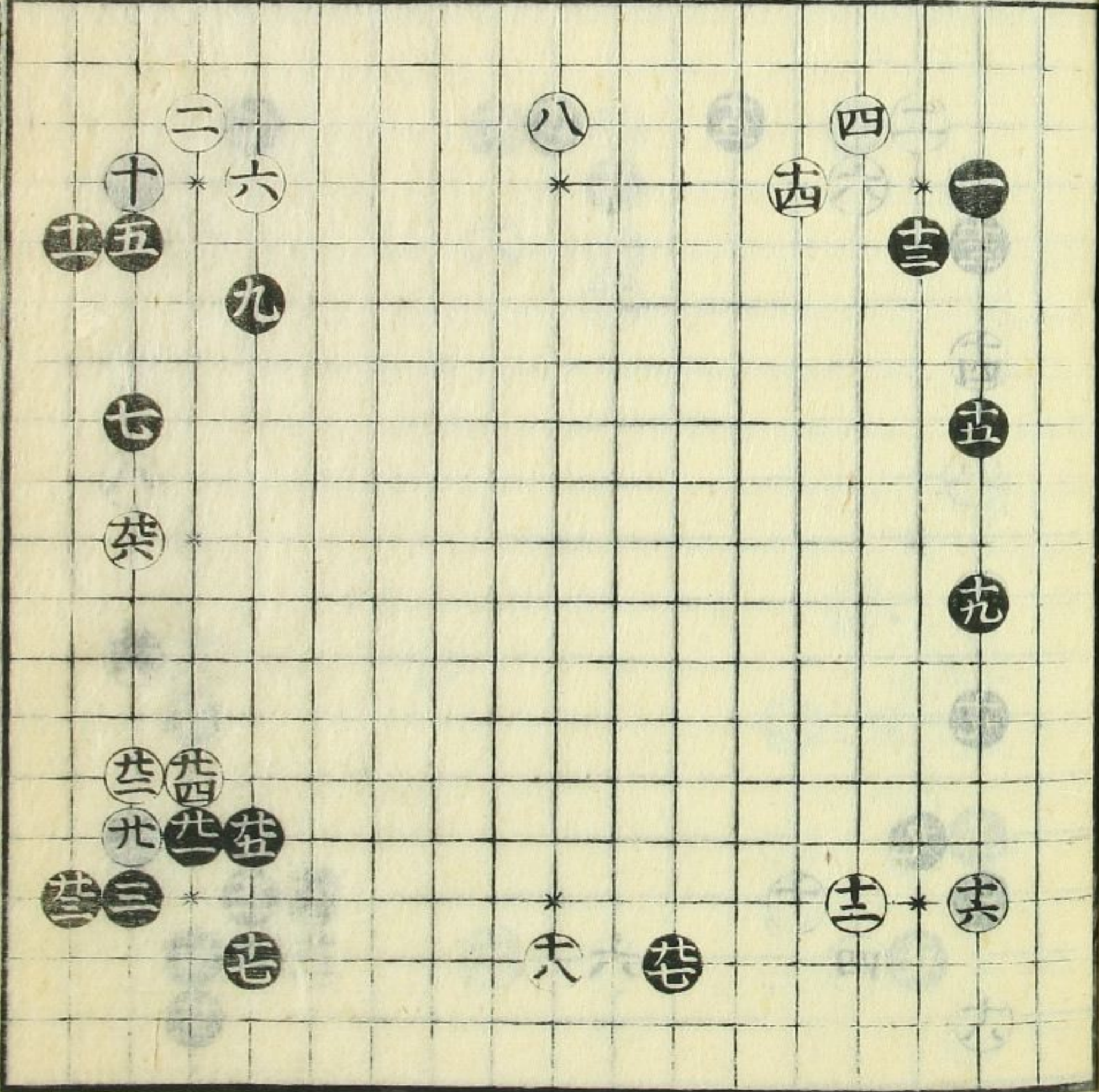
通に基りて先
勢ひは怪なり
十九のふ城前の素
のふくく△下に分
黒子去に打たぬ
有てかーはうの
ふなり 口傳



才六くす七

二十七と

先いきほひき
かぬ

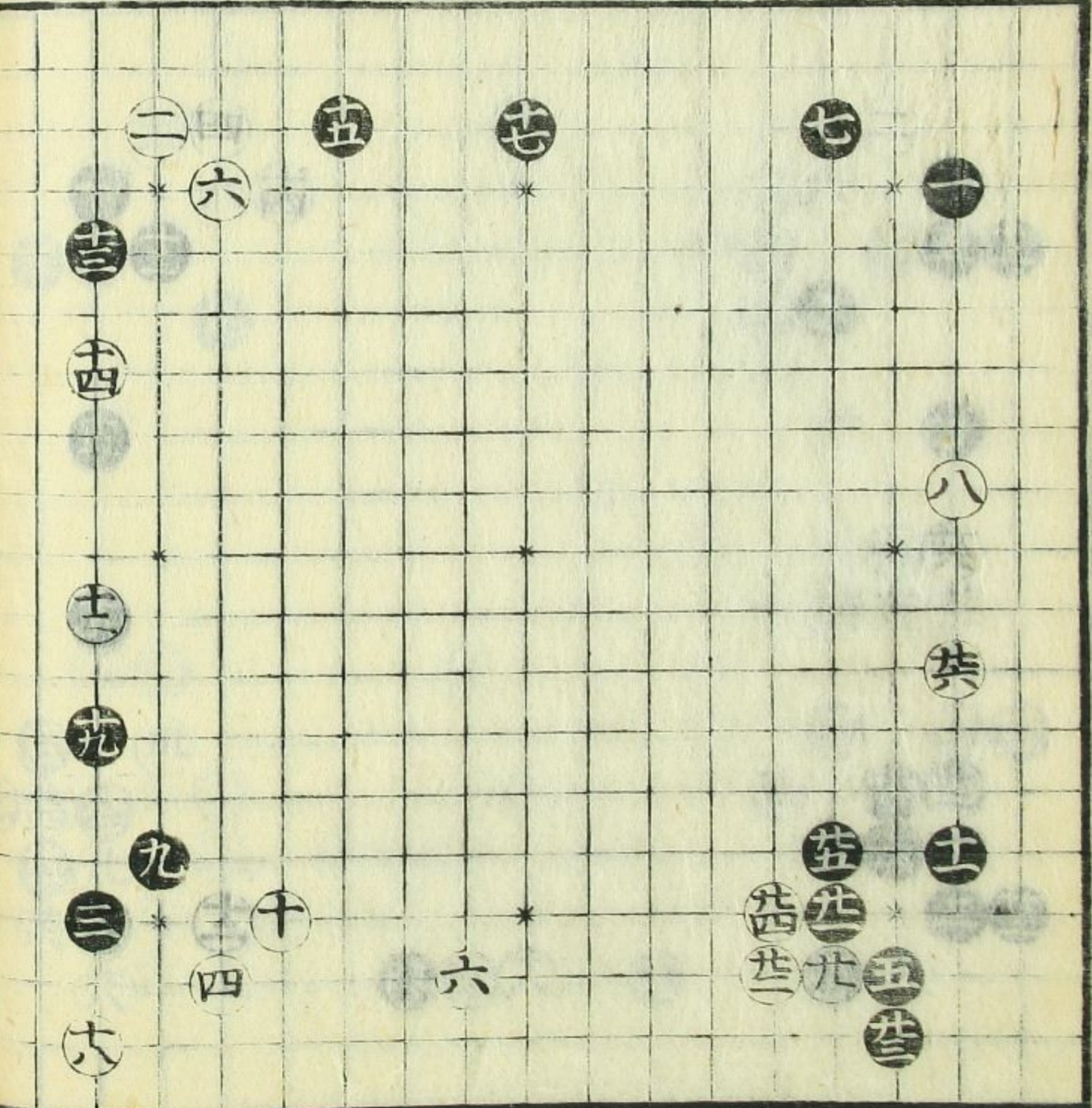


善立月編 卷之三 十一

才七二一

二十六と

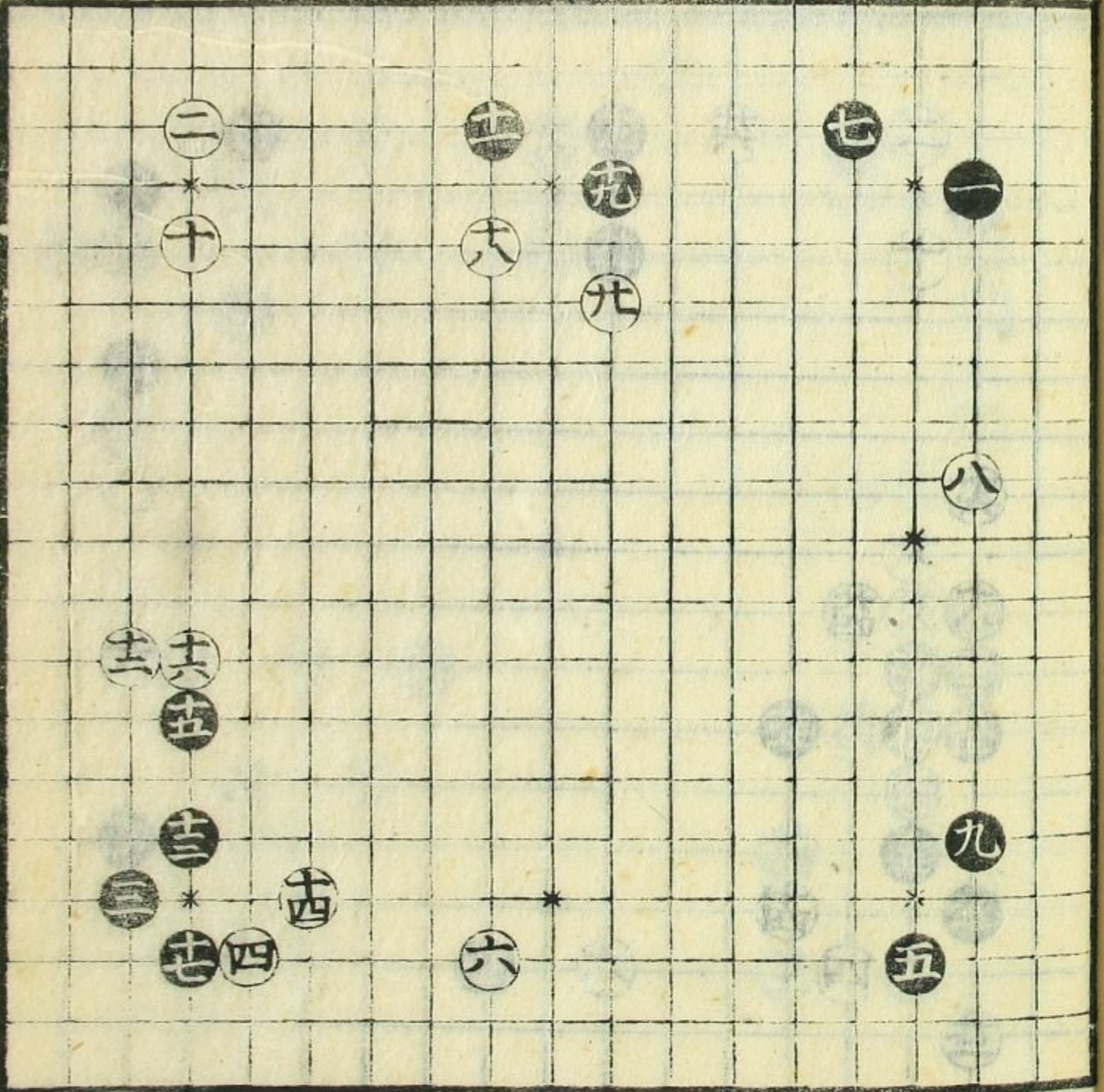
此石を先の基まで
五々黒好くして折へ
かゝるるを五五はか
ゆりたり
九のこすこす折れ時
ら二石を振りて
折又十九と動の
ことく細く折れ
にあるる黒の
きなり此をゆや
まり減りて折の
めく四と振りたか
折黒は久さら折れ
折初めへ一折末に
あるは如なり



才七二二

二十と

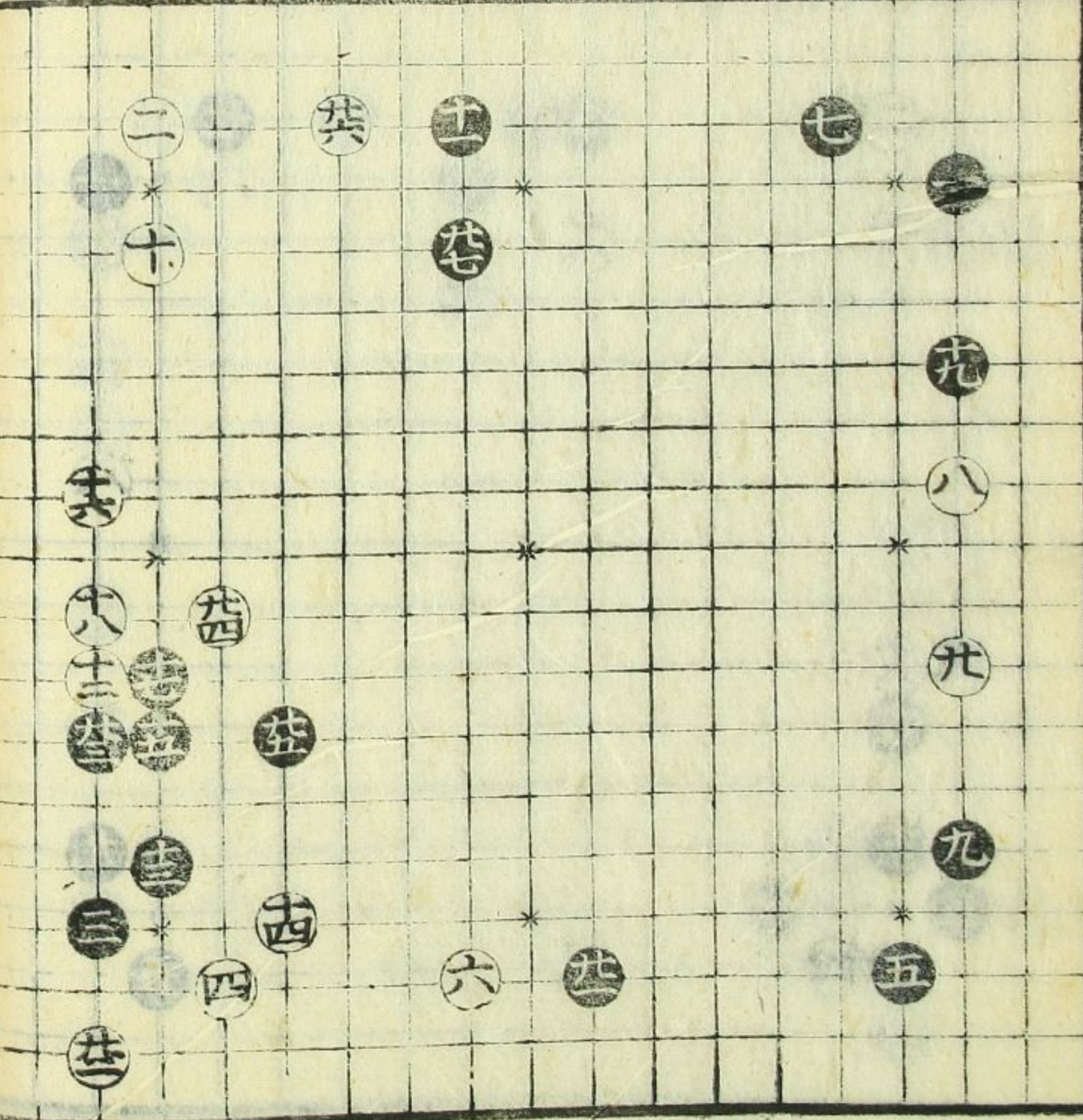
此石を黒筋れな
くして折れ基をこ
白十八の大位する
毛敵はより人一保
別のことく黒筋
白十九と折れ時
折れは如なり



才七二二

二十七

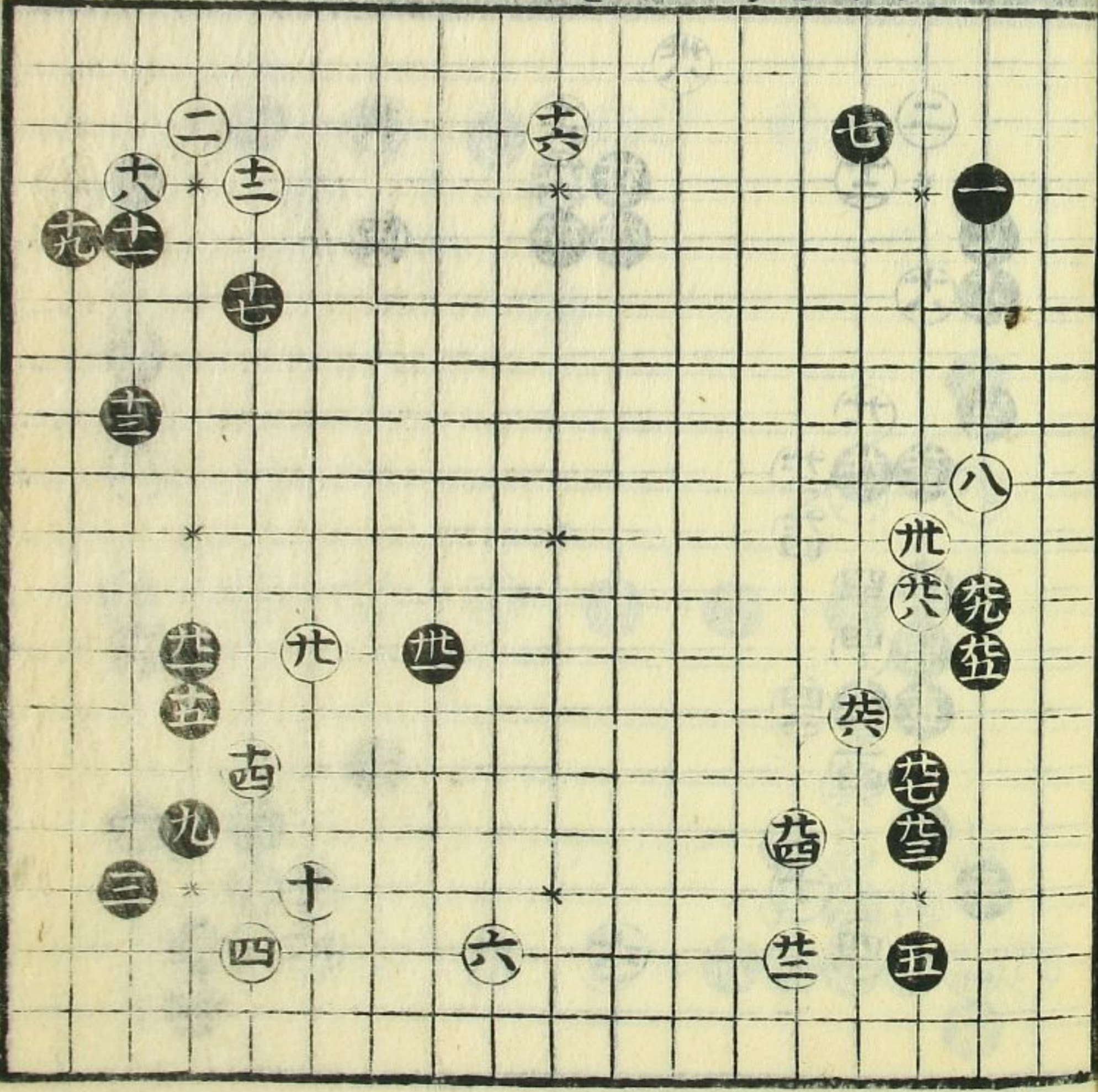
白前のことくおハ
平の湯半そゆある
少く白十六と折也
黒先勢ひせり
かつれは傍あり
を此未白の折也
きして白拉力
出して折入き三卷



才七二四

三十三

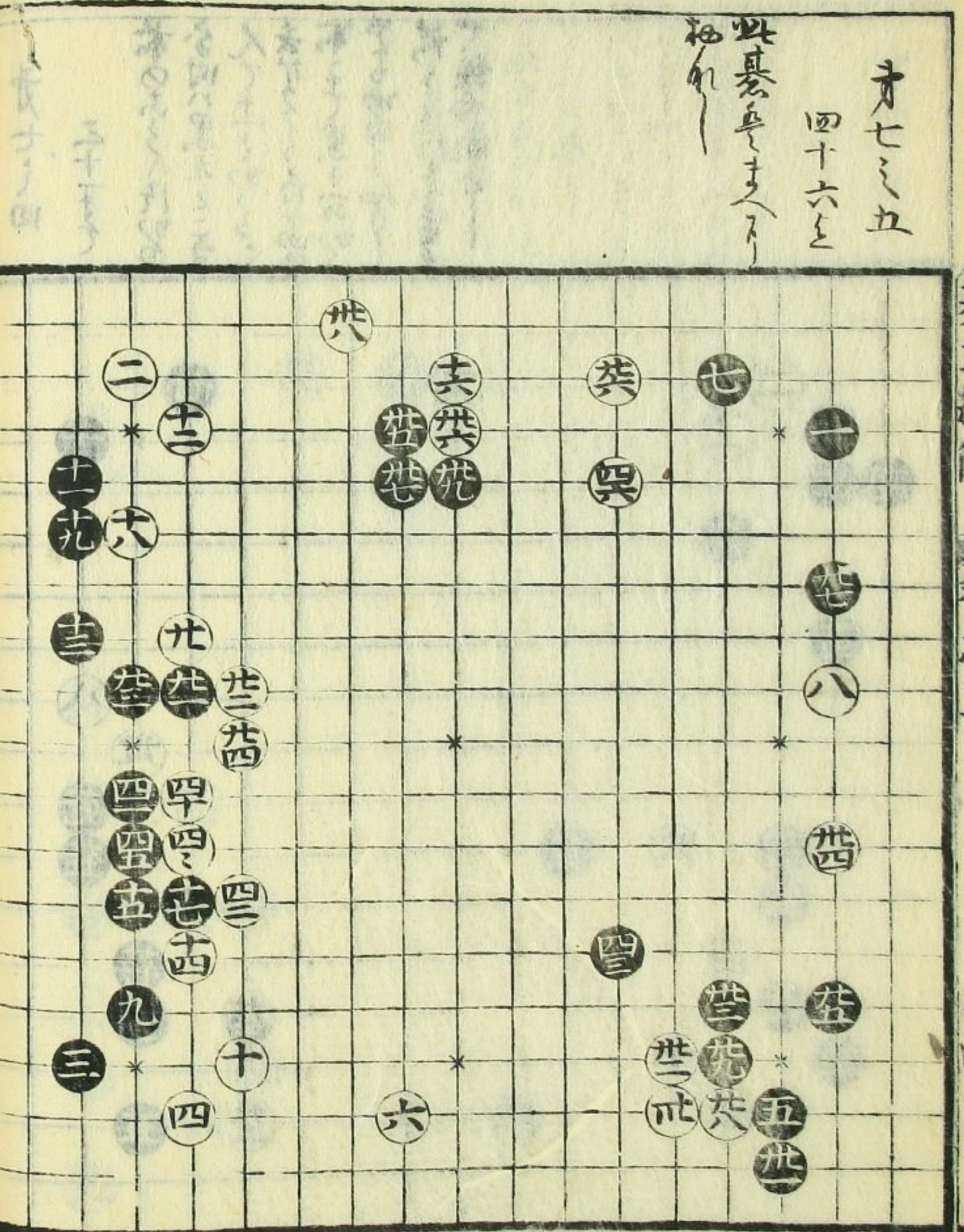
木のあつくはり
ふ内ハ黒九と二子
んて十一とわらこ
去りくく白十四の
ありて黒十一の
りもゆりゆり
はくくは先を
て板面白



才七し五

四十六と

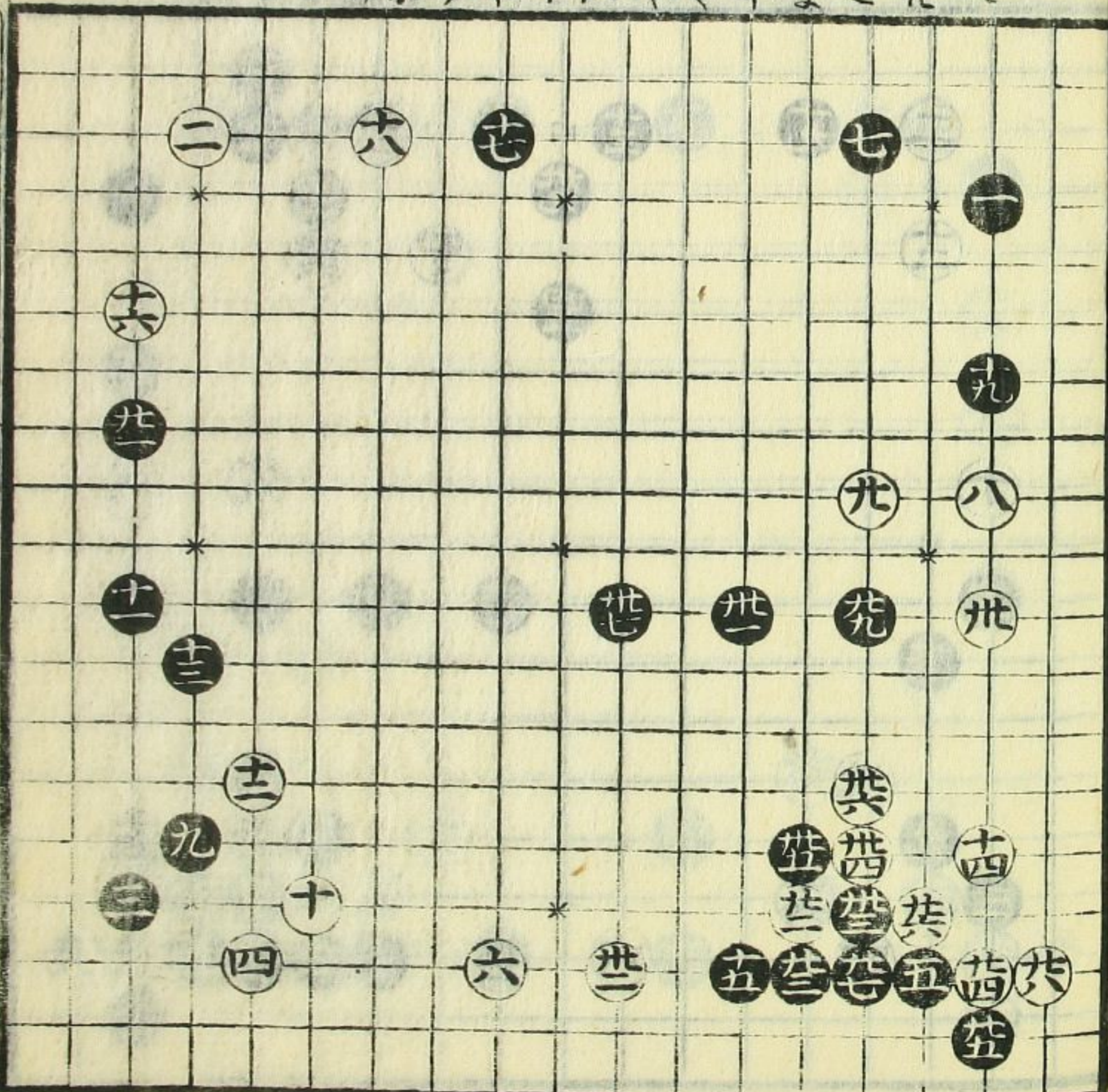
此基をまゝ入
ゆれ



才七し六

二十七と

先勢は怪し黒は
九のふちをきま
てハゆーく此取
おるは能く黒三
七と人の為合と
はやく合有るう
七のとありなり
内ハ黒十の能く
二間打てお入
一の石より白を
ばにこす合る
内征のこす有
る大事の事



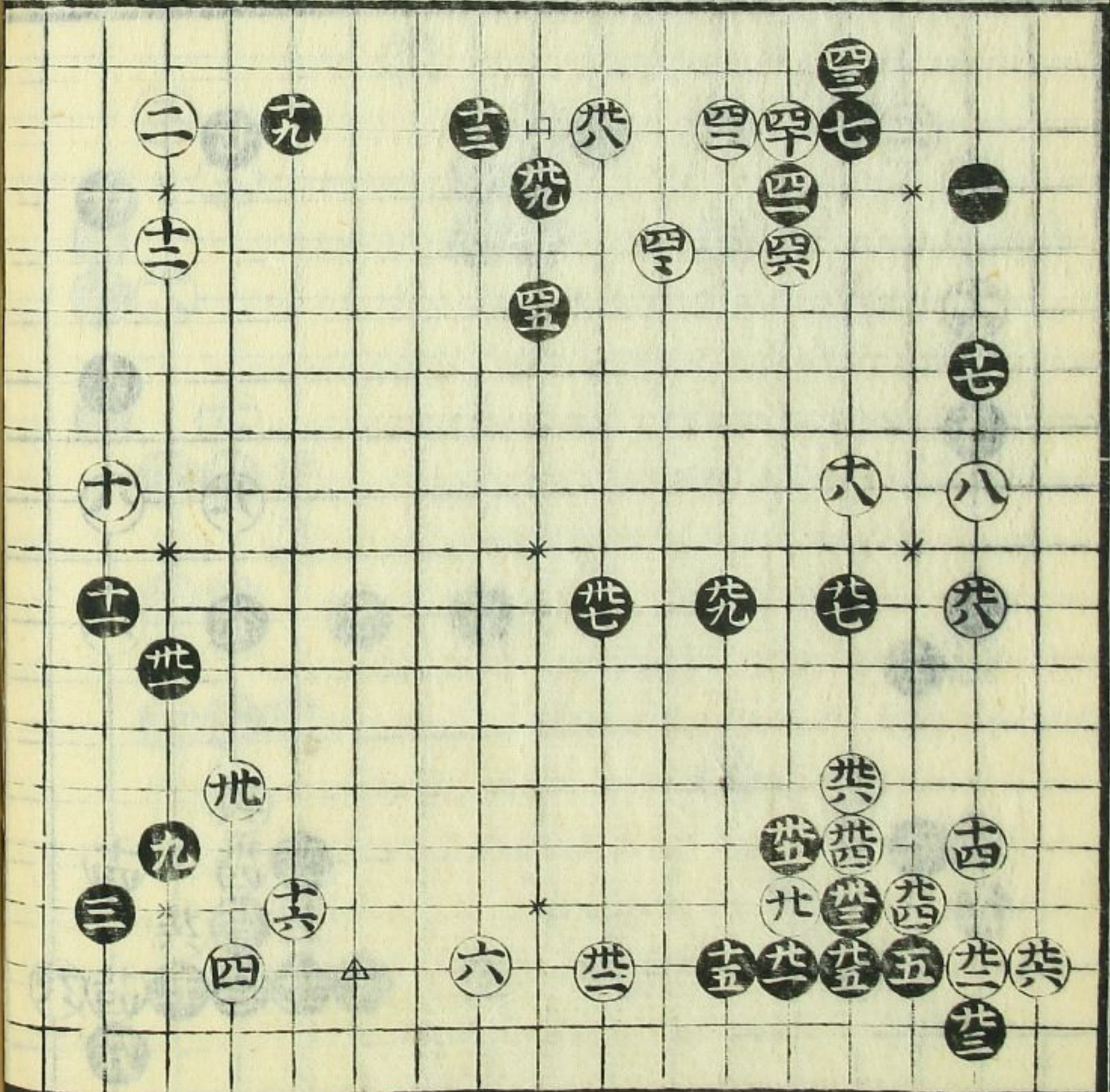
書五頁

七

才七し七

四十六連

駒のまゝく白十の
子と替へても先勢
恒なり黒十五の
白の四と二間と
△手打込を打ち黒
の七、早く打へ、白
十二と、このころ、打
くも、附七のころ、打
す、白の八を打、
黒十二の□手、打へ
す、早く、ゆ、打、
先、重、打、白も、先
打、打、

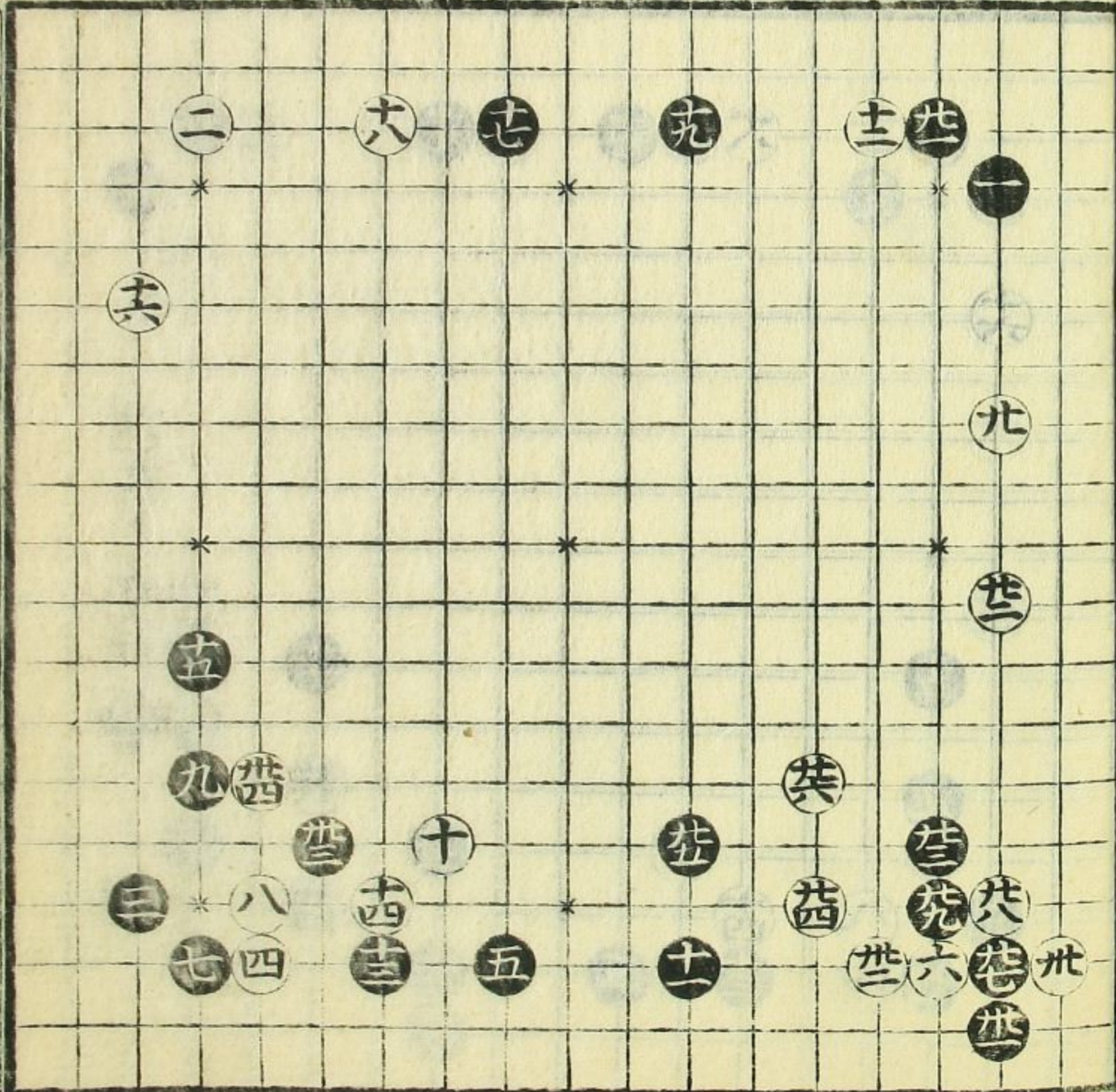


才七し七
四十六連
七十五

才七し八

二十四まで

黒五の二間、打、此
石、組、ま、り、黒、打、
黒、打、三、の、内、黒、の、志
向、に、打、く、に、も、打、又
三、打、黒、打、九、打、場、か
ま、り、白、と、取、ら、ま、す、
も、打、へ、一、早、く、打、
新、の、こ、ろ、く、ま、り、
て、何、ま、り、り、を
又、合、合、一、二、七、打、
わ、の、こ、ろ、く、ま、り、
打、た、り、め、り、す、て、
二、七、打、け、黒、白、打
に、知、り、て、打、の、め、
ま、り、打、へ、
此、其、次、り、記、は、



才七し八
二十四まで
七十六

才七し九

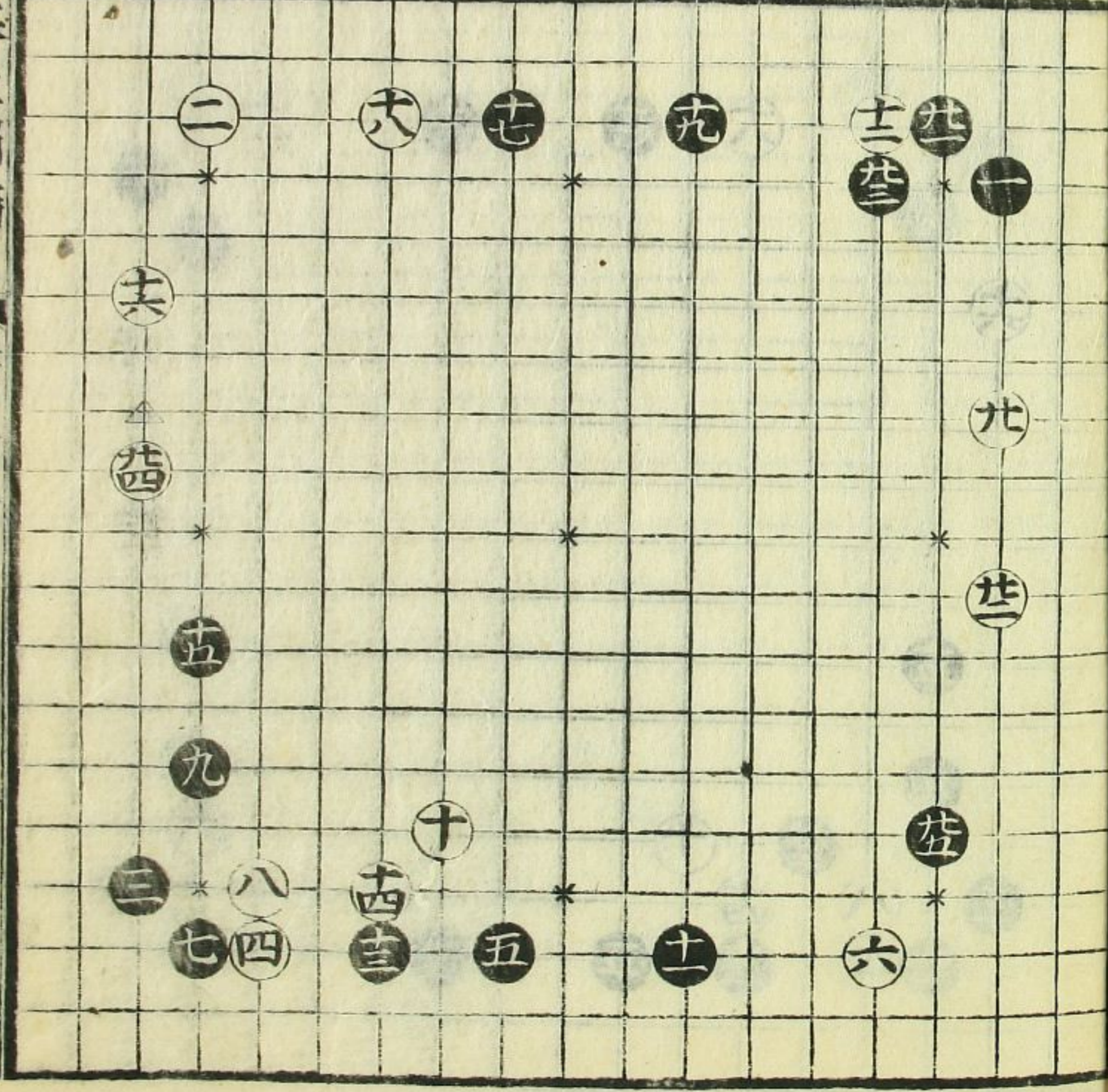
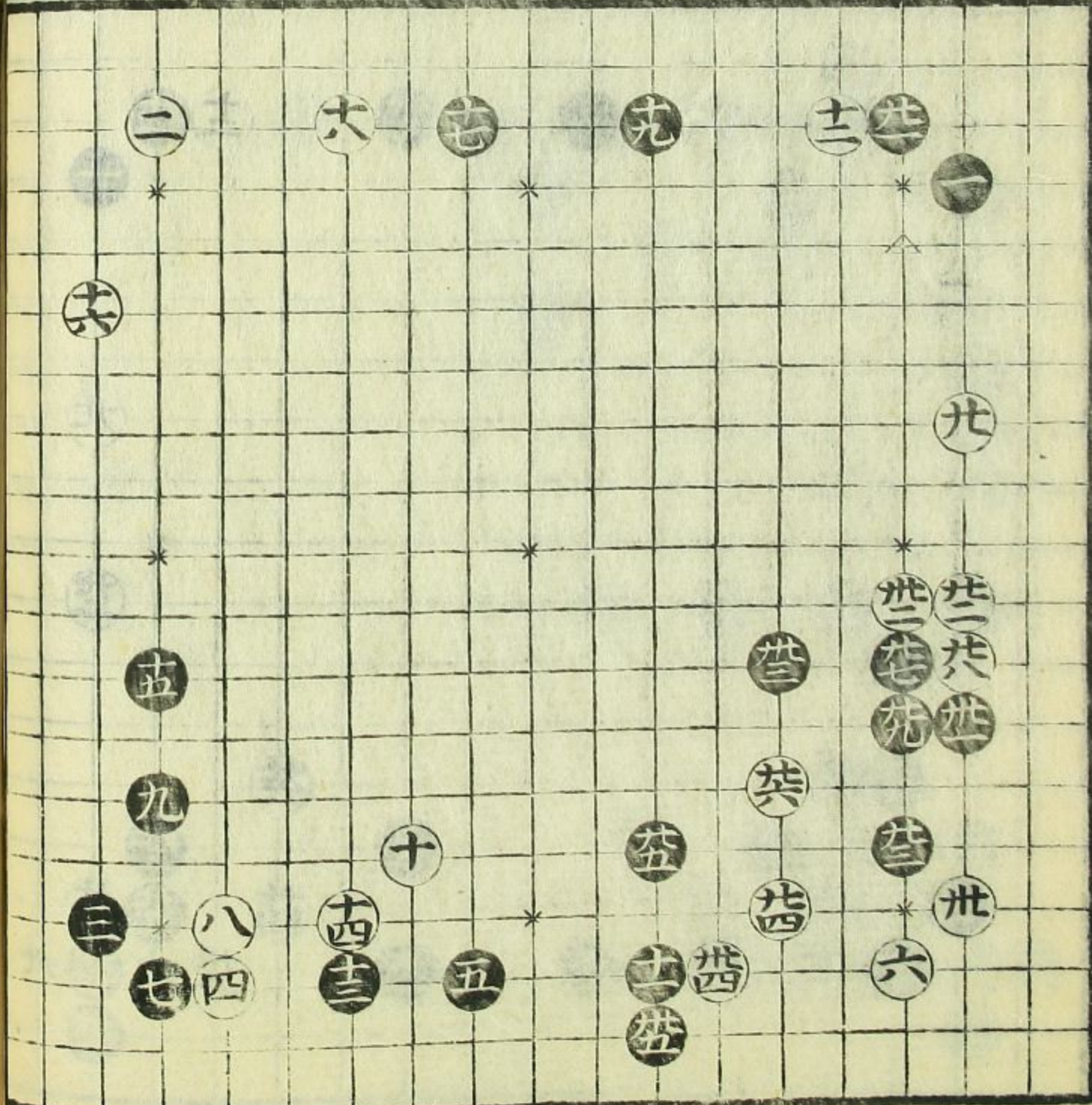
三十五と

才七の八の基の
黒七の八の△下
分けて角にける
板向もめれと是よ
ては軍一白七八の
△と七二と白八
押ハ黒角にける
△下打ハ平場
指後まで白△下
桂まで煙く先
はて生るるを黒
鳴らかり黒駒の
こころせらと△下
すしるの平上場
指後まで黒△下
て大るる△下
白十二と並は黒取
△の時のこと

才七し拾

二十五と

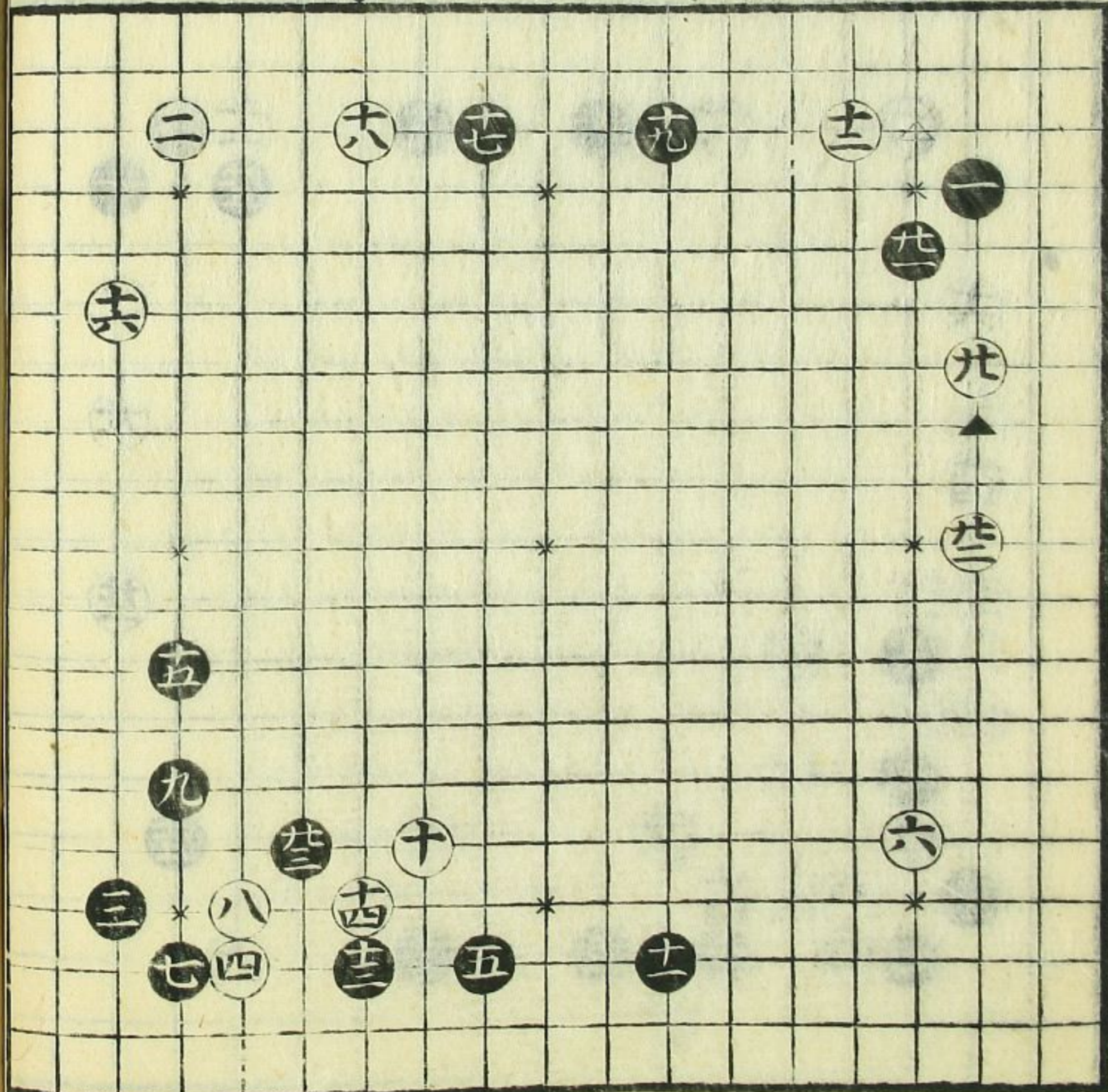
斯のことく白△と
△すしに於ても黒
先勢ハ△下
紛るる△下
二十三の△と十四の
△下△下△下△下
一目とある事
口傳



才七し十一

二十二まで

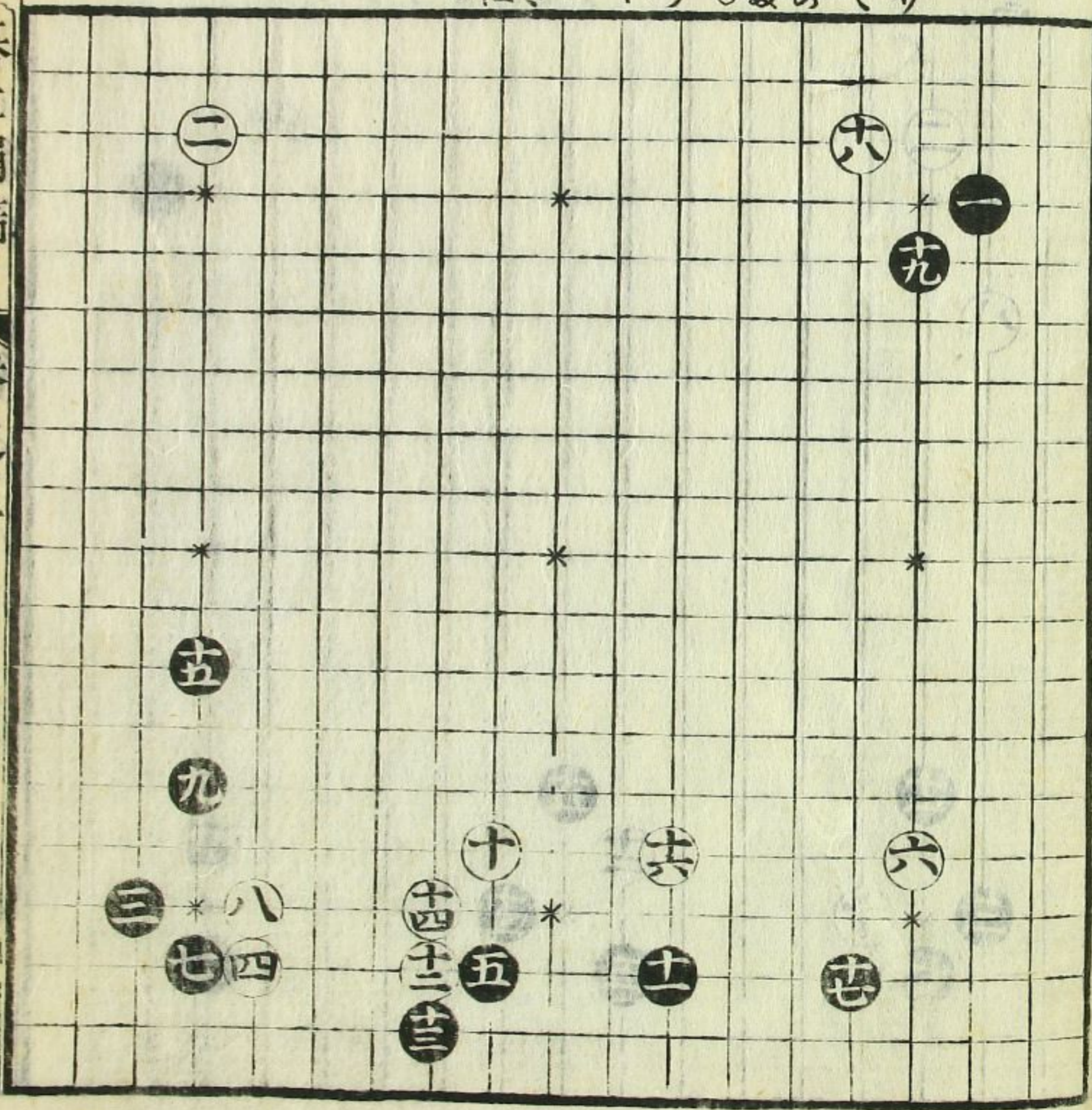
駒のこやく白六
同は打附の黒廿一
打と急よめくは
片二枚の位は
をばやく打切し
白の廿と二回打て
△下も同くは
白の六目と打附の
黒廿一と△下とす
みちたして駒の
やくこやくは
白中に位をぬか
めゆは黒の出る
残る二にサコ流
サコ



才七し十二

十九まで

駒のやく白十
は黒地(座)ゆつて
打能りく白十の
よ世(差)少して二枚
の約合位をぬこ
白の六とす△と
るやくのこやく
白の四と扱まれ
たる基よハゆき
サコ黒の十一を桂
よサコは傳

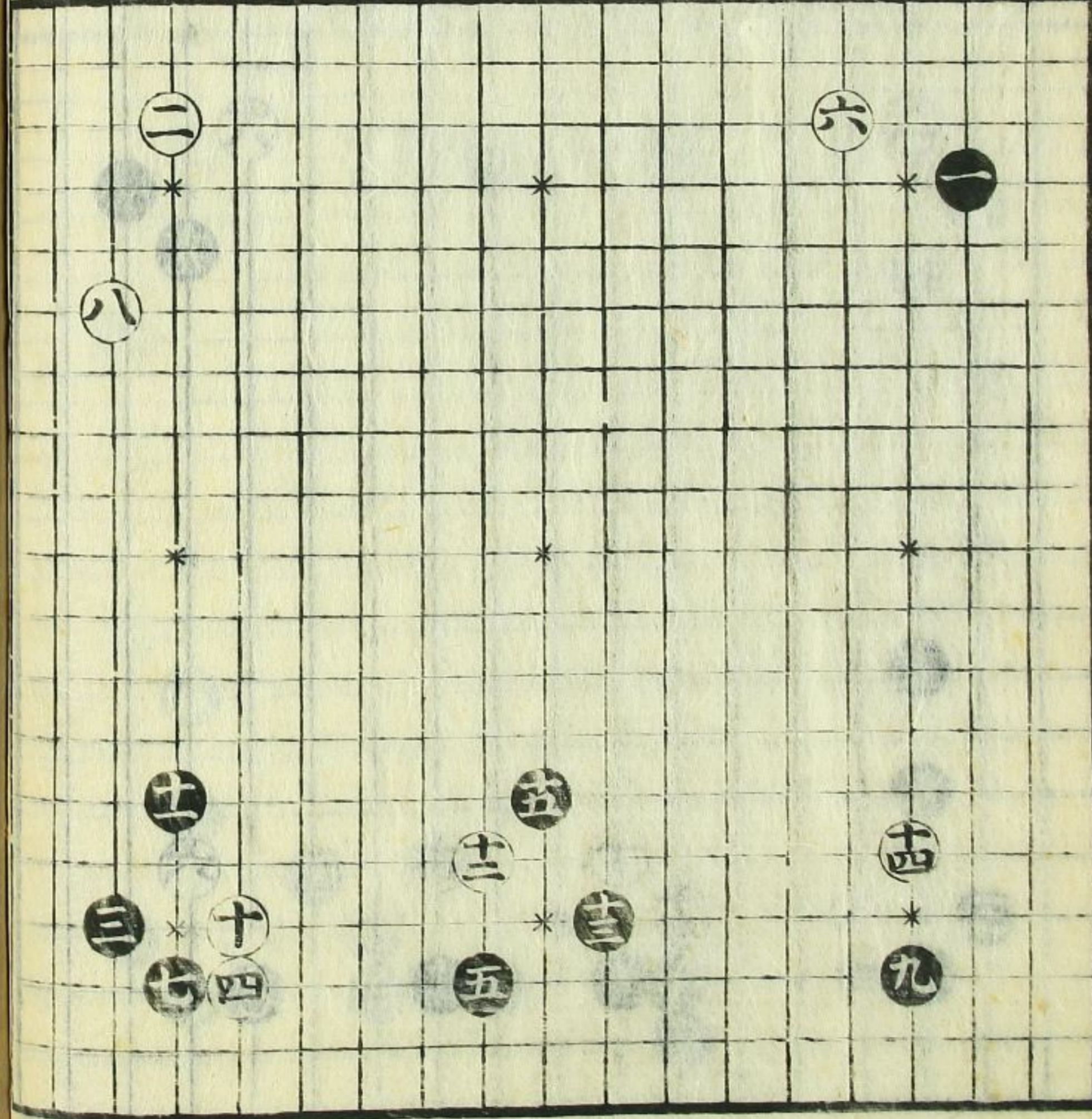


才七十三

十五まで

斯のふくく黒十
五と才内ハ白石
形ハき也攻乃
白十四の上ハ
すして先ハ白十四の
少くハ白十四の
さみハ打あハ
有利

甚立胡節版卷三



甚立胡節

卷之三

七

